都門楊柳綠如絲。勸酒頻歌古別離。行向浪華江上望。蒹葭露白月明時。

又

春風擁傳出江門。駕鶴楊州不足論。五十三亭東海道。烟花月露亦君恩。

出門口號

朝雨霏々似渭城。一杯傾盡別離情。明年自在前期在。笑綰垂楊對弟兄。

たひ衣たちいつる日は春雨のけしきばかりに袖ぬらせとや

卯の時の雨に笠ぬけはつ櫻

品川海天館（鍵屋）聯句　（見俶。吉見義方。榊原士立）。

海天春雨正冥々。（亶）驛路無塵柳色青。（俶）今日離筵須盡醉。（義方）醉來惜別望前庭。（志立）

こん年はやかてほすべき袖が浦になにぬらすらんけふの春雨　義方

大森の酒にいたく醉て輿の中にねふりつゝ。かな川のほとり

にて目さめぬ。夷曲あり誰人にや

二三合酒のみ過し六合のわたしもまらずいつかこえにき

戸塚の宿をすぎ。かげとりといふ所にて。一木の櫻さきいで

たるを見て

けふよりやゆくてになれん旅衣ひもとく花の咲そむる比

過藤澤山

此寺舊稱清淨光。新花帶雨傍香堂。至今猶示遊行跡。藤澤春風古道塲。

みちに椿の花さかりなるをみて

春雨にぬれたる露の玉椿八千代もあかぬ色とこそみれ

南鄕魚鱠

不食南鄕鱠。安知東海鮮。開樽纔下箸。一醉瓦盆前。

過小餘綾磯

松林盡處又人家。籬畔桃花雜菜花。驛路行過梅澤去。遙聞海上浪淘沙。

きのふけふはやこゆるぎの磯の波たちかへるべき時をこそまて

過函嶺

雨霽函山紫翠凝。莓苔路滑石稜嶒。關門百二應須固。天險尋常不可升。臨水每緣青壁下。

攀林又入白雲層。怪來笑語聞村落。勸酒胡姬媚自矜。

其二

天正神兵下此城。徒傳五世北條名。崖餘二鼎祠壇古。影落雙峯鏡水清。猿狖已愁蛇倒退。
烟霞無盡鳥哀鳴。欝紆高岫過關去。紫氣遙生富士平。

ふるさとをふた夜へたてゝ玉笥はこねの山の明ほのゝ空

三島道中遇關叔成自南紀還

東去西來思萬重。途中傾蓋喜相逢。行過三島見仙客。來自紀南熊野峯。

浮島原望芙蓉

都門日々望芙蓉。芙蓉遙隔萬重峰。出都三日微雨暗。春雲靄々綠陰濃。舉首芙蓉不可見。
不知此處神秀鍾。今朝早發沼津驛。兩行夾路數株松。時褰轎簾望咫尺。芙蓉一片雲猶封。
但有蘆山橫大麓。纔開半面美人容。西子捧心顰翠黛。葉公好畫見眞龍。行々乍失蘆山色。
大麓層雲欲盪胸。八葉芙蓉屹相向。轎夫下擔客駐筇。欲見芙蓉眞面目。會向浮島原頭逢。

田子の浦といふ所にて

もしほ燒あまならなくに旅人の袖にもかゝる田子の浦波

薩埵山下酒樓

薩埵山前望嶽亭。魚標酒旆接前汀。烟波隔斷蓬萊路。一帶連峯黛色青。

清見寺

清海關頭祇樹林。青松遠映白沙深。漁舟驛路杜荀鶴。曾入征東軍監吟。

三穗松原

古松原上一漁磯。神女翩躚掛羽衣。謫在人間何所樂。紫煙深處去無歸。
年月はきよみか關をへたてゝも又たちかへりみほの松原

うつの山をこゆとて

夢の世のゆめにも人にあはぬ哉うつゝにこえしうつの山道

度大猪川

日落長亭至島田。西風吹雨暗春天。岸頭懸火明於晝。直度洪流大豬川。

彌生三日菊川といふところにて

春秋もおなし流ときく川にけふやうかへん桃のさかつき

さやの中山をこゆとて

これもまた命なりけり年波のいそぢにこゆるさやの中山

ことのまゝのみやしろとおぼしき前をすぐとて

花鳥にあかぬ旅路はわが思ふことのまゝなる神もみそなへ

掛川の城下にてそばむぎくふとてれいのざれことうたよめる
ものあり

湯豆腐の葛布ならでさら〳〵と一はい汁をかけ川のそば

此あたり葛布うるもの多ければなるべし

三日過袋井驛狂風大起

三日狂風驛路塵。無由野店酒沾唇。遙知故國比隣會。樂飲浮杯少一人。

度天龍河

大小天龍古渡頭。招々客子競行舟。狂風一起揚沙礫。不似流觴曲水遊。

宿濱松驛

遠江征客度天龍。洛水蘭亭不易逢。旅館殘燈思昨日。長風吹斷海濱松。

やよひ四日の朝とく濱松の宿をたちいつるに。ゆくてに槇の
木多くたてり

はま松のえださしかはす眞木の葉に霧たつ秋を思ひこそやれ

今切渡舟中作

縈回洲渚古松枝。絶海長風命楫師。千古波瀾同一碧。至今猶憶錬公詩。

（僧虎關師錬詩云。左海右湖同一碧。長虹併飲雨波瀾）。

はま名の橋のあとをたづねて

いにしへのはま名の橋の跡とへば風ふきわたる松の一むら

觀潮坂

行上觀潮坂。一層高一層。遠江七十里。遙指一孤燈。

赤坂のすくにて大江定基が事など思ひいでゝ

家を出てもろこしまでもゆく人の心をとめし赤坂のやど

岡崎城（一名龍城）

麗譙高擢挿長空。二十七盤山郭中。憶昔龍城雲起日。三河草木八州風。

矢はぎの橋をわたるに

ものゝふのやはぎの橋のはしばしらくちぬ名にこそいらまほしけれ

度桑海

布帆阿那駕長風。萬里桑滄指掌中。解道船如天上坐。回看春水遠連空。

又

朝發蓬萊宮闕傍。烟波縹渺帶晴光。長年三老齊相報。繫纜城頭是勢陽。

西村馬曹（名貞字節甫）者四日市逆旅主人也。以去歲十月死。其弟
將其子見。慨然成咏。

長亭短亭生死路。東去西去馬蹄塵。光陰百代爲過客。天地誰非逆旅人。
ほら鳥の陵ありときくに輿をはやめてゆけばかひなし
みさゝきはいづことへばほら鳥の目わたるよりもはやく過にき

關驛尋花

曲徑尋花入。丁々伐木音。橋隨流水小。松抱故關深。猶有黃門詠。長傳芳樹吟。低回不敢
過。休坐一株陰

京極黃門の。ふりすてがたき花のかげ。とのたまひし木を。
えぞ櫻とて今も猶のこれり
言の葉はえぞしらぬ身もすゝか山年ふる花のもとにこそよれ

關驛夢還故鄉

驛舍孤燈耿一床。暫時飛夢在家鄉。分明親戚盡情話。不道江山千里長。

鄉筆山

鄉筆山頭紫翠迷。當年書史不能題。茂林疑入麻源谷。躑躅如過五渡溪。

行經鈴鹿山

驛路鈴聲度鹿山。阪頭征客苦躋攀。口碑猶說將軍事。不使鬼神據此間。
きのふみつるえぞ櫻の花一枝を手折て。輿の簾にさせるが
ほぼみて見ゆれば
きのふまでえぞ過がてにみし花もほぼみてのちは匂ひだになき

勢田橋望三上山（山一名蜈蚣）

蜈蚣嶺秀翠煙重。下有長橋似臥龍。行自琵琶湖上望。宛然東海小芙蓉。

暮春登園城寺後山

圓城精舍帝城隅。近市浮煙占一區。翠黛晴開馬蛇嶺。蒼波春澹鵶鵜湖。百花時節人相麗。
八詠風光賞自殊。昏黑上方如不至。寧知絕頂有浮圖。
日の岡の坂を上れば千本松といふ。こゝに一木の花咲いで
たり
春の日の岡へのさくら一もとに千もとの松もおよぶものかは

入京

三條廣路二條城。行度長橋入帝京。不識禁門何處是。紅塵靜處彩雲生。

神泉苑

舊苑神泉長綠蘋。迎風猶憶昔時春。唯餘善女龍王廟。不見乾臨閣上人。

祇園酒壚

洛下祇園花滿樹。淮南佳味客傾盃。欲褰葦箔當壚女。素俎金刀切玉來。

春夜乘舟下淀河

伏水春流下淀川。朧々月色對愁眠。八間樓下天將曉。一夢宛如五十年。

文化丁丑初春將刪舊稿點竄一二。今而思之幾十七年矣

六十九翁　南畝　覃（卷之下終）

改元紀行　終

杉田日記

清水濱臣

江戸の南。程が谷の水うまやより。いくらも距らぬ東。杉田といへる里あり。久良の郡なるべし。こゝに梅いと多く咲つゞきて。目路のかぎり岡谷にみちぬとぞ。幾春か聞渡りつるに。とひ見んの心はありながら。何くれと障らふ事のありて。年毎に空しくのみ過い來つるを。今年はいかでと思ひ立ちぬ。む月中の二日の事なりけり。かねて契りおける友だち三人四人ありつるが。あるは心地そこなひ。又は障らふ事の出來たりとて。又の年にとぞいふなる。さりとてやむべきならず。なか〳〵に一人ならん心に任せて。をかしきふしもありぬべしとて。僕一人具せしも品川の驛よりかへしやり。たゞ小笠一つを伴ふ物にて歩みゆくに。海の面ゆほびかに安房上總の山々まよ引なして。ほの〳〵と霞み渡れるさま。言はん方なし。春の海邊は住吉にのみやは限るべきと思ふも。語らひあはすべき人しなければ。たゞ心の内のみなり。蒲田の村に至りぬ。和名抄に。武藏の國荏原郡の鄉名に。蒲田（加万太）とあるは。やがてこゝ也けり。こゝの東大路よりこなたを。梅の木村と云ふ。名におへるもしるく。こゝのわたり梅いと多し。

總て所の民のなりはひとして。そが實を取りてあきなふとぞ。さて後に梅の木とは名つけし村の名なるべし。あるが中に三右衞門とよぶが園に。いと多く植渡したり。盛には五日六日もまだしきよと見ゆれと。ふくめる程のかをりあかずなつかし。まばし休らひて又もなど契りつゝ立出ぬ。かれが家の北に隣りて。辻やしろのあるを稗田の神社といふ。こは延喜式にのりたるみ社なるを。ふるしばかりの廣前もくづれ。鳥居傾きて。いとわびしきさまなり。すべて式内の社ども。大方は跡も完かならずなりて。式外なるが却りて榮えゆく多し。世のうつろひ行く樣ばかり。哀れにはかなき物はなかりけり。今賑はふ宮居どもゝ。千歲の後はいかにおはせんかし。此御社にのみ限る事にしもあらねど。折にふれてやくなき事も。思ひつゞけらるゝ者なりけり。六鄕の川を渡りて。川崎の水驛にかゝる。こゝに田中兵庫といふ人あり。同し旅屋の中にも。おもたゝしき際なり。かねて渡邊章が知るすぢありて。訪ひ見よけしうはあらぬ者ぞ。いさゝか雅事を好みて。歌よみ笛吹く業をもすなりなど言ひしかば。訪らひしに。物へ行きぬとて在らねば。歸さにもとて過行く。鶴見生麥などいふ村々あとになして。金川の宿に近づきぬ。此あたり總て正月のはじめの程は。賤か家よりうなゐ童ども出居て。大路へあやしのしめ引はへて。往來の人を遮り留めつゝ。さへの神に酒錢と。かしかましう言ひさわぐめり。あはれ田舍にこそ古言の殘れるもあるなれ。かゝる童べどもの。いかでさへの神といふことを

ば聞知りて言ふならんと。獨り心の内にめでらるゝに。江戸の者。又近きあたりの人と見ては。さもせぬを。國々より伊勢の大御神に詣つるが。群れ行くをば。必ず此しめに引とゞめて錢乞ふなり。笑ひてさながら過ぐるもあり。行きわびて錢とらるゝもあり。中にはまめだち怒りて。かのしめ蹈みしだき引切り捨てなど。荒けなく行過ぐるもまじれり。誰かは道祖神といふ事。たどり知る人のあらん。鶴見のあなたよりして。富士のねいとよく見ゆ。今日は殊に塵ばかりの雲もかゝらず。白く秀でたるに。下つむら山は青々となみ立てり。其白きと青きが霞にこもりて。朧かに見なさるゝさま。譬へんに物なし。芳宜園にて。此月の末つ方に歌よむべきなりとて。豫め春日望山といふこと書を出しおかれたるを。いかで此さまを有のまゝに。つゞけても見ばやと思ひて。おもほえず金川まで來つれど。歌はえ出來ざりけり。なま〳〵ならんは。何のせんあらじとて。さてやみぬ。はじめ門出せし折は。此宿にやどりてと思ひしを。友なふ人のなさに。まぎるゝ事の少き故にやあらむ。未のさがりには。まだ程あるさまなり。こゝに諏訪の大神をいつき祀れる濱邊を。宮の前と云ふ。そこより我が心ざす杉田の北。芒村といふへ。小舟いひこしらへて。則ち打のりて渡る。こゝの海いと浪靜にて。本目の塙よりこなたは。圓らかにはらまれて。南の方はこの芒村のつゞきの。磯山にて風をきりたれば。げに池の面を見たらんやうに。平らかなる海づらなり。高き山と賴む柁取は。たけ低き男の童にて。よ

はひ十に一つ二つも餘りつらんとおぼしき。いさゝか頼もしげなきやうに危ぶまれしを。棹のつかひざま。おしきる櫓かひの手つき。年たけたる川長らが及ぶべきにあらず。げに身は習はしの者なりけり。海のおもて今の道一里とはいへど。二十町ばかりも漕來れば。横濱といへる洲崎北へさし出て。芒村のかた細江めきて。早川のごと潮早く流れたり。されど遠淺にて。底の小石の數もよみつべきばかり也。かの洲崎には天女の宮居をいつき祀りて。松どもをかしう並立てり。又此流に川島ともいふべきさまして。巖三つ高うさし出たり。一つが形は。戌亥の方より向へば。東屋のさまして。まやの端をかしう見ゆ。東より望めば。其あづま屋と見えしは頭にて。南の方に裾廣うをぜなかにうづくまりて。頭もたげたる獸の形とぞ思ひなさるゝ。大よそに言はゞ高さ三丈ばかり。めぐりては二十間に餘るべし。五年がさきつ方までは。此巖いと大きやかにて。乳母のみどり見抱きたるさましたれば。乳母島と呼びしよし。五本四本の木いただきに生ひてありしも。今は其片へかけ崩れて。獸のうづくまりたる樣にはなりたるなり。其そびらに。汐風にもまれて。いとされたる木の一本立てるは。かの木々どもの名殘なるべし。又かたへの二つは。間一尺も隔てたらん。さしよりてぞ立てる。かの乳母島よりは低く小さし。是も金川の方より漕出て見れば。蠣の貝の牝牡さし向ひたる樣にぞ見ゆる。右顧左顧によりて。蠣のめをは定むなど聞けば。打つけにそれと思ひなしぬ。これも芒村の方より望めば。姿大きに變れり。たしかに大龜の頭もたげたるが。巖に口先をさしあてゝ。その巖にはひ登らん樣とぞ見なさるゝ。いづれもいとをかしき姿なり。あはれ繪かくわざ知らましかは。いかにも寫し置きて。濱路のつとにもと思へど。ふつにさるすぢに疎ければ。いかにともせんやうなし。面影ばかりだにとて。ふところ紙にかきつけしも。後見ばいかにをこがましからんと。我ながらほゝ笑まれぬ。芒村に舟はてぬ。此村に隣りて。小橋かけ渡し行かふ築島あり。海の方をば石垣高うし渡したり。こは万治二年。仰せ事によりて。あらきばりせし新田にて。年毎に千三十二石が田租を貢ぎすとぞ。こゝの村長二人あり。共に吉田を氏にて族を分ちたるなり。勘兵衛といひ七五郎といふ。則ち彼等が遠つ祖の開きそめし新田なれば。吉田新田と名をおほすべきよし。おほやけより宣まひつけしとぞ。田は多く畑は少なし。南北一里東西二十町もあらん。民の家數八十に近し。我が友山崎春樹は。そこの縣の事知らす早川ぬしの下役として。縣ありきに馴れて。常に此吉田がりにも來とまれば。おのれにも必ず彼が許に訪行きて宿をも借れ。杉田にいと近く。たより宜しき所なりと言ひしかば。こゝに訪ひて宿りぬ。あるじ心しらびして。万まめやかにけいめいすれば。旅居の心地もせざりけり。こゝに怪しきは。一重の障子を隔て。いと若き女の聲して。物狂ほしう。あるはによひ。あるは泣きみ笑ひみす。かく富榮えて。むね〳〵しう造りつゞけたる家居なればこそあれ。野山の片蔭なる一つ家などなら

ましかば。いかばかり凄ましう身の毛もいよ立つべし。初めの程は何とも思ひたどられざりしに。靜に考ふれば癲狂を病むなりけり。何人ならん問はまほしけれど。もし家あるじの家族などならば。なか〳〵なること言ひ出て。あるじの爲いとほしからましと思ひかへして。問ひきもせで明けぬ。後に尋ぬれば十四五ばかりなる女の童とぞいふ。などて療治ものせぬ。今一二年も經ば。つくろひ難からんをといへば。何か。斯るばかりの病は。强て癒さんともせずなどぞ言へる。いとけしからぬ田舍心や。

十三日。夜のほどより聊か風立たれど。天氣いとよし。杉田へは山越して今の道一里半もあるべし。されど皆柴人の蹈分けし道なれば。たやすくは得越え難からまし。こゝより案內の人まゐらせんとて添へたり。此新田の境を南へ離るれば。太田村と石川中村との中を過ぎて。まへ村といふ打開けたる田づらなり。向ひに見ゆる岡をたゞ越に越ゆれば。南に海いと靑く見渡さる。こゝの樣いとをかし。さて下り盡せば根岸といふ。そこより瀧がしらといへる村を過ぐれば。いそごの浦に出づ。かの岡越に見えしは此處なりけり。近くさし出で。杉田の濱邊にこゆべき塙あり。いとさかしともさかし。そば平なる細道をとめゆけば。磯もとゆする涙凄し。今日は風立しけなり。にはよき頃はさもあらずとぞ。こゝを下れば森村とて。薪とりつみて端舟の往來絕ゆる時なく。いさゝか賑へる浦なり。こゝを過ぐれば則ち杉田村にて。濱の眞砂地に

杭立てゝ。森村との境をしるせり。こゝより賤が家々畑園生など梅多し。江戸にて春毎に常ものする。葛飾わたりの梅園は。大方こゝの村には家ごとなり。わきて多く植こみて。かをり咽ぶばかりなるは。妙閑寺といへる寺の庭なり。濱路にむきて開ける大門より望めば。今を盛と咲をゝれり。堂の西なる小山を天王山といへり。そが頂きに登るつゞら折のかけ路より見おろせば。千本の梅は白く。梢に遠き海原は靑く。筆にも言の葉にも述盡し難し。此小山の頂より西に下れば。小松いと多く並立てり。あはれ都近からましかば。子日にもるゝ春はあるまじきを。誰見はやす人もなし。さて聊か西南の坂路にかゝりて。妙法寺といふあり。かの妙閑寺よりは。むね〳〵しき寺なり。こゝには一本の梅の枝をゆひまげて。四間四方がほどに高く造りなせしあり。こは物好みに過ぎて。をかしげなし。此寺の前なる路を南へと行けば。金澤へ出づるなれど。あまた度行き見し所なれば。こたびはこの梅にて足を留むべしとて。元來し方へと杖をひくに。道のかたへに一本の杉生ひたり。枝ざし常にかわりて茂く。老松のさましたり。江戸にて田畑といへるが北の野路に。かくざまの杉あるを。よくも似たるよと思ひ合さる。こゝのは濱風にもまれて斯くやなりけん。なほ田畑のなるは。是よりは見所ありてをかしき姿なり。されば誰名づけしならん。爭ひの杉といふ。そも松に似たれば。遠目にまがへられしよりの事なるべし。はじめの妙閑寺の北。よしあしの翁といへるが許に憩へり。かの唐土の昔。

我とわが臂を折りし翁をや思ひけん。又馬の失せたるを喜べる翁をや慕ひけんなど。心にくかりしに。名にも似ぬかいなでの田舍翁なりけり。されど同し賤が家の中には。いさゝか心しらびありて。梅とふまろうど甚はせんまうけせり。簀子に尻かけて。わりござゝえなど取出つゝ。暫しある程。かたへを見れば。壁に押はりたる漢やまとの歌いと多かり。斯るすさびは。心おとりするわざなれど。片田舍には珍らしく。興をそへたる心地して。片はしより一つ〳〵讀みたれば。大方皆相知れる人々のにて。去年のも今年のもまじれる中に。こたびもろ共にと契りし渡邊章僧大完などが。去年の春とひ來てよめるもあり。又今年なるは。狩谷棭齋は十日とするし。詩佛米庵などは十一日とかいつけたるも見えたり。此外にも知れる人の筆の跡ども。いと多く見ゆ。わきてかの掖齋は。わが友だちの中にも。才勝れたる人にて。何わざにもをさ〳〵たど〳〵しからぬすぐれ人なり。さるに醉ひ心ちの程にやありけん。懷紙に一本の梅をかきて。掖齋寫眞とかたへに記せり。心は到りたれど。繪の事は習はざりけるなるべし。枝ざしなつかしげなく。きすくに過ぎたるのみか。花も梅とことわらざれば。おしあてにもそれと見なされぬ筆のにほひなり。かゝるが眞を寫せるならば。梅といふものは。見ずてもありぬべき物なりとをかし。酒といふものは。水莖のすさびをさへ醉はするにやあらん。おのれも聊かの醉心地に催されて。筆のしりとりて。長歌ものしつゝ押はりたり。その歌。

天雲か。ふりしく雪か。わたつみの。そくへの浪か。磯山の。こぬれ遠近。眞白にし。見ゆるなりけり。みな人は。しかぞ驚く。われはたゞ。こち吹く風に。あまた里。隔てし道の。此方より。しるくぞありし。その梅香は。

かへし歌

よそにのみすぎ田の梅の花ざかり嬉しくあへる今年なりけり

もろこしの梅さく嶺はとひ見ねどいとかばかりはあらじとぞ思ふ

暫しがほどに。梅とふ人これかれ來あひぬ。あるは武士なる。あき人なる。まろ頭もまじりたり。皆知る限にこそあらね。同じ大江戸の人々なれば。品川の驛路より。おくれ先だちて。面は相知れる者どもなりけり。こゝを立て歸さは。山路より程が谷の水うまやへ出づ。その間の村々の名は。關。松本。大神。前田。井戸が谷。上生田などいふめり。井戸谷のほどにて。かの案内人をば吉田がり返しやりて。又一人となりぬ。程が谷に出で賤が家にいこへり。此處にあやしう老さらぼへる翁の。土火爐のもとにより居たりしが語りけるは。江戸には去年の春火のさわぎありて。大方賑はしき町々は燒けうせつとか。されど一年もあらぬ程に。皆家造りも始めにかへりて。賑はしさの變らぬなん。げに大御惠の御蔭にはありける。驛路もこゝのわたり。藤澤土塚金河などは。四五年さきつ方より。打續き火の事ありてしかど。始にまされる家

造りどもとなりて榮え賑ふを。此宿ばかりは火のさわぎもなくて。たゞ衰へにおとろへ行くぞあやしき。あはれいかで今年など火の事もあれかし。さらば聊か賑ふ事もあらんなどいふ。あやしきねぎ事する。しれ人もある者なりけり。何くれと物語らふほどに。齡三十には二つ三つも足らぬ。みめきたなげなき女の。かりそめの旅よそほひして伴ふ人も具せぬが南の方より來て。こゝの足床にかけて愁ひつゝ。いと物思へるさまして。あるじに語りいへるやう。おのれはもと金河の宿に遊女をわざとして。はかなき年月を送りきつる者なるが。箱根山のほとりに侍る人に。よすがを定めて。此一二年が間すみ渡りぬるを。よしありてこたび。武藏の方へと思ひ立ちぬるが。昨日の夕まぐれ。こよろぎの磯邊より後れ先だち物語らひし旅人の。今朝平塚の松原までしたひ來て侍るが。始のほどは言葉つきより始めて。万づなさけめかしく覺えしを。往來の絶間を窺ひて。おのがもたる旅の調度。いさゝかのこがね錢など奪ひとり。何地いにけん跡をくらまし侍りぬ。たゞあきれにあきれて。涙さへさしぐまれ侍らざりき。今宵は何處いかなる所にか。一夜をもあかし侍らんとて。よゝと泣くめり。げにまことならば。女の身にはいかに頼みなく悲しき事ならん。されど斯る者のかゝる事いひて。涙もろき旅人あざむき。はては怪しかる事ども爲出づるもありなど。かねて聞置けるなれば。心づよく言とひもかはさで。そこを立出ぬ。後に思へば猶いかにありけん。心にかゝらぬにしもあらざりけり。金河の

宿にて。元より相知れる岡田常蔭大村玄孝など逢ひたり。江の島まうでするなりけり。何處へかおはせしと問ふに。杉田のをかしかりし梅のさまなど。片はし語りて。歸さの道なり。とひ見てよかしなど言ひて。さて別れぬ。まだ夕日は山の端近くしもあらねど。こゝの旅屋なる奈古屋某が許にやどる。綾錦のたぐひにこそあらね。厚ぶすまのよろしき樣。なべての旅屋には。ことなくすぐれたり。厚ぶすまなどやが下にといへる。古歌の詞も思ひ合せられて。ひとりゐみなんせられける。

十四日。つとめてあゆびとゝのへ。杖ひきて立出づ。生麥鶴見の家々にて。皆餅つくを。いかにと問へば。今日は十四日なれば。あすの節供のまうけなりとぞいふ。江戸にては若餅とかいひて。年の始につくもあれど。斯く家々にいはひ合ふめるがをかしきなり。枕冊子に。もちかゆのせくまるるとあるも。正月十五日を言へるなりなど。例の思ひ合せられぬ。北ふく風猶さえて。なか〳〵に道の急がるゝけにや。巳の貝ふく頃には川崎に至りぬ。一昨日とひおけりし田中がり立寄れば。あるじ待ちつけていと喜びつゝ。何くれと歌の事ども語らひて。ついでに言へるやう。笙の笛ふき侍るは。兵太夫といひて太郎に侍るものなり。いさゝかいたづく事の侍りて。まのあたり聞えぬこと。いかばかり本意なう思ひ侍らんなどいふに。猶とひ聞けば。中晴峯朝臣の弟子なり。おのれはた中の朝臣に笙ふく事習へれば。武藏野の心地して。朝臣の

みまかられし事など言出でゝ惜みあへり。さてそこを出て。大師河原なる池上太郎左衞門といへるが許をとふ。こはよしある村長にて。曾祖父大蛇丸底深とあざなつきて。いと恐ろしき酒のみの大將軍なりけりとぞ。そのかみ大塚の地黄丸樽次といへるありて。此二人いみじき酒くらべして。七日七夜この底深がもとにて。飲みいぢみし事あり。そは慶安元年九月の事なりとなん。此事世に隱れなかりしかば。いかなる御簾の内にきとしめしけん。ありし樣記しつけてまゐらすべきやう仰せ言ありて。何人の書しるせしにかあらん。水鳥記といへる二卷の書を。物語めかしう作りて。そのかみの古代なる書をもかき加へたるが。寛文七年に。板にさへ彫りものしたるありとて見せらる。此池上の家に傳へたるとは。傳へ聊か異れり。その折用ひし盃とて今も家に傳へし。わたり八寸ありて大方七合をたゝふべし。朱塗にして龍と蜂と蟹とを蒔繪にせり。そは。のめ。させ。はさまうずるはとの心なるよし。委しくはかの水鳥記。又近き頃岩瀨某が近世奇跡考といへる物に記したれば。こゝには言はず。おのれも主人のすゝむるに任せて。一盃を傾けつくしぬ。かの池上は。我友吉田勇雄が親族なれば。吉田よりの消息を傳へしに。返事すなはち書きてあつらへつけらるゝを。又懷にして暇をつげ。この家を西になして近き平間寺に詣づ。さきの醉心地こゝにて大きに出て。かたへの賤がやに憩ふほど。覺えず。暫しがねぶりを催しぬ。さめて打驚けば午のさがりなりけり。是よりは常目なれしゆきゝ

にて珍らしげもなし。酉の時ばかりならむ。我家に歸りつきぬ。

此たびは二日三日のほどなれば。させるふしもあらじ。道のついでも常なれたるに。何の珍らしげのありてか。かき日記もすべきなど。思ひ捨てたりしを。聞きしにまさる千本の梅は。いふも更なり。ゆくりなき舟路のをかしかりし樣も忘られ難く。又ねざめ〳〵語らひあはす友人もなき。旅居の枕ごとに。筆をとりてかいつけしが。あやしう一卷とはなれるなり。時は文化の四年にあたる年。正月とをか五かの日。

濱臣

杉田日記　終

苗場山に遊ふ記

鈴木牧之

苗場山は越後第一の高山なり。魚沼郡に在り。登り二里と云。絶頂に天然の苗田あり。依て昔より山の名に呼ぶなり。峻岳の巓に苗田ある事甚奇なり。余其奇跡を尋ねんと思ふ事年ありしに。文化八年七月偶〻思ひ立ちて。友人四人（嘯齋。擷齋。扇舍。物九齋）。從僕等に食類其外用意の物を持たせ。同月五日未明に立出づ。其日は三ッ股と云驛に宿り。次日曉を侵して此山の神職に到り。各々袂をなし。案内者を傭ふ。案内は白衣に弊を捧げて先に進む。清津川を渉り。頓て麓に到れり。巉道を踏み嶮路に登るに。欅樹森列して日を遮り。山篠生茂りて徑を塞ぐ。枯れたる老樹。折れて路に横たはりたる。踰ゆるは臥龍を踏むが如し。一條の溪河を渉り。猶登る事半里許。右に折れて進み。左に曲りて登る。奇木怪石千態萬狀。筆を以て言ひ難し。已に半途に至れば。鳥の聲をも聽かず。殆ど東西を辨じ難く。道なきが如し。案内者は能く知りて先へ進み。山篠を押分け。幣を捧げて道を示す。藤蔓笠にまとひ。叢竹身を隱し。石高くして徑狹く。一歩も平坦の道を踏まず。漸う午過る頃。山の半に至り。僅の平地を得て。

用意したる臥座を木蔭に敷きて食をなし。暫く憩ひて又登り。登りて神樂岡と云所に至れり。是より他木更になく。俗に唐松と云もの。風に丈を延さいるが。梢は雪霜にや枯らされけん。低き森を成して此處彼處に在り。又登り。少し下りて御花圃と云所。山櫻盛に開き。百合桔梗石竹の花など。其狀人の植ゑ培ひしに似たり。名を知らざる異草も數多あり。案内者に問へば。藥草なりと云り。又登り性き〳〵て棧橋のやうなる道に當り。岩に取付き竹の根を力草とし。一歩に一聲を發しつゝ。氣を張り汗を流し。千辛萬苦し登り盡して。馬の脊と云所に到る。左右は千丈の谷なり。踏む所僅に二三尺。一脚を過つ時は。身を粉碎に成すべし。各々忙怕歩みて。竟に絶頂に到り着ぬ。

偖同行十二人。先づ草に坐して憩ふ。時已に下晡なり。始め案内者の言ひしは。登り二里の險道なれば。一日に往來する事能はず。絶頂に小屋あり。爰に登る人。必ず其小屋に一宿する事なりと云へり。今其小屋を見れば。木の枝山篠枯草など取集め。藤葛にて匍匐入る許に作りたるは。野非人の居るべき樣なり。爰を今夜の宿りに定めたるも果敢なしとて。皆々笑ふ。僕どもは枯枝を拾ひ石を集めて。假に灶をなし。齎せたる食物を調ぜんとし。或は水を尋ねて茶を烹れば。上戸は酒の燗を急ぐもをかし。扨眺望せば。越後は更なり。淺間の烟を始め。信濃の連山皆眼下に波濤す。千隈川は白き糸を引き。佐渡は青き盆石を置く。能登の洲崎は蛾眉を

なし。越前の遠山は青黛を殘せり。爰に眼を拭ひて。扶桑第一の富士を視出だせり。其樣雪の一握を置くが如し。人々手を拍ち奇なりと呼び。妙なりと稱讃す。千勝萬景應接するに遑あらず。雲脚下に起るかと見れば。忽ち晴れて日光眼を射る。身は天外に在るが如し。是の絶頂は周一里と云。莽々たる平蕪。高低の所を見ず。山の名に呼ぶ苗場と云所。爰かしこにあり。其樣人の作りたる田の如き中に。人の植ゑたる樣に。苗に似たる草生ひたり。苗代を半ば取殘したる樣なる所もあり。是を奇なりと思ふに。此田の中に蛙蟲蝨もありて。常の田に異る事なし。又如何なる旱にも田水涸れずとぞ。二里の巓に此奇跡を觀ること。甚だ不思議の靈山なり。案内者曰く。御花圃より別に徑ありて。龍岩窟と云所あり。窟の内に一條の清水流れ。其邊に古錢多く。鰐口三ッ掛りありて神を祀る。往昔より如斯と言傳ふ。此道今は草木に塞がれて。需め難しといへり。絶頂にも石に刻して。苗場大權現とあり。案内者は此石人作に非ず。天然の物と云へり。俗傳なるべし。

此處彼處見巡るうち。日既に暮れて小屋に入り。内には挑燈を下げて明りとし。外には火を焚きて復び食を調へ。物喰ひて酒を酌む。六日の月皎々と照して。空も近き樣にて。桂の枝も折るべき心地しつ。人々詩を賦し歌を詠み。俳句の吟興もありて。稍時を移したるに。寒氣次第に烈しく。用意の綿入にも凌ぎ難て。終夜燒火にあたりて夢も結ばず。東雲の空待わびしに。

晴れ渡りたれば。いざや御來迎を拜み給へと。案内者が言ふに任せ。拜む所に至り。日の昇るを拜し。支度整へて山を下れり。

霄間清露濕ニ衣巾一。無際平蕪四望新。呼吸極知通ニ帝座一。徘徊却愧問ニ天人一。
吐く息も雲とやならむ峯の秋

秋月庵　牧之

苗場山に遊ふ記　終

昭和十三年七月十六日謄了
小牧安貞　敬

中空の日記

香川景樹

今年春二月の頃より。江戸に罷り止まりけるが。暫く伊勢の國へ。罷り上る事出來て。先づ尾張の國なる津島までと志ざす。こん春なん。又江戸に歸り來なんずる者の。かの邊よりは都の方程近く。況んや待つ人無くしもあらねば。頓て其方ざまに歸り果んずる事もやと。危ぶむ人のみ多かめれば。中々言はで行かんこそは。言ふに優らめとて。親しき限一人二人に謀りてなん密に出立つ。時は神無月廿日餘り三日の日なり。目白臺なる愛松軒を別れ出るほど。思ふ事多し。

立出るわが袖だにもしらぬかなこゝろの中におつるなみだは

臺の方を見遣るに。遙々冬枯たる樣。まづ身にしむ。

しばしとも人はとゞめぬかどでをば尾花ばかりぞ打招きける

隨ひ行く人は。菅名節。石田孝一なりけり。愛松軒の主人なる兒山紀成。越の國なる柳下清老も。さるべき所まで送りせんとて。共に來れり。扨清老が詠める。

終夜ふりししぐれは晴れにけりされども今朝の袖はかわかず

赤城の宮のわたりにて。紀成。

牛込のあかぎの杜のもみぢ葉のちるを日毎にかぞへてまたむ

蛙原と云ふ所を過ぐ。

春やがてかへる原なるやなぎかげ心のうちにむすびてぞゆく

今宵は先づ品川に宿る。菅沼斐雄。朝岡泰任。木村敏樹。本多以時等。待ち受けて馬の餞す。

志しあるに似たり。さて節がうたひ出せる歌。

別れをもわするゝばかり我醉ひぬさめぬうちにもかへりませ君

泰任が詠める。

かりそめのわかれなれども今はとて歸る心はかはらざりけり

敏樹。

新玉のとしをこえても鴈がねの歸り來む日をまちやわたらむ

廿四日。斐雄紀成清老の三人は。前宵も逗まりて。別れを惜み明し。今日も。猶送り來。江戸の方海越しに霞籠めたり。

しば〳〵も芝の浦なみかへり見て立しをれぬる品川のさと

往く〳〵紀成曰らく。事了へ給ひなんには。春は一日も早く歸り來ませ。今は世の中も譏り勞れ口酸くやなりけむ。あな喧とうたてかりし囀りも。漸く靜まり侍りて。執ねき嫉み草も枯樣に成行きて。思はぬ邊さへ動き立ち侍るは。中々時待たせて。最たゆらに誠の道の。興り來る兆にぞ侍るめる。從ひ學ぶ徒は更なり。世中の賜に侍り。

我ねがふかひだにあらば來ん春はいかなる花か世には咲くらむ

など。己が方樣に言成すめり。實にや昔より天の下に。道一筋興す類ひは。世界の上に打向ひて立てるに侍れば。固より此方に親しむ人なく。公の心ありて。我世の後をも見とほす眼なからむ限は。却りて咒はしうあだみ嫉む事。大凡理の前にて。それが災に罹りて。炎を分け刃を渡るも。頓て此大道を踏むにて侍り。こゞしき巖もたぎる水には。推漂はされて打も轉ぶめり。然りとも波と共に碎けざれば。遂に止まる所にたてりて。千年の苔綠深し。かの盛んなりし水の勢。此時何處にか有る。況んや新桑原と移り果ては。流れの跡だに知る人なし。されば後を思ふ人。其貧しきを歎かんやは。少し世に從ふ心を遣ひ侍らんには。活る限の世中を傾けむ事。何事かは侍らむ。只世の末に止めん跡の。過ち多からんこそは。心苦しくも耻かはしくも侍るべけれ。是は必ずしも我上を云ふには非ず。玉は碎きて鬻ぐ物には侍らざめる。道理を申すに侍り。嗚呼にな聞き給ひそなど語り慰さむ。扨海晏寺に入りて。紅葉見る。盛は過に

たれど。世に名高き影はおしなべならず。庭より岡をかけて染盡したるに。雲間洩る日影のさし渡りたるや。都なる通天橋の秋にも。幾等劣らざりけり。紀成。

もみぢ葉を見るにつけても悲しきは心の色にいでぬなりけり

返しの心を。

言の葉に匂ふ誠のふかければからくれなるも色なかりけり

又岡の上に巡り登りて。

紅のふかきおち葉をふみわけて富士の高嶺の雪を見るかな

下り來れば池あり。節。

池水にうつるもみぢの影みれば玉藻をつゝむにしきなりけり

孝一。

おもしろく聲鳴きまぜていろ〳〵の紅葉の中をとぶ小とりかな

寺を出て涙橋を渡る。同じ人。

旅人のわかれを惜むなみだ橋ひと日もかけて濡ぬ日やなき

大森の會津屋に入て。又酒酌盡して。今ぞ實に別れなんとす。斐雄。

梓弓はるのかすみをひきつれてかへり來ん日を今よりぞまづ

孝一。

思ひやる思ふどちなる君ひとり殘るはいかにわびしかるらむ

節。

品川の海苔とるいそにさしわたすひゞに思はむ君がうへかな

さしたる杭の名を。里人はひゞと云ふなり。此斐雄は都より連下りたる中の。一人にしあれば。此度の旅にも伴ふべきを。己れ歸り來るまでの代りにとて。殘し置きけるなり。されば皆斯く殊更に思ふなりけり。紀成。

大森のうらにあそべる鴨すらも思ふこゝろに身をばまかせつ

此まゝに從ひ侍らばなどかこつめり。扨新田の宮にと志したるも。日たけたれば得詣でず。六鄕の渡しを渡り。川崎より市場鶴見を過ぎて生麥にかゝる。

あはれなりなま麥村も冬がれて蕎麥のからうつから棹のこゑ

何事にかあらむ。或家に老たる女共の。集ひて酒飲しけるが。流行小歌かたなりに唄ひあざれて。掌互みに拍交し。醉狂るゝを見てよめる。

世のうきや忘れはつらむ笹の葉のさやげば是も一ふしにして

又熊を飼ひ置ける茶店あり。此熊春は芹をのみ喰ひたるが。今は柿をのみ喰ひけり。然は云へ

投遣りて。塵など汚れたるをば更に食はず。されば誰も手自ら遣るに。其遣る毎に必押戴きて食ふめり。扨主人語らく。此熊は腹籠りにて得たるに侍り。今は十歳に成り侍りぬ。親熊の腹を逆剝にせし時。其利鎌の尖。彼が月の輪に掛り侍りて。ほと〳〵命危ふく侍りき。其疵今に侍り。それ見せ參らせよと言へば。打踞りて仰様に。咽喉を捧げたる狀。憐れに悲し。

月の輪にかゝれる跡を仰ぎても見するやくまと名のるなる覽

さて行けば海面也。節。

賤がすむいそべの家はあばらにて門よりうらの海を見るかな

新宿を過ぎ入川村を來るに。行く人稀になりて。日影斜めに映渡る。

尾花ちる松原ごしの山の端にいざよひあへず入る日影かな

何處よりか鐘の聲す。

今やかくひゞきわたらむきゝなれし淺草でらのいりあひの鐘

孝一。

夕まぐれおなじ旅路のゆきかひに我をも人のあはれとやみむ

暮果て神奈川の驛に着く。

廿五日。例の遲く立つ。程が谷を經て。權太坂と云ふを登れば。境木と云ふ谷の上に差掛たる

棧敷。景色佳し。

色ふかき谷の紅葉のあひだよりみどりに見ゆるかなざはの山

是より坂路に掛りつゝ。言以て來れば歌の樣なり。

むさしより相模にかゝるさかひ木の里おりくれば信濃坂なり

下り果れば。最曠く。打渡したる野山面白し。

もみぢ葉の色よりいろの深さかなところ〴〵の松のむらだち

柏尾を經て戸塚の驛を過ぐ。松原日暮たり。節。

あはれにもけふの命をまつがねに鳴きのこりたるきり〴〵す哉

廿六日。藤澤を立つ。空曇れり。暫く來て四つ谷の里に休む。

朝たちてとへば四つやと答へけりみじかき冬の日影なるかな

海の甚く鳴響くは。雨に成るにやと言へば。米簸る女ども言ふ。上の方にて鳴る時は日和に侍り。下の方にて鳴る時は雨降り侍り。然らば今鳴る聲は。只向ひの沖中に聞ゆめり。如何は。と皆言ふ。

てりくもりしぐるゝ頃の海なりは中ぞらにして定めなきかな

ひきち村を過ぐ。

かへり來ん春やひきちの小松原今ひとしほのいろそへてまて

或家の前に。白き花の咲滿ちたるを見れば。柊なりけり。孝一折りて翳す。其匂ひ高き事梅に優れり。

柊はまばしなちりそはななながら今來ん春のかどにさすべく

節。

ひえ鳥のともよびさそふ聲すなり柿さはしたるまづが軒端に

茅が崎より南鄕に出るに。若き琵琶法師の人に曳扶けられて。門々に立て唄ふを聞けば。大祓の神祝に。普門品を讀混へて。彈鳴すめり。聲は哀れにてさすがに悲し。

四の緒のしらべあやなき聲にさへはら〳〵とこそ涙おちけれ

濱の鄕より大山を望む。孝一。

時しもあれ濱風わたるあしはらのふしてぞをがむ大山のかみ

道のべにはひあまりたる山松の根よりもまげく物をこそ思へ

相模川のわたり近づく所にて。笠脫ぎあへず走り來る人あり。誰そやと見れば。都なる波多野親民なりけり。是は〳〵と立寄りて。

見るからに嬉しと思へば悲しくて悲しと思へば嬉しかりけり

前の便りに。己れを迎へに出立てりとなん聞きつれば。思ひ掛けざるにあらねど。さすがに心惑ひて。

思ふ人ありやなしやをとふ外はまたうちいでん言の葉もなし

先づ程近き平塚の里へ伴ひて。晝餉喰び酒酌まんとする程に。しか〳〵の事語りみ聞きみ時移りぬ。都の文ども多かめれど。とてもかくても此親民に就きて。歸り上れと書る事の外なんなかりき。さる程に親民曰ふ。己れ都を出立つ時。粟田口なる松坂の里まで送り來し人々。かの弓屋が亭にて。馬の餞せり。其時各々詠めりし也とて。取出で見する中に。

三宅意誠

神無月小春の今日の。朝霞立別れにし。二月の空もそゞろに。懷かしく思ふ心は。大比叡の峯よりつゞく。岩倉の山のいはねど。我のみかなべても戀ふる。其中に君が殘せし。岡崎の宿の二木の。姫松のまつけしきをば。よそに見て忍ばれましや。白雪のふりつもるらむ。冬もすぎ春にもならば。海近みあらき吾嬬の。潮風もやゝ吹なぎて。咲花のさかりを見んと。墨田河すむ心にも。成らんとすらむ。

いひあはせ思ひあはせて粟田山まつのみなりと君につげなむ

白波のかへるときかば打いでの濱まつかげにまちやわたらむ

山本昌敷

歸り來ぬ君なびくまでかたらなむ都のとものこゝろづくしを　多田韶

別るゝも嬉しかりけり君をいまともなひかるへ旅ぞと思へば　松岡歸厚

此外も數々有めれど。己が上に與からざるをば殘せり。扨其許の歌は如何にと言へば。親民答へて。口のおそきに行く道のとく侍れば。何の暇に打も出侍らん。少し書き付け見たるをさへ落し侍り。されど關を越えける朝。

鈴鹿やま木の葉のうへにふりたてゝ音さやかなる玉あられ哉

又龜山の邊りにて。

おのづから跡を惜むに似たるかな踏うかりけるけふの初雪

是のみはつらき方にて覺え侍り。外は忘れにたりと言ふ。さて夜たゞ語らふうちに。山田直躬も先つ日身歿りたり。と言ふを聞きて。

思ひきやあし苅小舟さはりきて後の世までを隔つべしとは

此直躬は廿年近き昔より。物學びに來りて。最睦まじかりしを。一時年の秋にやあらむ。道に背ける事ありて。其後疎かりしまゝにて。斯く果敢なく成れりと聞けば。彌果敢なにも成まさりて。涙禁め難し。今日は暮ぬ程より南の風吹荒びて。暖けきものから騷がしき心地す。物片付て寐んとする時。節。

其こゝろあすはたてまし此みなみ吹きかへしなば雨になるてふ

廿七日。平塚の舍りを立つ。扨親民をば一度江戸へ遣はす事ありて。此處より別れぬ。高麗寺山の紅葉今盛り也。實に寺の名に負ふ。高麗錦はれらんやうにて。比類なきを見つゝ櫻川を渡る。

かゝる此紅葉にそめしとゝろよりたれ花みずの橋といひけむ

弓手の方に。諸越が原遙々と見渡されたる。時しも時雨の雨俄に降り來たりて。木葉空に飛ぶ節。

大磯のあらなみたかくうちそへて松かぜすさぶもろこしが原

國府津を過ぎて。袖が浦に出づ。

龍田ひめかたみの袖がうらならしゆるぎの磯に殘るもみぢ葉

濱手を來れば。神々しき御社あり。葛蔓這ひ渡りて色づけり。さる程に又時雨れんとす。

よる波にうちかへさるゝくずの葉のうら風早み時雨きにけり

白妙のまさごの上にはふくずのうらさやかにも見そなはせ神

梅澤なる釜島屋に入て。例の酒酌む。春來し時は。此隣なる松屋が庭の花を愛て。終日遊び暮しき。今斐雄は吾孀に殘り。河野重就は都に歸りて。今日は節のみぞ其數なりけり。

春見つる友はいづらとはなの木も紅葉のいろに出てこふらむ

扨行く道の後方に。後れて謠ひ上る聲するは。節にや孝一にや。

天地はわが身ひとつの心地せるこの醉ごゝろ常にもあらなむ

前川のほとり。今年子と覺しき荒駒二匹引立て行過ぐ。何地よりと問へば。脚高山の御牧にて取り繫げりと答ふ。其樣憐れ氣なり。

あとへのみひかるゝ駒の足たかの山ふところや戀しかるらむ

酒匂川を渡る。雨はいみじう降り出て。宿るべき小田原の里も。霧の底に暮れなんとす。河原の道たど〳〵しきや。

さかは河色こき茅はらをしければ石のうへよりふみがたき哉

廿八日。前宵より降る雨。更に歇むべうも見えざめれば。晝過ぐるまでいさよひぬ。扨晴ぬれば。箕根の湯本までと思ひ立つ。頓て山口に掛れり。象鼻庵の傍らなる巖の上に楓二本立てりたるが。濡ながら夕日に照りて。さながら花染の絹に似たり。

今そめてまぼりあげつる紅の千しほのきぬをたれかほしたる

紅のこぞめのきぬのはこね山まづ一かさねとりいでにけり

風祭の里を過ぐ。

風まつり祈るかひある年に逢ひてたり穗こきおろし歌ふ聲する

右の方に。最長く打なだりたる松山は。そのかみ小田原陣の時。豐太閤の居城にして。石垣山と云ふ。思ひ出る事多き邊りなり。孝一。

武士のときはと見けむ松がえにたえ〳〵のこる夕日かげかな

湯本なる福住が家に宿る。出湯をば家の中に圍み入れて。湯氣たゆたに湛へたる。最と清くすきとほりて。心の垢も洗ひ落しつべし。

うべもげに神のわかせし湯なりけり千歲になれどぬるみだにせず

親民が歸り來たらんまでは。爰に在りて浴みなむとす。

廿九日。ものさひしきまゝに。吾孀を思ふと云ふ心を詠まむとてよむ。

浦島がはこねならねど別れつるそなたこひしきあけがたの空

節。

思ひやる羽ぐゝみすてしかなし子やひとりねぐらの鳥越の里

又都を思ふと云ふ事をも。よみなんやと云ふ程に。己れは事ありて得詠まず。孝一。

夜をさむみ今やみやこの鴨がはになくらむ千鳥思ひこそやれ

節。

粟田山君をまつよりおちそひて我にもつゆのかゝれとぞ思ふ

十一月朔日。今日も例の浴みて暮らす。夢と云ふ題を出せれど。己は又えよまず。節。

行末のゆめにも見ゆるものならばいかにはかなき我世ならまし

孝一。

わが思ふまゝなる夢もみえなゝむそれにだに世を慰めてまし

二日。此家に朝夕來慣せる按摩法師。短冊一枚取出て。此夕べ南面に寓りける旅人の。己れに給びたる也とて。見するを見れば。鹿と云ふ題にて。鳴く鹿の心のほどはあらねども我身をつめばあはれなりけり。と書付けたり。時に觸れて哀れならずしもあらねば。己さへ身をつみて。

秋にしてなきやむ鹿のつまごひは數にもあらぬ思ひなりけり

今宵しも打まどひて。詩の事を語り交すに。此古句や今の旅の心に協へり。など言ひしろふ中に。鷄聲茅店月と云ふを詠る。

道のべの萱ぶきあろく月さえてうちにきこゆるとりの聲かな

孝一。

鳥のなくくゞ屋が上にてる月のかげほの〳〵としらみける哉

又。人跡板橋霜を。

わき出る湯もとにかゝるいた橋の上にもふかき霜のいろかな

是は人跡の心なしと難ず。實にや實景に取られて。題の面を忘れたりな。さらばとて又詠むも歌かは。

板ばしの霜に跡こそのこりけれたれ夜深くもひとり立ちけむ

孝一。

橋の上のあもふく風を身にしめて行きけん人の跡ぞ見えける

三日。今日も彼の徒然なるに。湯の涌き出る岩間など見歩行て。節。

火々出見の神あづめます山なればうべもいづみの湯とはわくらむ

山の色も衰へ行きて。わびしき頃なり。

はこね山出湯にうつるもみぢ葉の色はやくもさめにける哉。

節曰く。此筥根山の中にて優れたる所々を。題にて歌詠まんは如何に。書集めて試みんとて。取敢ず書き出せる八勝の題を各〳〵詠む。己がのみ爰には記す。

雙嶺飛雪

二子やま雲のうぶぎぬかけてけりたれ大ぞらに生したつらむ

關門早鶏

君が代をひらく箱根の關なれば木綿つけとりの聲ものどけし

遠島驟雨

沖つなみうちまぐるらん伊豆の海や天城が島ぞ雲がくれゆく

山池温泉

暖かにいつもかすめる山かげの湯本ははるやときはなるらむ

晴湖落月

影みればふじのねながら蘆の海の底にかたぶくありあけの月

古塞斜照

山よせの城門のいしがきわづかにも殘る夕日の影ぞさしたる

石溪亂流

水上はまのびのたきもみだれつゝ岩ねにかゝる音のさやけさ

神壇老樹

神がきの老木のまつははこね山ふたゝび千世にあひにける哉

是は函嶺八景として。此家にも書き殘せり。又見ん人正すべし。今日は風いと寒し。雪も降れ

りと云ふ。

旅衣まぐれにぬらしぬらしきてつもれば雪もふる日かずかな

雨に成りて水の聲殊更に高く。夜半の鐘の聲。木枯し吹荒ぶ折々。いと遙かに聞ゆるは。何國の如何なる寺にかあるらむ。

はこね山そこはかとなくなる鐘の二聲三こゑきこえけるかな

岩がねをやがてもむすぶこゝちしてまくら動かす波のおと哉

いでや光行の道の記にも。湯本と云ふ所に泊りぬれば。深山おろし烈しく打時雨て。谷川漲り増り。岩瀬の波高く咽ぶ。と書きたる遠き昔も。打つけに思ひ出られて。其人さへぞ戀しき。又方丈記に。行く水のながれは絶ずして。然も原の水にあらず。と言へるも然る物から。今聞く寂覺の聲のみは。猶其時に變る事あらじかし。

岩ほすらながれくだれど早川のひゞきはもとのすがた也けり

此湯本川の末を。早川と云ふ。

四日。今日も例の法師來りて。此邊り何くれの事ども囂しう。問はず語りする端に曰く。土鼠と云ふ奴は。世に恐ろしき物にて侍り。此箱根なる皂莢坂の邊り。限りもなく生茂りたる。竹の根を食盡して悉く枯し侍りぬと云ふに。ふと月日の鼠おぼえて。

たとへとも何思ひけむくれ竹の千世の根をさへはむねずみ哉

扨暮んとする程に。江戸より親民歸り來れり。紀成がおこせし文の奥に歌あり。

たちかへりおなじ跡のみふむ時はゆけどかひなし式島のみち

別れ參らせては。と書けり。又今日しも。出雲守正高が許よりも文ありて。

春がすみ立わかれにしあしたよりおぼろに成りぬおきしまの道

となん書き添へたる。東も都も變らぬ道の便り也けり。花園の君よりも御消息給へり。至り深き隈々まで。慇懃に思しこおし給へるなん。いとかたじけなき。都を立ちし時。我にのみ限れりとしも思ふかなたれも別れは惜むべけれど。と宣へりしも今更思ひ知りぬ。又程近く行はれん。初御代の大嘗祭己日の節會に。謠はるべき催馬樂の中に。絶て久しき蓑山を起されて。やがて公燕朝臣も。琵琶の役仕まつり給ふめりかし。彼の詞曲の上に尋ね正させ給ふべき事ありて。斯く遙々ふりはへさせ給へりしを。何國の關にか障りけむ。今日まで日數後れにたらんには。御返事申さんも中々なりや。斯る愛たき今年しも。都を遠く離れ居て。世中搖り轟くらん。大みしらひの響きをさへ。得聞き奉らぬ身には。逢ふが樂しさと謠ひ上げ給ふらん。天つ雲井をさへに。畏くも忍び奉りやりて。

みの山の雪の下なるたまがしは御世のひかりに逢ひにけるかな

故三位入道(實章卿)の君世におはせし時。何くれまうしたいまつりし中にも。此催馬樂の聞知り難き節々を說き正して。官の爲にも爲しおきて給はん御計も。より〳〵承はり思ひ回らせし程に。自らさへ世に空しう成らせ給ひしこそ。いと果敢なく惜らしきわざなれ。斯樣の文ども。夜更るまで打眺め讀反す程に。旅宿の燈と云ふ心を各〳〵詠めりけん。孝一。

ともしびの影もあはれと思ふらむ夜たゞいをねぬたびの心を

節。

あばらなる旅ねの宿のともしびはみる夢よりも消やすきかな

親民。

ともし火の細き光をかゝげてもねられぬものかわれ旅にして

五日。明日は立ちなんと思ふに。さすが忙がはしき心地して。今日は歌も詠まず。とかくして夜も更けぬ。

六日。辰過る頃出んとす。宿の人々別れ惜むめり。今來ん春を契りて立つ。さて机きの端に書き捨てたる歌。

あまりにも日數かさねて旅ごろもたちうきまでに成にける哉

上の大路に回り出て。谷陰をかへり視れば。宿りつる湯本の里川面に見えて。とかく建てたる

家々の棟より。烟など立靡く。あれやかの家など言ふに。名殘少なからず。節。親民は暫し立後れけるが。程もなく追上り來ぬ。木立の紛れに得も見定め侍らざりしなど言ひて。節。

もみぢ葉を手折もたせてみやびをの行くはとよそに思ひける哉

袖たれて木の間のどかに歩みゆく君がよそひは旅としもなき

すくも川の上なる山に。絶々見ゆるは忍びの瀧なり。傍へに紅葉たてり。

くれなゐの色の千入に木隱れてあのびの瀧はかひやなからむ

己れ酒に醉へるを。駕籠にさへ振られて心地苦しければ。畑の里なる蔦屋と云ふに入りて。暫く憩ふ。打臥せる枕紙に。山風吹落ちてそゞろに寒し。實や一昨日の暮つ方。二子の奥なる何がしの嶽に。雪いと白う降れりとなん云ひし。

ひるだにも寒きたび寐に赤はだの二子のやまを思ひこそやれ

今日の日は大概曇り勝にて。をり〳〵時雨るめり。節。

哀みをいづらとわけてふた子山わたくし雨はかゝるなるらむ

是よりは殊に嶮しき坂路にて。登る人降る人。交みに喘ぎかはす。

箕根路のかしの木坂に猿すべりのぼり兼ても音をぞなきける

節。

岩がねにわらづ踏きるあなうらのあなうとといはぬ人なかりけり

後ろには。相模の海遙かに打開けて。彼の紅葉の瀨と見し高麗寺山も。汀の波に立交れり。

はこね山わが越かねてこゆるぎの磯のあら浪かへりみしはや

峠に來れば富士の嶺。眞白にぞ現れたる。かの駒が嶽の巓きにも。星許消え殘れり。箕根權現の宮に詣づ。物古りて最と木深く。關東總鎮守の額高く懸りて。湖水に臨める樣など。往古の名殘あるに似たり。此邊り都て杉のみにして松は無し。湯本にて物せし歌に。神垣の老木の松と詠みたるは。甚き誤ちなりけり。と悔ゆるにかひなし。幣手向け奉りて。節。

神やあるきみにはこねの二ごゝろなしと誓ひし我むかしをば

是はそのかみ公に仕へし頃。此大神の御名をしも。誓文に度々穢し參らせし事を。思ひ出たる也。扨關を越ゆるに彼の紅葉かざせるを見て。親民。

ことの葉のみちに手折りし一枝は關もる人もとがめざりけり

猶心地惱ましければ。やがて峠なる破風屋に宿る。

七日。此家は。垣根に湖水の波を湛へ。軒端に富士の雪を積みて。又なき景色なれば。春の旅にも宿りけるなり。其時詠みつる歌の中に。思ひきや富士を枕のもとに見て箱根の雲に一夜寐んとは。と言へるありしを。都人の聞傳へて評すらく。東の旅をせんには。箱根に寐ん事思ひ

かけざるにあらず。況んや西行の。思ひきや富士の高嶺に一夜寐て。云々の歌を其まゝ掠取れるなりなど。笑はれにたりと聞きつれど。古詩に古歌に似は似てん。物愛でするえせ心には。猶思ひ掛けぬ心地して。懲りずも此あした。

またさらに夢かとぞおもふこのぬぬる枕の上に見ゆる富士のね

箱根こえふたゝびみたび見れど〳〵見ぬ物よりも珍らしき哉

節。

きても見よ富士を枕のもとよりも外にいふべき言の葉はなし

是ようさき寐覺したるに。庭鳥の聲しば〳〵聞ゆ。

そらごとははかりもしらぬ君が代の關路まさしき鳥のこゑ哉

鳥の音のほのかなりつる關の戸は杉の木間にあらはれにけり

是は明るを待ちて起出るに。關屋の戸扉。塔の島根の朝霧に連なりて。この垣越しに見ゆれば也。節。

ひらけたる關のひがしの國原のかずを八聲にうたふとりかな

いとゞもをしけれど。限りあれば立出づ。おなじ人。

夜をこめて誰か立ちけん松の火のこぼれし跡ぞ霜にみえける

向ふ坂より風越にかゝる。おなじ人。

かざこしのまのゝかや原ふみわけてさやかにみつる富士の白雪

さて行く程に。やごとなき女ばら一群逢へり。己がじゝ小褄とりも敢ず。振袖結びながら。岩根踏みさけまどろにも亂れ來るものか。

風こしの坂のゆきあひにちりかゝる一むら紅葉色のときかな

物にも似ずさりあへがたし。傍らに問へば。是は筑紫路なる國の守(肥後侯)の御女。吾嬬の御館に下り給ふ也と言ふ。石原坂に下り來れば。伊豆の海原見え渡る。鎌倉の大臣の。沖の小島に波の寄る見ゆ。と詠み給へりしは何處なるらむ。只天城の大島のみぞ。遙かに打向ひたる。昔の古道よりは。さる小島もや見えつらむ。

伊豆の海や沖に小じまは見えねどもよりけん波ぞ面影にたつ

大枯木に來れば。駿河の海も一つに見えて。薩埵山眉の如し。

海原の雲ゐがくれの一むらのはなれ小じまやみほのまつばら

猶下りて富士見平にかゝる。實に名も著く雪の姿殘りなく現れて。磨き出せる玉に似たり。寶永山此方ざまに向へるを。節。仰ぎ見て。此疵や千古の恨。と獨語つを聞きて詠める。

天の下ふたつだになきまゝ玉のかけたる歎きたれかせざらむ

上長坂に休らふ。此岡の西の方。十歩許り差出て見るに。南北一つに成りて打開きたり。沖津浪此方の嶺に返り。目の前の松は高嶺の雪に聳えたるなど。名たゝる限りは言ふも更也。數ならぬ谷の狹間岡の面まで。景色更に尋常ならず。箱根路の眺望は此所を第一とすべきにやあらむ。山中の里は前の月の末つ方。殘らず燒失せて。春見つる名殘もなし。板以て圍へる家所々物賣るあり。

山中のまつの常磐もおほかれ木小枯木とこそなりはてにけれ

笹原より。小時雨大時雨を下りて。松原を左に登り行けば。初音が原なり。限りなく面白き所なれども。人多く立寄らず。

引うゑしいつの初子がはらならむ千世にもあまる松のかげ哉

春遠みまだふゆごもるうぐひすの初音がはらはある人もなし

夫より斜めに行きて。今井坂の上なる。愛宕の神の後ろに出づ。森の木立に立交りて紅葉未だ殘れり。朧ろなる夕日さし靡きて物凄し。麓の方にや。

賤の女が夜さむのころもおる機のこゑの外には音なかりけり

さて遂に下り果て。三島の社に詣づ。いと廣き御垣の内。見奉り回る折しも。

散かゝるいてふの一葉そでにうけてやがても幣と手向け祭らむ

己が物なるをと宣ふべし。見戀居の森も此邊りと思ふに。餘所にぞ聞捨て難き。

人の親のこゝゐの杜の木がらしは身をわけてふく心地こそすれ

そゝろ寒く。日も暮んとすれば止まりぬ。此里に三島暦とて。世に名高く物せるは。異なる節もやあらむずらんと。買求めて見るに。只一綴の冊子にて。其樣のみぞ變れる。頓て來ん春の事始めなど見ゆるも。中々に心細き心地して。

はかなしや五十ぢあまりの年月も夢とみしまのこよみ也けり

八日。前宵より風寒く吹起りて。今朝も止まず。雨にやならむ雪にやなど言罵しる程。少し和みぬれば。先づ降り來ん所までとて出立つ。

降りくとも志らでふみ渡る石ばしの上に見えたる雨のあとかな

すはやとて急ぐに。又風さへ加はりて。彌降りに降布けば道さへ見え分ず。此邊り何國と問へば。伏見を過ぎて黄瀨川なりと云ふ。

常ならばなつかしからむ里の名もうきふしみなるけふの旅哉

かぜたちてみぞれになりぬ簑かさも誰きせ川に知る人はなし

節。

とてもやむ空にしあらずば玉鉾のみちゝろ妙に雪もふらなむ

辛うじて沼津の宿に入りぬ。

玉ぼこのみちも沼津となりにけりふみふむ上にみぞれ降りつゝ

車返しの里も。此邊りにやと覺えて。

小ぐるまもかゝる時にやかへしけむ道の空よりふるみぞれ哉

今日はとて止まる。餘りに道捗どらずなど呟くめり。今宵の主人は心利きて。よしめきたる酒肴調じ出せり。折しも此里の藝者なる者。隣の間に來聚ひて。舞ひ歌ひけるが。一人其中に。武藏野の所緣ゆかしくや聞取りけむ。やをら這ひ入りて。御盃などけさうびたり。濃紫ならぬ淺草の一本ゆゑに。見ながら宵ならず思ひ參らせ侍りてぞ。憐れと見給へてなん。心の外なる宿世侍りて關の此方の浦波に。斯く鹽染侍るものから。彈習ひぬる糸筋の。合はずば何をと。彼方此方にかけ侍るも。玉の緒のみだり心地になど。語りも畢ず調べ上げたり。彼の何某が。潯陽にて聞きつらん。四の緒の例も彈き出づべき今宵の樣かな。さりや憐れ如何にと聞くに。只張り出て叫ぶのみぞ。帛を裂くの聲なりける。扨今宵殊の外に寒し。孝一。

ふじのねの嶺の白ゆきこよひしも裾野をかけて降りおろすらむ

九日。今日も曇りたれど。昨日には似ず。千本松を過ぎて見渡すに。かの高根は言ふも更也。さらぬ峯々も殘る色なく降滿てり。

たれしかもそらにわくらむふじのねの上に降りそふけさの白雪

或所にて。酒酌みながらあされ詠める。節。

ふじのねの裾わけならし足がらも箱根も雪をいたゞきにけり

諏訪松長を過ぎて原にかゝる。

富士のねを木の間〳〵にかへりみて松の陰ふむうき島がはら

裾野の方に。鷺の一群飛び行くを。孝一。

今はたゞ浮島がはらとぶさぎのつばさの外にあらなみもなし

昔は此圍り。海原なりしと云ふを詠める也。今は餘波ばかりの大澤。麓の東南にあり。里人は之を指して。浮島が原と呼ぶ。大路よりは二町許り隔てたるを。立渡りて見るに。棹さす小舟の。遙に打渡るなど最と面白し。親民。

見渡せばあしかり小舟こぐみづに富士の高ねもうきしまが原

今日見る富士の景色を云はんに。渾ては曇り日なれど。中々鮮明に見え渡れるが。漸うにたなびく雲の。遂に埋み果て。纔かに麓を殘せり。未の頃より又絶々に。且見え且隱れて。木間洩り來る月よりも。心盡しの空也。節。

白雲のいまはと思ひたえまより又あらはれて見ゆる富士のね

箱根路は前宵の雪。四尺許り降り積みて。跡絶えたりと行く人語る。實に今日も雪深し。

鳥の音にひらく關路とおもひしは雪のとざしを知らぬ也けり

かしこうも早くぞ出にける。今一日止まりなば。雪の底にぞ消んずらん。さて鈴川を渡りて豫田橋を出れば。立揃ひたる松原の上に。引据えたらん樣に向へたる姿。又更に比類なし。夕雲脚高の嶺を埋みて稍暮れなんとす。

踏いでしあしたか山のあしたよりゆふべになれど麓をぞゆく

烏の打鳴きて亂れ行くを。

まて志ばしとまりがらすよ我宿もそのまつ陰のよし原のさと

今宵野口が家に宿る。隙間の風冷え渡りて。夜たゞ夢も結ばず。

はだへすら氷るばかりに寒き夜をおもへば富士の麓なりけり

十日。朝まだきより霙降り荒び。風烈しければ。今日も此宿に居り。終日埋火に埋もれて身動ぎもせず。軒端なる楓の半ばもみぢたるが。いと麗はしきを間より見て。

雪よりもおろす時雨やそめつらむ紅葉もときをしらぬ色かな

十一日。吉原を出づ。河原宿より顧みれば。富士の嶺曇りなし。凡て山足東西に蹈開き。打靡きたる裾野まで。端山繁山障りなく。殘る隈なく見え渡れるは。此邊りより中の鄕までの間なるべし。扨うるひ川蓼原を來る程。又立隱したり。

大かたは雪と雲とに埋もれぬあまりにたかき富士のやまかな

人も斯くこそあらめ。吹上に來れば。田子の浦見え渡る。坂中の榜木に。今朝散りし甲斐の落葉や田子の浦。と云へる芭蕉が句を書付けたり。其落葉とも見るばかり。數の釣舟散亂れたる。言はん方なし。蒲原を過ぎて由比に泊る。さて此家の庭前なる汀の松など能く〳〵見れば。下りつる時。餘り磯際の波騷がしとて。宿り敢へず。立出し宿なり。然るは片腹痛く面伏せなる心地すれど。彼れは得見知らず。

契をやゆひのはま松かへりきてたちよる蔭のなみを見るかな

果して今宵寐られねば。晝見れど飽かぬ田子の浦と言ひし。古人の心をも思ひ出られて。やをら起出でゝ見るに。月は何國よりさすらむ。波の上所々朧に白く。見馴れぬ景色も珍らしき物から。いと凄き心地すれば引たてゝ入りぬ。いよ〳〵目も合はず。

あらためていかに枕をゆひのはま春より高きなみのおとかな

十二日。朝とく出て由比川を渡り。寺尾の松原を過ぎて薩埵山にかゝる。伊豆の海遙かに。日影匂ひ渡れり。弓手の方を見れば磯山陰の上より。

さやかにもあらはれ初し富士のねにさし向ひたる朝づくひ哉

己れ麓を望みて曰く。關の昔も懷かしきに。いざ彼の見ゆる磯邊に下りて。岩根傳ひの古道を行かんは如何に。荷負へる男子が曰く。然らば後なる倉澤よりこそ下り給ふべけれ。目の下にこそ見え侍れ。此峠より下る事は最難かなる業にて。固より然る道も侍らず。縱や下り立ち給ふとも。親知らずの邊りは。この程くえ入り侍りて。傳ひ行く事いと辛く侍りなん。己れ曰く。扨こそは關守る波のかひはありけれ。いざや先づ分け試みんとて。荷など物せさせて。孝一を先へ遣はし。節親民二人を率ゐて。直ちに踏下る。小松高茅限りもなく茂りなだりて。更に道なき物から。嶮しくもけはしければ。さる茂みに障りつゝも。一人ぞすべり行く。手も顏も搔裂きて。いと堪へ難き中に呻き出たる。

岩木山まとへるかづらとりすがり苦しき目にもかゝる富士の根
又把りたる力草の。颯と薫れるを見れば藤袴なり。

ふぢ袴たれぬぎすてゝくだりけむ我のみと思ふ山のとかげに

下るまに〳〵何にかあらむ。針ある木のしもと原にして。あらゆる蔓這纏ひ。柵かゝる小牡鹿の。胸分けするに似たり。節先に進みて。刀以て切拂ふ。固より踏みし跡もなければ。己が向向下り別れて。折々交互に呼び交すめり。其聲も聞えずなれゝば。若し麓の崖路を踏落して。波にもや溺れつらむなど思ひ過すに。いと恐ろしきまでなりぬれど。扨止まんやはと猶進み下

る麓より。節呼ひて。むげに嶮しく侍れば。纔にして下りきる事叶ひ侍らずと言ふ聲。波と共に響きたり。飛び下りんは如何に〳〵。否や纔と云へど猶一二丈も侍るべし。太刀佩きながらは極めて過失侍らんと言ふ。嗚呼妬しや。何にかは來たりけん。

磯ぎはにおり立かねて白浪のかへるぞ田子のうらみなりける

然らばとて踏返すも猶易からず。今は草鞋の底も悉く脱けて。いと踏締め難きを念じつゝ。這登るに岡めく所あり。皆其處に集ひ伏して。息繼ぎ合へり。此日頃我が詠む歌を聞きの隨意書付たりしを。今の騷に落しけん見えず成ぬとて。裳のたをりまで拂ひ搜して。節。

をしきかな山邊海べによみためし數もまらたま誰かひろはむ

あな妬しと言へどかひなし。扨塗れたる血を拭き。汗搔拭ひあゆび引締めて。漸う元の道に上り來れば。時は午の下刻なり。纔の上り下りに。可惜時をも過ごしにけりな。いと鈍かりしわざかな。孝一や如何に待わびん。いざと急ぎ下りて奥津川を渡り來れば。孝一待受けて。やがて此處なる茶店に入りて晝餉など物す。南面打開けて。三保の松原前に列なり。磯の巖に鵜の翼干せるなど。わざとならず面白き邊りなり。庵崎のこぬみの濱と詠めりしも此邊りなるべし。此家は春も憩みし所にて。折節彌生三日の潮干に會ひて。和布苅貝拾ふなど。見愛て酒酌みしも今の心地す。

おきつ鳥鵜のゐるばかり殘りけり潮干に見えしいその岩が根

掛けたる一軸を見れば。誠拙大德の筆也。實や此度は世に忍ぶたちのいそぎに。かゝるあたりへは。なべて暇申さゞりしことの。暫しの程ながらいと心ぐるしきを。今爰に微風吹幽松と書かれたる一行を見るにも。密に心ばかりは其方の空になん。又普門律師も如何に思ひ來し給ふらむ。

われを君まつば遙かにへだつれどふきこそかよへ三保の浦風

など獨語たる。今日は思ひかけざる薩埵の山踏に。各〳〵疲れ困じたれば。未だ早けれど江尻に宿る。

十三日。つとめて巴川を渡る。此川庵原有渡兩郡の境と云ふ。暫し來れば草薙の神社へ詣づる道あり。左の廣野に一叢の森見ゆ。其邊り往古の燒津なるべし。

今もその大御つるぎのたち風はかれふす草のいろに見えけり

小吉田の外れなる。長門鮓賣る家に憩ふ。此所は往昔梶原景時。二代將軍の怒りを避け。一宮より落延び來て。其子景季景高等と共に討死せし邊り也。打渡したる野末に。芝山の紅ぢたるあり。里人梶原山と云ふ。其上の松叢に塚ありと聞くも。いとあぢきなし。遙かに拜み遣りて。

山松のあるしばかりを殘しおきて幾世のあもの下にくちけむ

此主は鎌倉景正ぬしの孫の統にて。我が遠つ祖父とは。兄弟の連なる因み外ならざめれば。斯く一首の歌を手向るも。逆緣にはあらじがし。節。

武士のよろひのそでのちしほより紅葉のいろはそめ出にけむ

ふじのねのみ狩の犬の末つひにあはれえものゝ數に入りけむ

栗原長沼を經て府中に到る。賤機山なる淺間の大神に詣づ。大御社今作り掛けられて。甍の數備はらずと雖も。先づなり立る宮居の莊嚴。未だ世に見ぬ光なりけり。是は東照る大神の。現し世におはせし時。御誓ひありし御影にして。さは鎮まります。下野の二荒山の結構にも。をさ〳〵後れずと云ふめり。然る神魂のふゆに逢へるを畏み奉りて。

此神はみだれたる世をたてぬきにをさめたまへり賤はたの山

安部川を渡る。此川上に木枯の森ありといへど。行きても見ず。

いかにしてかげをばとはんおとばかりきくだに寒し木枯の杜

駿河なる安部の川原のかはごしの手ごしの里に我はきにけり

富士のねをかへりみるまで歸りくるあづまの旅は日數へにけり

里の子供の遊べる樣を見て。節。

日數をやわれもかぞへんうなゐ子がつくやまりこの里の夕暮

やがて此里なる桑名屋と云ふに宿る。明ん朝たは宇津の山越に掛らんずるに。窓打つ雨の音絶間なく聞ゆれば。明日の山路如何にいぶせからんなど。各〳〵わぶめり。曉に至りて猶止まず。

夢さめて夢かとぞおもふうつの山ふもとの里に旅寐してけり

十四日。立たんとする時に至りて。主人一枚の願書めく物を出せり。披き見れば。前夜より御擧動見奉り回らすに。何某と申す御名は假初にて。實は香川の君にておはさうず。畏こくも測り知り侍りぬ。若し然らば一夜の御宿奉り聞えしは。己れが面目に侍り。今言の葉の道に於ては天の下に獨立ち。聞え驚かし給ふめるを。誰かは聞知り侍らざらむ。何にても御歌一首書記し賜び給はんには。永く寶とし侍るべうなど猶くだ〳〵しう。文字の樣いとかたくなに書居たり。片腹痛き物から。前夜より殊なる待遇せしは。此謂れなりけりな。往つ日沼津の主人も斯ぞは言ひし。事の序になど例の契り置くめり。吐月峯を右に見て丸子川を渡る。雨いみじう降れば。踏すべりて最危ふし。所を問へば赤目が谷と云へり。

鞠子よりかゝる山路の赤目がやあからめなせそまろび落ちなむ

行く方の谷を遙かに見遣りて。節。

畑あらすおゝをやうつの山かげに火繩てにまきたてるさつ人

登り行くまに〳〵道堪え難し。かゝる山邊を來ん春も。又立返り越ゆべしとは。豫て思ひきや。

明日ものせん小夜の中山も。實に命なりけり。世は定めなき物と思ふに。彼も又思ふ事あるらん。孝一。

はかなしや明日は夢とぞ成ぬべき今日のうつゝの宇津の山越

と打詠め行く。

あまたたびこゆる山べのさねかづらくる事かたく何思ひけむ

是は孝一がさね葛を引きて。手繰り敢ぬを見て思ひ寄せたるなり。十團子賣る家に憩ふ。其處なる平橋の邊りより。古道に入るべき跡あり。親民。

雨だにもふらずばやがて分けいらむ物なつかしき蔦のほそ道

岡部を過ぎ鬼島水森を經て。藤枝にたどり着く。東屋と云ふに入りて物食ひ酒飲む。今日は道の惡きに倦勞れて。且醉にさへ醉へれば。今は歩み難くて。宿るとはなしに。さながら此家に明しぬ。

十五日。今朝空晴れたり。瀨戸川を渡りて頓て瀨戸村なり。女共の染飯賣るを買んとて。節。

おぼつかな誰をか思ひそめいひのいはぬ色にもみゆるなる哉

右の方に烏帽子山と云ふありて。其形いと能く烏帽子に似たりと云ふに。知らで過ぎぬるを悔ゆ。遙かに來て後。山の後ろより。ふとさし出たり。

おもはえず見こそかはせれえぼし山たそとやなれもふりかへりけむ

水の江を過ぎて橡山川を渡る。身を捨てこそ浮ぶ瀬はあれと云ふ歌の心も。思ひ出らるゝ川の名也。扨島田に來て大井川を渡る。連臺とか云ふ物に乘せて。人數多して舁出たるに。うしろ樣に乘りたれば。富士眞向ひに見ゆ。

白雲のうへにたゞよふ富士のねはわが浮きづみ向ふなりけり

金谷のたうげに來れば。彌〳〵現はれて。又更に類ひなし。北面に。一叢白きは。飛驒の國の山なりと云ふ。

白雪のおろしをうけてふじのねのひだりにたてるひだの遠山

槇の原を過ぎて。降り果つれば菊川なり。宿西岸而失命と書かれし承久の古へ。同じ流れに身をや沈めんと詠まれたる元徳の昔。彼と云ひ此れと云ひ。想ひやるだにとり〴〵悲しからずやは。心有らん人。誰かは袖を絞らざらん。

あづま路にありときゝつる菊川はなみだ千世ふる所なりけり

やがて佐夜の中山にかゝる。漸う登り果たる山のたわに。尾花きどろに打伏し。或は枯れ立てる樣。いと悲し氣なるに。別れつる愛松軒の邊り。そゞろに思ひ出づ。

心にはかれずやなほもまねくらむめじろのをかのきのゝ小薄

越果てゝ新坂に止まる。此里に大須賀知白とて。世に知られし翁あり。又は鬼卵とも云ふ。茶酌む女に。此をぢ猶平安なりやと問へば。此先つ日年頃の妻に後れて。即ち今宵初七日の逮夜に侍り。いと傷はしき事と云ふ。是は一度我門にも入り立ちたる因み有なれば。さすがに悲しと聞きて。然る心を物に認めて。其奥に。

もろともに老ての後のわか草のつまのわかれはいかに悲しき

おもひやるこの山中のよなき石よる〳〵なかん君がこゝろを

と書き殘せり。扨更けて後板戸開き見るに。山は軒高く聳え回りて。大空もいと窄き心地するに。滿ちたる月のさし覗きたらん樣に。いと凄うさえたる。實に心細し。

かへりても又や見ざらむ大空にてりたる月のさやのなかやま

十六日。うるた川鴨潟を過ぎて。潮井河原に出づ。女鯨山男鯨山と云ふあり。

身にぞしむ潮井河原の木枯はくぢら山より吹くにやあるらむ

事のまゝの社も此邊りなるらん。今は區々に云ひ取りて。何れの宮とも定め難しとか。

里人のことのまゝにやたむけせんいづくなりとも神は受くらむ

掛川の茶店に入りて晝餉物す。傍らに僧の酒飲みけるが。頭をば手拭もて引きまき。墨染の袖捲り手にして。爰の女に酌取らせて。戯れわゝめくを見て。彼の法師が心に代りてよまんとて

詠める。節。

五百かへり手なき罪をもわれうけんいざ〳〵つげやあはれ其酒

さて其處を立出て。

富士のねをこゝに思ひやかけ河の里はづれより顯はれにけり

親民。

歸り來ていつかあはゝの山あひにほの〴〵見ゆる富士の遠山

名栗に來れば。例の花筵織り掛けたり。袋井の邊りより雨降り出ぬ。西島の右に岩井村と云ふ見ゆ。里人言ふ。彼處は昔鎌倉の右大將の君。數多の鶴に黃金の札を付けて。放ち給ひし所にて。則ち鶴の池と云ふあり。又其鶴今に殘りたるもありて。甚く老たるが。折々此邊りに下り居るを。見る事ありなど語る。

鶴の池になれもすがたをうつし見て千代の昔の影やこふらむ

いはひつるおるしは空に殘れども君が千世こそ跡なかりけれ

三香野に出づ。

數ふればはや出しより廿日あまりみか野の原に今日はきにけり

春物せし所緣も有なれば。見付の里に宿るべし。先づ罷りて物し侍らんとて。獨急ぐめり。節。

一夜寐てきゝつる春のつま琴の聲を忘るべにとひやよらまし

今日は其調べも聞えねば。其家も知られずと云ふ。雨も猶止まざれば。尋ねわびて。遂に角屋と云ふに宿る。

十七日。空は晴れたれど風いと寒し。ぬけ道をとめて一言坂にかゝる。

故鄕のひとを見つけのさとならばつたへやらまし一言のさか

大路を行けば中泉の里に出づと云ふ。いで彼の中泉の邊りは。畏きや遠つ神。天つ御政盛んなりし大御世の當初。我後德大寺の大臣(實定公)。國々の所々所知し物し給ひつる。其中の一所也けむかしと。私かに考へ知る事ありて。遙々思ひ參らせ遣るも。今更にいと果敢なし。

名をきゝて昔をくめば中いづみ袖にながるゝこゝちこそすれ

さて池田の里行興寺に。湯屋御前の塚ありと云ふ。昔の事も懷かしくてふりはへて詣づ。櫻の陰に石塔二基あり。一つは其母刀自のにて。此邊り乃ち長者が家の跡なりと云ふ。刀自の傍らなる卒都婆に。建久五年四月三日と書付け。湯屋のは同じく九年五月三日とあり。然らばや地主の花見の頃の所勞に。其母刀自は身殁りて。湯屋の子も只四年許り後れてぞ果敢なくは成けん。彼の花の宴に。馴れし吾嬬の花や散るらむと詠めて。心なきをも打つけに感ぜしめし。誠の至りは言ふも更なり。一首の姿さへ世に類ひなきを哀れと思ひ出て。

花ざくらいづれとまらぬ世中をあばしばかりと散おくれけむ

孝一。

たらちねを思ふねざしの深かりしまことの花は冬がれもせず

天龍川を渡る。逆巻く流れいと速きに。さす棹弓に似て舟箭の如し。思ひ遣れ天の中川半ば來てたゆたふ旅の心細さを。と歎きたる。春の心も更に立返りて。再び歌ふめり。渡り果て永田の松原を來るに。風烈しう吹きて堪え難ければ。先づ濱松に宿りを需む。

十八日。宿の後ろなる松原を望みて。節。

朝日かげさしかはりけり有明のつきのにほひし濱まつの上に

是は此城の主の君。此水無月に入り代りましてより。政ち給へる事ども。大樣代り果て侍りなど。前夜家主の語りしを。思ひ寄せたる意ばへも有るべし。さて名高き濱松風やひきつらん。誰も頭痛み心地惱ましければ。今日も爰に止まる。徒然なるに。旅宿の風と云ふ題を出して歌よむ。是はわびしかりつる前夜の心を言はんとて也。

吹わたるよひの嵐のいつはあれどねざめ悲しきはままつの里

節。

濱まつのさとふきわたる風のおとに假寐の夢をさましつる哉

孝一。

旅寐するさとの濱風はままつのしもをや床にはらひかくらむ

猶心地悪しければ早く寐にけり。いとむげに若き時の夢を見て。覺めて後よめる。

夢の内にかへりいなばのみねばさてみれば戀しく成まさる哉

十九日。風寒けれど天氣よし。若林の松原を來れば。打渡せる田面に。鶴數多雛を連て立てり。

さしのぼる朝日の陰を待うけて子を思ふたづの嬉しげになく

孝一。

濱松のはま田にたてるあしたづのたつ朝おそき旅にもある哉

篠原馬郡を經て舞坂に着く。新居へ渡りの舟場なり。已れ舟醉するを恐るれば。乘りも敢ず頭を突入れたり。

さしてゆくあらゐの關はあらねどもまづ越えがたき波の上かな

渡風の烈しき音に物も覺えぬを。心地よげに歌ふ聲す。孝一。

あらゐの海舟さし來ればあぢむらのさわぐ翼に白なみぞたつ

程なく關の前に舟着く。日もくだちたれば。やがて此里に宿る。今宵津島なる氷室豐長が許へ文遣はす。其端に書い付けたる。

時めかぬまつの心は知らねどもかけてぞこふる藤なみのさと

廿日。朝とく出つ。今日も長閑し。宿の外れを橋本と云ふ。濱名の橋跡高師山など何處と問ふに。右の續きの山をば。押なべて高師山と云ひ。濱名の橋は所知れずと云ふ。

殘りけるあり明のつきのたかし山まつより上に影しらみゆく

いかにせん濱名を問へど白須賀のまらずとばかり答へける哉

本白須賀を過ぎて潮見坂を越ゆ。右の方なる高みに登れば。遠州灘目の下に見え渡る。其處より左を顧みれば。過ぎ來し橋本の邊りを掛けて。彼方なる今切の湊まで。一方に打重なりて見渡されたり。

古へのはまなの橋はいまぎれのあとなき波ぞたちわたりける

さて橋本の里は元より濱名の橋本なるべく。高師山は即ち此潮見坂なるべし。古歌に。たかし山まつの陰より見おろせば濱名の橋を渡る旅人。と云へるも此たうげの眺望ならでは。外に然るべき山あるべからず。古く參河遠江の境に高師山ありと書けるも。やがて其境の山並なれば。今に叶へり。節。

潮見坂えださしおろすやままつの木の間もおなじ海の色かな

いと長きたうげの上を來る程。かへりみして詠める。

潮見ざかまつの木の間を行く人のそでにぞかへるおきつ白波

白須賀を過て境川を渡り行けば。岩屋の觀音遙かに見ゆ。大岩村を左に入りて。其大岩寺に詣づ。是は一叢の岩山にして。巖の面屏風の如く。高く峙ちて幾許丈と云ふを知らず。其上に大悲の尊像立たおはせり。御長丈餘に及ぶべし。直下に至りて打仰ぎ拜み奉る也。かの頂を鏡石峰と云へり。實に銅佛の御影天に映りて。尊とくもいと物凄し。節。

みそらよりくだりましけん御佛の御足を山ぞいたゞきにける

と言へるを聞きて。

大御足いはほながらにいたゞきて重きちかひをたのみける哉

岩屋の何某と申す本尊の御堂は。巖の窪かなる所の下にありて。天平の頃行基菩薩。一尺一寸の御像を彫刻して安置し給ふと云へり。岩上の像は近頃の造立と見ゆ。さて巖壁の背面より。遂に彼の頂きに登る。御佛の御影は更なり。四方の望み又言ふばかりなし。夫より彼方樣に降りて。大路に出づれば飯村の里なり。

廿一日　吉田を出づ。今日はいとゞ長閑に霞み渡りて。彌生の空に似たり。豐川の大橋を渡りて下五井に出づれば。幾重の奥に富士の嶺見ゆ。

打かすみのとせの山のそがひより今はと見ゆる富士の高根か

かぎりあればきえて跡なし時ならぬ雪をときはと何思ひけむ

走川を渡りて櫻町に來。此邊り鶴多し。或は群居。或は飛行きて聲々に鳴く。親民。

なれもけふ心にかゝる雲なしと空にやあそぶあしたづのこゑ

孝一。

雲井行くとゝをあふぎてよぶ田鶴の聲さへ空にきこえける哉

國府村の小松が原より。東北の方を見渡せば。都の北白河を神樂岡より望むに似たり。懷かしき心地して。田面遙かに差出でて見れば。今放れつる松原の色さへ。今一入の景色を添へたり。

賤のをが小田うち繩手うちいでてかへす〳〵も見つるけふ哉

さて此畷を行く〳〵見れば。いとほのかなる嶺の上に。糸筋許り掛れるは。そなりや如何に。

山の端に出なんとする有明のかげよりほそくにほふ富士の根

富士は吉田にて見ゆるをなん。限と云ふなる。然るを爰にして見出たるや。心あて深からでは

と誇るめり。御油に來れば鳳來寺へ行く道ありて。追分と云ふ。節曰く。五年許り前なるべし。

葉月の頃彼の鳳來寺の邊りへ。物敎へに罷りし時。此里より春初めて。ほむのが原は月の光り

に成て。虫の聲樣々鳴充ちたる。憐れにも面白かりし夜の樣。今に忘れ難しと語る。實にや此

原は月の夜の望み如何ならんと。昔の人も床しみしを思ひ合せて。

いにしへの人もほむのが原にして見つらむ月を思ひこそやれ

赤坂に來れば。あそび共端近う居並びて。爭ひ呼ぶ聲いと騷がしう。塒をを占る群鳥に似たり。

この君なき家をとて選び宿るめり。是は此邊りのとまり〳〵。いと古き世よりの慣はしにて。

故郷遠き旅人の。草の枕に置く露を。且拂ひ且添へて。きえかへる身のよすがとするも。宿世

果敢なき業ならずや。

昔より色もかはらぬかは竹のひと夜のふしぞあはれなりける

さて今日ぞ。都は大嘗會にておはすらん。日次算へ當て。遙かに想ひ奉り遣るもいと畏し。夜

更けて仰ぎ見るに。大空晴渡りて。有明の月清渡れり。

大君のおほなめまつりきこしめす夜と霜雪ははゝかる空に月ぞさえたる

廿二日。つとめて出づ。

うちとけてねざりし宿の朝手みづ氷りながらに結びてぞ立つ

音羽川千束川など渡り行きて。中柴の邊りに來れば。田面の水打煙り。山々も春めきたるに。

藤川の名もゆかりあり氣なり。大平橋を渡る。ゐせきの音は遙かに響きて。廣瀨の平かに流る

る。いと長閑けし。

夕日さす大ひら川のみづのあやの影さへそこにうつりける哉

過來れば左の方に小豆坂見ゆ。麓の原物凄く冬枯れたるに。昔の面影立添ひて身にしむめり。

志のすゝき入りみだれけん武士の槍のほにこそ見え渡りけれ

かけと云ふ所に來れば。岡崎人都筑大成桑田龍臣出迎へたり。伴ひて此里なる桔梗屋と云ふに宿る。夜更るまで酒酌みて語り罵る。大成うたふ。

ひさかたの天とぶたづの一こゑをふたゝび聞くも命ならずや

此春初めて契を結びて。再度は見えじや。見えんなど。詠み捨て別れたるを思へるなるべし。龍臣も道の上に就て。心得違へる事など。頓に悟りぬる事を喜びて。

大空のまぐれの雨のかゝらずばいかで下葉のいろにいづべき

廿三日。今日も集ひ來て終日物語りす。大成再び來て曰く。明日は案内申しがてらに。八橋の邊りまで送り參らせんとこそ契り侍りしを。此頃うませたる子の。前夜より熱の心地侍れば。其程量り難く。いと心苦しくも侍るかな。先づは別れの御杯など言ひて。

ちぎりをやかけたがへんと八橋のくもでにこよひ危ふまれつゝ

となん詠める。己れ曰く。然しも温み給へるは。今此邊り流行侍ると聞くなる。痘の氣にてこそは侍らめ。いと幸の事かな。むげにさばかり幼なき程に病み給ふめるは。極めて輕らかに侍れば。平かにこそ在すらめ。返り來ん春はいと目出たう。御悦び申したいまつるべし。

先こよひ三千年までとくみそめん今來ん春のもゝのさかづき

廿四日。岡崎の町中より右の野に出て。近道を行く。伊賀川を渡りて矢矧に出づ。いつも景色佳し。

矢はぎ川わたす長橋ながければたちたゆたはぬ人なかりけり

孝一。

のる駒にまかせてくれど三河路の矢はぎの橋は長くもある哉

橋の此方に來れば。早く晝餉の時なりや。食せ〳〵と呼ひつゝ立寄るめり。

弓束とり矢はぎの里はゆく袖を引しぼりてもはなたざりけり

暮戸に來れば。雨ほろ〳〵落つ。

浮雲のむらづみ山のあめをみていそぎくれとの里もかひなし

大濱を行くに。左の方に當りて水鳥の聲すれば。やがて分け入る。

大はまの小松ふみしだき遙かにも打出でてみるかみくらの池

いと廣く湛へ回りて面白き池なり。汀を傳ひて牛田に出れば。いと強く降出でたり。賤が機織る屋に暫く雨宿りするうち降止みぬ。さてかの八橋の跡見んとて。右の方なる畦道を行けば八橋の里なり。其處に無量寺と云ふ寺あり。其内に池ありて。冬ながら杜若咲けり。昔の跡を爰

に移し殘せりと云ふ。夫より在原寺に詣づ。一町許り北なる岡の上に中將の墓あり。田面の爺を案内にて。其所見回る。さて其爺語らく。當初此邊りは皆海にして。此山邊まで波打寄せて侍り。其時や。秦何某と云ふ醫師。二人の子をもてり。それを此海にて失ひ侍り。其妻歎き餘りて。彼の子が浮び出ん菩提の爲に大願心を發し。向ひの島より此山まで橋渡さんと誓ひて。水底を探るに。いと淺き所八所あり。其所に來つゝ柱を建並べて。板を架繼ぎしより八橋と申し。業平朝臣も是を譽て。きつゝなれにし妻しあれば。とは詠み給へるなり。實に此妻なくんば。此橋誰かは架け侍らん。其所の如き都人の疎かに見過し給ふ邊りには侍らず。已れ所に年經りて詳き事を探り究め侍り。偶ま已れ逢ひ參らせずば。爭で其所謂をば知り給はんと。こだいなる咳嗽屢物して。誇り立ち言ふ顏に。汗霑ひて口吃り。耳鼻さへにをごめきて。岡のつかさにひゞらぎたる。其形猿に似たり。實に此里の賢し人なめりかし。返り出て池鯉鮒の驛なる山吹屋に宿る。然るに江戸なる詩佛翁名古屋より歸るさにて。同じく此家に宿れり。豫て已れに逢ふべき心構へして。名護屋よりの文なども物し給へりと主人の云ふに。是は願ひたるにも似たるかな。音のみ聞きつる物をと。やがて高殿より下りて相見ゆ。夏より江戸を出て都をも巡り了て。漸う此處まで返り出侍りなど語り敢ず。一卷を取う出て見せられたる。是は然る所所にて作られしから歌若干なり。中に就て殊なる景色を。間々に書かせて物せられたる。繰返

しつゝ且問ひ且見。知らず譽にをごめきぬ。歸り來て然る中の一二を擧ぐ。いと愛たきも多かめりしを忘れにけり。

萬碧樓作

宇治橋頭日欲レ頹。紅楓兩岸錦成レ堆。不レ知一道中間水。劈二破青山幾許一來。

發二土山一抵二鈴鹿一途中。風雨大作。

雪正晴時擡レ首看。峰々爭立白孱顏。撚二斷陰鬚一無二別語一。軟紅光裏湧二銀山一。

春樵諸人。邀二飲於四條橋酒樓一。

莫下折二一枝一簪上白頭。渠縱不レ愧我應レ羞。近來自覺情懷淡。老與二名花一風馬牛。

暮て後。半開の梅花を瓶に挿して。是見よとておこされたるを。暫く見めでて返し送るついでに書い添へたる。

大窪ぬしに今宵しも。此宿にしてまみえ參らするだにあるを。梅が枝のあまりにとく咲たるが。珍らしければとて。活けたるさながら持せおこしてさへ見せ給うけるは。いとかたじけなき物から。添ふべき一種の猶足らざめる心地するを。飽かぬ方に打恨みて。

うぐひすの聲ぞきこえぬ梅の花早く見たるはうれしけれども

梅の花一夜はとめじうつり香に折らぬ袖をもうたがはれなむ

物言ふ花も立交る宿なれば。老の心も僻みてなむ。

廿五日。翁とくより登り來まして。何くれの物語り時移りぬ。さて昨宵の返し也とて。扇取う出て差置かれたるを披き見れば。

檐頭挿二得早梅一來。爲レ使下人知春信回上。何計幸逢二幽賞客一。一枝香雪化二瑗瑰一

今日しも至日なれば。然る心を含められたり。又別れんとする時。昨宵の作なりとて。書い付け置かれたる。

與レ君同是風流客。邂逅相逢逆旅中。一夜閑談不レ須レ睡。明朝分レ手各西東。

山田居敬と云ふ人。翁と共に宿れり。是よりも彼の梅の意ばへなど。文に詩に書い記し送られたれど。餘りに事長ければ爰に漏しぬ。又此人名や所や問ひたるに答へて。節。

自レ知二天地三十年。寒餓嚼レ氷膽如レ鐵。單身去レ國今西飛。青鬢狂兒名是節。

晝の頃立たんとするに。主人曰く。此春宿り給ひし時。書き下されし桶狹間の御歌をば。表具せさせ侍りて。今南面に物し侍り。此度も御印し許りに。何にてもと乞ひ止まねば。取敢ず遣はしたる一枚

棣棠園にやどりてよめる

天地のいはぬいろにはにほへども問はぬ人なき花のやどかな

此主人は。篆刻など物して。世に知られたるすき者なり。池鯉鮒の宮に詣でゝ。今岡今川を過ぎ阿野に到る。清らなる道の隈々。夫とはなしに心行くあたり也。節。

おもしろき道にもある哉松原のたえま〳〵にかゝるはにばし

せんこの里に到り。辰巳屋と云ふに入りて。酒飲むついでに。二村山と云ふは此邊りになしやと問へば。主人曰く。此は是より直に十町許り分け入り給へば。二村山にて侍り。やがて其麓古への鎌倉海道にて。其道より鳴海の宿へ出られ侍れば。さばかりのまはりにてはおはさじ。必見て行き給へ。さる方におかしき山也。然れど道もしどろにて。山も何れと見給へ分き難く侍れば。案内人連れ給へとて。里人一人傭ひ出て物せさせたり。心有りける男子なりけり。今日は道もいたく後れ侍れば。歸り來ん春物し給はんも遲からじなど云ふ。

東路の二村やまのふたたびをまつべきものかいざこえゆかむ

東へ向ひてかの逕へ登り入る。馬籠沓掛など見渡す景色先づ佳し。彼れなん二村山也と云ふ方を見れば。實に打續きてなだらかなる山の中に。其邊り二村にぞ分れたる。扨たうげに登れば。地藏堂あり。海原野原見回らすに。巽の方は昨日來し方にて。限なく打開きたる田畑なり。かの光行が下りし時。明け行く末は波路なりけり。と詠めるには違へる心地ぞする。實に昔は鳴海より引回りて。然る海原なりけんかし。八橋の翁か空物談りに。實事も交りにけりとて笑ふ。

凡て此山巖もなくて。最滑らかなる物から。所々高くかけ崩れて岸めく所多きに。其くえ現はれたる埴の色合。濃き薄く打匂ひて。美しき事目もあやなり。往古の埴摺の絹も思ひ出らるゝに。凡ても懐かしき心地して。堂の横木に書い付けたる。

から錦ふたむら山のひとむらはとりて都のつとにもていなむ

五月の頃紀成を都へ歸し遣はせし時に。玉櫛笥二むら山の明方に名乗り出たる時鳥哉。と詠めりしと聞きつるは。此邊りなりしや。猶世にあやまてる三河路なる。法藏寺の山なりしや。いと覺束なし。そのかみ能元西行などの。此二村山を三河と思ひて詠まれたるは。此山の流れほと〳〵彼國の境にも及びたれば也。昔はいと深く入り立ちしなるべし。況て東より登る人は。先づ踏む方に付きても。三河の者と思ふらんかし。さて山を下りに乾を指して一里許り來れば。鳴海の里の橋づめに出たり。日も暮れぬ。

行き暮しいづこも見えず鳴海潟千鳥ばかりもあるべにはなけ

かのあゆち潟の櫻田も。此邊りより見遣らん物を。言ふかひなし。笠寺なりと云ふに。いと暗き空に。けうとく聳えたるは樓門にや。此頃新たに營み立てられて。未だ木工の手も。殘りなく放たぬ程なりと云ふ。やがて其門より入りて通り行くに。紅梅盛りに見えし。春の面影打匂ひて。懐かしう見遣らるれど。其木立さへ何處なるらん。あやなし。

此たびは世にもまのびの道なればかくれ笠でら闇にこそ行け

初夜過る頃。宮の驛なる紀伊國屋に入る。豐長より文ありて曰く。明日は先づ名古屋なる己がなり所に入り給へ。己れも一昨日津島を出て。爰に迎へ參らせて待わび侍り。いかで斯は日數の緩び侍るなど書きて。

たび衣立ちそめしよりけふ〳〵と音きゝ山のまつとまらずや

此山松を知らずして。時めかぬ松の心など。過ぎし便りに言ひおこせしは面なくや。

廿六日。熱田の大宮に詣でゝ名古屋へと出立つ。雨降りていと寒し。けふ都なる駿河の守しげのぶが許へ。文遣はすに添へたる。

春くともいのちぬ瀬にぞかへるらむ氷あつたの御手洗の涙

是は先前の便りに。必ず都へ歸り入りぬべく言ひおこせしかど。是より伊勢路に回り止まりて。東風吹出んまに〳〵猶引返して。彼方ざまに向ひぬべければ也。さて彼の別業に到れば。主人豐長待請けて。此度は岐曾路をこそと思ひ侍りて。日々に詠出でぬる歌さへ徒らに成り侍り。言の葉をだに蹈見給へとて書い出せり。

こえわびむ岐曾の山路にふるゆきのつもるは旅の日數也けり

岩むせぶたにの水おとときゝならし幾重のやまか君はこゆらむ

又此處なる滄浪翁（秦鼎）も。餘所ながら己れを待わびて。

都びとわたらむ岐曾のかけはしを心にかけてまつぞくるしき

となん詠まれしなど。何くれ聞集むるに。とりく〳〵添けなしや。今日しも都吾嬬の便り。一つに聞えたり。先づ東の文を披き見るに。斐雄が許より。湯本のたよりを聞き侍りてと書きて。

はこね山せきのこなたときくほどは跡追てもとおもひし物を

愛松軒なる時子よりも。過つる日に思ひ出てとか。

君は今日いづこの里にとまるらむ吹く風寒くみぞれふりける

都のを見るに柏原の齡子より。秋は歸り給はんとこそ承まはり侍りしを。如何に今までは物し給ふらむと。うしろめたうなど打わびて。

秋風のふくにつけてもとばかりに軒端の荻をながめつるかな

かへり來ん事もわすれて隅田河すめばみやこと馴やしつらむ

さばかりに君長居せばふるさとに待つ人なしと人やおもはむ

など書き續けたり。さて今宵は旅衣打寛び。心行く限り酌み更かして。醉臥したる物から。猶夢路は中空にぞ辿るべき。

此日記は宿り〳〵の燈火の下にて。其日の事ども忘れぬまにと。忙がはしう書い付けたる中

に。少し歌めきたる事の所々を。其まゝ拔出たるに侍れば。前後おどけなう。古への年月をさへ考へ違へる事だに見え侍り。況んや文書く筆つきにも侍らねば。今此打解けし友同士の外には。更に見え聞ゆべき物にあらず。然るも猶時後れては何の興かあらむと。せめてぞ早く物し侍りし。又とく引きもやりつべし。

文政のはじめの志はす一日つゝまなる椿園にてしるす

景樹

中空日記　終

磯つたひ

只野眞葛女

葉月はじめの頃。磯づたひせんと思ふこと有て。鹽竈の浦より舟にのりて。東宮濱を過ぎて代が崎に着て。むね〳〵しう見ゆる所に寄て憩ひたれば。あるじ出て物語りす。今は汐の湛へたる時に侍れば。海の樣同じくて興薄し。十一日より汐かはり侯へば滿干の侍り。水中の大魚ども其輩を集へて爭ひ戰ふこと侍り。鯨は味よく肉がちなる故。諸魚取食むことを願ひ侍れども。大魚にして力强く。容易くは捕得はべらず。先年鯨の諸魚に逐れて。濱に逃上りしこと侍りし時。續きて飛ぶが如くに逐來て。眞砂の上に落るはづみに。鰭を深く突込て根よりふつと折れ侯へば。即ち死したる魚の侯ひし。總身の鰭針の如尖りて。鎌の形したる鰭兩腋に生て侯ひし。是に裂れては如何なる者も耐り得つべしとも思はれ侍らず。この魚濱人さへ始めて見侯らへば名は識り侍らず。鎌形の鰭折れて即死侍りしは大事の物なるべし。文月半のことに侯ひしかば。一の宮の邊へ持行て。諸人に觀せて後服し侍りつれど。障りたる人も侯はざりき。水中に大魚の爭ひ戰ふ時は。沖に恐ろしき波立ち。水上に跳上りて落る拍手に。下なる魚を搏んと

にや。鯨の如ふるまふこと候ふ。魚には根魚浮魚侍る也。鯨は浮魚なる故。根魚の攻むる時は水を離れて跳上り侍る也。鯱に懸られて隕魚と成て。浦々に寄り侍ることは珍らしからず候。一つ鯨に鯱多くつき候らはねば。捕得ぬ物に侍り。懸られたる跡は。深さ七寸許に長さ二三間ほどの疵幾筋もつきて。肉は左右に割て最恐ろしげなる者に侍り。鯱は海中第一の荒魚に侍れば。諸々の魚共恐れて逃去り候也。和たる時釣しても更に魚を得ぬ時は。鯱の通りしならんと申侍れど。其形を見しことは侍らざりしに。一年鯨に搏れて死したる鯱。此濱に浮み寄しことの侍りし。初めて見し事ながら。頭勝に口濶く牙は尖りて長く齒太く。背そりて劍を植し如くの鰭生ひ。尾の上下に分れて巍たる狀。最りゝしく又恐ろしげなるものに候ひし。大城の棟なる鯱の形に少しも違はざりし故。鯱とは定め侍りし。齒も皆具して持侍りしを。濱見に來し人の中。香具屋どもの見侍りて。角細工によしとて强ちに求め侍るによりて與へつゝ。今は一つだになくなり侍り。坪の内なる石に交りて有るは。其鯱の頭の骨にて侍りと云故。寄て見れば白き岩のさまにて苔生したり。徑七八寸許に圓き穴二つあるは鼻の穴也と敎ふるぞ。最怪しからぬものと思はる。身の丈も六七間は有りつることまるし。家主案内してはちが森といふ所に登りて見れば。來し方の舟路を清し珍らしと思ひしは數ならず。おもしろき崎々に波の打寄る狀。果もなき海原に釣舟のうらゝに浮べるなど云ふ由なし。嶋ども數多ある中に牛島といふ

は。實に大牛の居たる形したり。爰を離れて吉田濱を過ぎて。花淵に至りて宿りとれり。此家は昔し沖に流寄りし大木を拾ひて。唯一本挽割りて建たる家なれば。珍らしとて人の見に來る所なりき。あくる日家あるじ出て事の由を語る。爰より三十里沖に（小道なり）凪たる時も汐のひて侍り。これを大根の神社と申て。舟人ども恐れて此上には舟乘侍らず。もし誤りて乘ることの候へば必ず過失し侍り。海を司り給ふ御神に侍り。こゝによき鮑の候へば。海士どもかづきして取候へども。最深く然も荒き所故。尋常の海士は入り難し。こゝにかづきするを水の上手と定め侍り。舟の行交ふ時に鈴ふる音の聞ゆること常に侍り。むかし此家ぬし（天正年中の事也）村長にて有りしに。不圖家を燒失へることの侍りき。さる折しも大根のわたりに黑く大きなる物浮きて有しを。鯨ならめと思ひて往て見侍りしに。類もなき大木の懸りて候ひしかば。舟數多催して引寄せ侍りしに。磯邊までは寄侍らざりし故。海中にて挽割て舟に積て運びつゝ。家を作り侍りき。敷板緣板建具までも只一本の木にてし侍りし。根は幾許侍りしや。及びがたさに量り侍らざりき。先の太さ二丈餘八尺。長は千尺と計侍りしとなん（十七間半）。挽割るべき刃物候らはざりし故。瓜の皮を剝る如く能程に段を付て裂取りつゝ。柱に造り侍りつれば。半を過して流し遣さふらひつると申傳へ侍り。此木今は本淵唐木と申し侍り。僕まで十

一代恙なく。渾て家内に悪病を患ひしことなし。瘡瘡産の怪我もなし。他の家にて熱病瘧疾其外難病あるときは。此木を削り煎じて飲ませ侍れば。免れ侍りし由によりて。代々御國知す君の一度は寄らせ給ひ。諸〻の役を御免しあるのみならず。屋の損ずれば上より葺換て給はりぬと。いさまし語るを聞くにも大根の御神より給はりし寶の木也けりと思はるゝ。こゝを立て菖蒲田濱を經て松が濱にいたる。爰は濱々の中に分て愛たき所なりき。松が浦島などいふはこの分名なりけり。海中まて程よくさし出たる岩山有り。四方の能く見遣るゝ故。代々御國知しめす君の出ます所に定められしかば。御殿崎とはいふ也。暫し休みて見渡せば。水際やゝ遠く聳えたる岩に松ほどよく生たり。向ひ（南）は空も一つに際なき海なり。左（東）の方に金花山の寶珠の形して浮たり。右（西）の方に遠く見ゆるは相馬の崎。其前に黒う木立の引續きたるは蒲生の松原也けり。其處より此わたりまで磯つゞきなる直濱に。絶ず波の打寄るは白布を曝せるとぞ思はる。海の水面に日の影さし移りたるは。黄金白銀の浮べる樣にて。横折れる松の葉越に見ゆるも目はゆし。面白き岩どもの多く有るに。打かゝる波の白沫をきせ流し。あるは玉と成て碎けつゝ散るもいと清し。底の深さは七丈有りとぞ。昔西の方の國より海士人夫婦男子一人伴ひて。此處に留まりてかづきしつゝ鮑とりしに。日毎に最大きなるを獲て鬻ぎしほどに。幾程もなく富たりき。此海には鰐鮫などいふ荒魚の栖めば。こゝなる海士は恐れて底迄は入ら

で小やかなるをのみ取て有りしを。此海士は然る事も知らざりし故。水底に入て取りつるを。危き事と此處なる人は思ひ居しに。果して大鰐見つけて追ひし故。命をはかと眞手かた手暇なく浪掻分けつゝ逃つれども。最速く追ひ來て。こゝなる岸に登りて松が根に取縋りて上らんとせし時。鰐飛付て引おくれたる方の足を食たりしを。海士は上らん鰐は引入れんと角力ふほどに。足を付根より引拔かれて狂ひ死に死けり。鰐は荒波卷返して逃去りけり。子はまだ廿に足らぬ程にて有りしが。岸に立て見つれども爲ん術なければ。唯泣きに泣けり。其骸を納めて後。父の仇を報ひんとて。日毎に斧鉞を携へて。父が縋りし松が根に立て。瞬ぎもせず海を睨みて。鰐や出づると窺ひ居けるを。人々孝子也とて哀がりけり。扨年半許りも過たる頃。釣の業を能うせし海士の。修行者と成て國巡りするが爰に舍りけり。かゝる事の有といふ事は。人毎に語りつれば。其修行者も聞知りて。最哀れがりて教へけらく。鰐を捕らんと思ふに。斧鉞は不用ならめ。良き鋼にて兩刃にとげたる尺餘の大釣針を鍛すべし。夫に五尺の鐵鎖を付て。肉を餌に串して沖に出て釣すべし。鰐必ず寄來ぬべしと傳へけり。孝子甚く悦びて。教へし如くに設け成して釣せしに。鯨の子を獲しこと二度あり。幾年往回りて。父がくはれし時を算ふれば。十餘三とせに成にけり。其日の回り來しゝ時。法のわざ慇ごろにして。來集ひたる浦人に向ひ。今日ぞ必ず鰐を獲て父に手向んと誓ひて。力戮せ給はれと語らひつゝ。年比飼置きし

白毛なる犬の有りしを喚びて。父の仇を討たんと汝が命を乞ふなり。我と一つ心に成て。主の仇なる鰐を捕れと言聞かせつゝ。涙を拂いて首打落し。肉を切裂きて釣針につき串きて。沖に出て針卸せしに。孝子の一念や屆きつらん。誤たず大鰐針に懸りしかば。思ひし事よと悅びつつ。浦人にも斯と告げて。設置きたるか口らさんと云物に懸て。父が食れし斷岸に引寄せて。遂に鰐を切屠りけり。其鰐の丈は七間半有りしとなん。かゝる事の聞え隱れなかりし故。國主にも聞し召付られて。松が濱の孝子と賞させ給へる御言書を給はりて。鰐を釣し針は永く其家の寶にせよと仰せ下りつれば。今も持たり。鰐の頭の骨は。海士人を埋し寺の内に置たり。獅山公の御代の事なりき。此二つの物は今も正しう有て。道ゆく人は寄りて見つ。かゝる事も有けりと思へば畏し。

人とりし鰐に增りてたくましや仇をむくひし孝の一念は

海士人のすがりしといふ松。今も枯れずて立てり。此島の周圍を離れぬ小舟ありき。人を乘せてんやと問はせつれば。二人三人は可といふ故。乘て見れば蛸釣る舟には有し。今捕たるを膝の下に打入るゝは。珍らかなるものから心よからず。此釣人の語るやう。今よりは七八年前に龜の持來し。浮穴の貝といふ物を持はべり。我家は道行く人の必らず過ぎ給ふ所なれば。立寄らせ給ひて見給へかし。今僕も參りてんとぞ言ひし。舟より上るとて。今捕りたる蛸を乞求

めて家苞にしたり。釣人の家にいたりて。浮穴の貝てふもの持たりと聞くを。見せてんやと乞へば。内なる女足高き折敷に白き箱を据て持出たり。この磯屋の樣板敷にて。引網たく繩など多く積入れて。折敷などは有げにも見えぬに。斯く振舞ふはいみじき寶と思へる樣也。執りて視るに目馴ぬ貝の形也。徑一束半(四寸五分)に過ぎぬべし。貝最厚く外の色は白くて。茶色に虎斑の如き文あり。中は夜光貝に似て。濃なることは甚く增れり。内に汐籠りて。打振ればこを〳〵と鳴りながら聊かもこぼれ出でず。是を得て八歳になれども乾きもせずとぞ言ひし。兎角する中に釣人歸り來りて事の由を語る。今よりは十年許り前。沖に出て釣し侍りし時。四尺餘の龜を得侍りき。乘合ひし釣人も六七人候ひしが。龜は酒好む物と聞けば飲ませてんと。僕申したりしを海士共もよからんと申して飲せ侍りしに。一本許り飲み候ひき。扨放ち遣候ひしに。翌る年の夏又沖中にて釣せし時。龜の出て候らひつれば。捕へて酒を飲ませて放ち侍りしに。一年有て此度は此貝を背に負ひて。磯より半道許り隔てたる所に浮び寄て候ひき。僕は毎も朝とく磯邊を見回り侍りつれば。見怪しみて汐をかつぎ分て往て見侍りしに。例の龜にぞ候ひし。初め放ち侍りし時。目印を付侍りつれば。見る毎に違はずぞ候ひし。例の如く酒を飲ませて放たんとし侍りしに。左の手を物に囓取られつらんと思しく。甚き疵を負ひて動くべくもあらず見え侍りつれば。人を集へて舟に擔載せて(四人して漸く持たり)沖に漕出でゝ放ちて

歸り侍りしに。夕つ方又元の所に來て死侍りき。言葉こそ通はね。酒飲ませられし酬に貝を持て來しならめと。最哀れに悲しまれ侍りつれば。骸を陸に擔上げて。小高き所の地を掘て埋め候ひて吊ひ侍りき。今は公より仰せ蒙りて龜靈明神と申し侍る。此貝を初めよりよき物と識り侍らば。斯は仕候らはじを。只珍らしとのみ思ひ侍りしかば。海士乙女共の。龜の持て來し貝得させよと言ひつゝ。手々に打缺き〳〵して。取らるゝ程は取り侍りつれば。斯く損し侍る。此半にて脹切たる所にも。針もて突きたる程の穴あきて候ひしを。汐をぬきて孫共に與へんと思ひ侍りて。角ある鐵箸もて突抉りなどし侍りし故。穴も崩れ侍り。されど聊かも汐の出侍らねば。其儘にて半年許翫弄物として置き候ひしを。ふと休みたる旅人の執見て。是は正しう浮穴の貝といふ物也。如何にして得しと其故を問聞き侍りて。且感じ且缺損じたることを惜しみ侍りて。得がたき物なるを。今よりは寶とせよと敎へ侍りしによりて。俄に尊み候ひぬとぞ語りし。こゝを離れて山路にかゝるは心づきなかりしを。出離れて海のみおものふと見えたるは。晴やかにて際なく快し。又居たちて磯づたひの道にかゝる。湊濱のわたりは殊に清し。眞砂の中に黃金の箔を敷たらん樣に見ゆるが交りて。波の打寄るにつれて下り上りするが。打上られたるは。蒔繪に異なることなし。かゝるを愛つゝ磯づたひし行けば。湊藥師の立たせる邊はよそに過行きたり。後思ひ出て悔るもかひなし。千鳥は冬ならでは居らじと思へりしを。十羽

許り群居て水際を去らず求食は最めづらし。人の近づけば遠く居つゝ毎も同じ樣也。繪に書たるを見しとは異なり。身は細りて長く。をしへ鳥の形したり。飛立てば羽勝にて燕に似たり。小波の寄する時は步みながら逃行き。退く時は又隨ひてあさり。大浪の打かゝれば飛立て即ち水際に居る樣。波に千鳥とはいはまほし。

磯千鳥みぎは離れずあさりつゝ清き渚によをやつくさん

日の斜に成ぬれば。家路に歸らんことの煩はしく思はるゝを。所得がほに心おだしうて。あれは羨まし。世に千鳥がけと云ことのあるは。何の故ぞと思ひしを。打波引波に連て步む樣を以て。淮へし事ぞと思ひ合せられし。此磯は御殿崎より見し時だに。程あるやうなりしを。下立ちては最測りなし。家づとに貝拾ふとて時移しつゝ。蒲生の濱行く頃は。心あはたゞしく成ぬ。

(かえ子)

かへりゆく道もわすれて打寄する眞砂にまじる貝ひろひけり

いと飽かねども濱を離れて。先に遠く見し松原を經て家路へと赴きたりし。

おもひはかるおしあてごと

此貝を龜の痛手負ひながら持て來しをもて考ふれば。此貝の在る所は海の底にして。恐ろしき荒魚とも栖て。中々人の及び難き所故。取得ることもなきを。此龜海士に捕られて死すべき命

助けられしのみならず。珍らしき酒を飲ませられしも度々故。此報ひに龜も珍らしき物を贈らんと。強て求むとて海底の荒魚と戰ひ。身を傷められながら。辛き思ひに取得て來りしにやと思へば哀なり。世に強き例に引く龜の。弱り果たるをもて思ふに。海の底にて甚く戰ひしとは知られたり。命盡なんとするに依りて。貝を持て來しには非じ。貝を獲んとして命失へるなるべし。

海中のさまをよめる歌（海士人の住所は川子濱也）

河子なる濱の磯屋に住む海士の。沖に出居て例のごと。釣れる雜魚に加はりて。四尺餘の大龜の。浮びたりしを俱乘の。海士と謀りて美酒を。與へ飲せて元のごと。放ち遣りしに又の年。同じき龜のたく繩に。寄りて來ぬればうま酒の。ゆかしとにやと飲ませつゝ。又も放ちて遣つれば。龜の思はく死る命。全く保ちしのみならず。美酒をさへ惠れし。人の情の報ひには。得難き物を捧げもて。奉らめと思ひつゝ。浮穴といへる玉貝を。得めと思へど荒魚の。怒りかしこみ事なくは。取得がたしと窺へり。海の中には垣もなく。行易けめと世の人は。思ひぬれども浮ぶ魚。根に栖魚の別有りて。潮の階も異なれば。そこに有りとは知りつれど。千尋に餘る荒根には。行觸れがたみ容易くも。取得られねば悔しとは。思ひ染つゝ荒魚の。寄來ぬ隙に大龜は。入得ぬ方に分ゆきて。貝を取得て脊に負ひつ。心

勇みて荒波を。いかき上りつ搔のぼり。潮のさかひを越ぬべく。成ぬる時に荒いをの。睨み視るより鰭をふり。齒を剝出でゝ飛ぶがごと。追て來ぬればあら汐は。うな逆立て卷返り。底の闇は千萬の。神鳴騷ぐ如くにて。聞くも畏く肝迷ひ。沈まじ浮んと空樣に。尻を成しつゝ逃行くを。いとひかゝれば拂ふ手を。ふつと囓れて一度に。汐の境は去りぬれど。重傷にあれば潮さへ。血しほと成て大龜は。心消えつゝ一向に。弱りてあれどやう〳〵に。海路辿りて海士人の。家の邊の磯邊まで。貝を負來て生命殁けり。

萬代を經ぬべき龜はうま酒のあぢに命をつくしぬるかも
龜がよはひ酒にたちけり短かる人の命は捨るもうべなり
萬代の齡ゆづりしかひなれば手にとる人も千代はへぬべし

文政はじめのとし葉月五十六歳にてしるす　　眞葛

磯つたひ　終

常陸紀行

黑崎貞孝

常陸國。上古は海水逆流して。遷移常なかりしに。後來漸々潮退き。人民常に陸地を得て。居を安んじけるゆゑ。常陸國と云。

一說に日本武尊東夷を巡狩し給ふとき。國主毘那良珠命。新に井を掘り給ふに。泉きわめて清冷なりしかば。是を翫美し。御袖を漬し給ふゆゑに。衣手漬國といひしを。上略しひたちの國と云。筑波山黑雲掛衣袖漬國なといへり。

又常とは永久無盡の意。陸とは路の言にして。是國經歷日久しく。いよ〳〵陸路の無盡なるを見るともいへり。又江海陸地一續直路ともいへり。又千立成陸ともいひ。或はひたかち。或はひたみちなど云。以上皆常陸の國名因て來れる處なり。然るに常陸は其地高遠にして。先に日を見るゆゑに。日高見の國と云說あり。按するに日本武尊上總より轉りて。陸奥國に入ると云云。蝦夷の賊首島津神國津神等。竹の水門に屯すと云々。（竹はたかにして陸奥國名取郡に多賀神社あり）又蝦夷既に平らぎ。日高見國より還りて。西南の方歷二常陸一と云々。（陸奥國桃生

郡に今日高見の神社あり）これに因て見れば日高見國とは。高遠の地を總稱せるにて。一處の稱にあらざるなるべし。又東西の國を爲ニ日縱一、又朝日之直刺國。又青香具山者日經の大御門なと。古くいひなせる言葉もあれば。日高見國と稱せるものは。必しも常陸國而已ならず。今の常陸より以東の國を總稱せるものと覺ゆ。奥州を陸奥といへるも。常陸の奥といへる意にや。多珂郡勿來關の地方に。道口といへる鄕あり。陸奥の入口と云意なるべし。元正天皇養老年中の頃。常陸多珂郡を割き。石城菊多郡として石背に屬せしむ。石背は今の岩瀨郡にして。白河郡の北に在り。安積郡に接連て會津に隣り。蓋し石背は石城の西北にして。石城を表面とし石背を背後とせる意にや。古記に山陽曰ニ影面一。山陰曰ニ背面一。即今の山陰道山陽道なり。此等と同し意なるべし。

石城は磐城ともいふ。妃三尾氏は磐城別の妹と云。又磐衝別命あり。又石撞別兒又石城別王なと見えたり。別の字あるゆゑは。七十餘子皆封ニ國郡一。各如ニ其國一。故當ニ今時一。謂ニ諸國之別一者。即其別王之苗裔と。以上舊記に見えて。磐城の古名蹟たる事を知るべし。

常陸國境界の較定まれるは。醍醐天皇延長年中の頃より。新治。眞壁。筑波。河内。信太。茨城。行方。鹿島。那珂。久慈。多珂。以上十一郡を合せて稱せり。淳和天皇天長年中の頃は。上總常陸上野の三箇國而已國守を稱して大守と稱せり。是親王方をして補任たらしめ。東北諸

國の藩鎭たらしむ。此即ち東國に冠たるゆゑなり。茨城郡は常陸の中央にして。古へより國府たるべき地なり。今の水府御城も茨城郡常石鄕にして天府の地たり。常石鄕昔時は那珂郡にして。那珂郡又仲郡ともいへり。即ち常陸國中央にして。國府たるべき地の形勝自然なるものなり。其土水陸の府藏。物產の膏腴にして。山東の利を擅にせるといへるも宜なる哉。

仙波湖。御城の御要害第一にして。西南の郭外を遶れり。其源池野邊より出て箕川等の地を經。笠原山下を過ぎ。東流して川股村にいたり。那珂河に合して海に入る。是の湖中新に堤を築き給ひて。揚柳楓樹を兩行に植ゑしむ。所謂西湖の蘇堤ともいふべし。又湖中蓮を生ぜり。開花の節最も美觀たり。余嘗て舟入ニ芙蓉花裡一去。人從ニ楊柳樹陰一來と口號せり。

茨城の稱呼は。上古土蜘蛛なるものありて。常に穴居し。狼性梟情。衆徒を相率いて良民を切殺せり。黑坂命其出遊をまち給ひて。茨棘を以て穴口を塞ぎ。騎兵をして殺戮しめ給ふ。是茨城の郡名の因て來れる所なり。上古土蜘蛛など呼びなせるものは。今の世に盜人をどろぼうなど呼ぶと同し。昔時丹波山千丈ケ岳に栖る。又は鈴鹿山の鬼神なども。其頃世に恐しく云なせる言葉なり。後世にいたりては鬼神なりと覺ゆるもの世に多し。

那珂郡は仲郡とも云。常陸の西に鬼怒川ありて。東に久慈川あり。中間に那珂川ありて。即ち常陸の中郡を東南に流れて。水府御城の東北の外郭を經歷し。東海に入る。是那珂郡の稱呼の

因て來れる處なり。

此河其源下野國那須郡の諸山より出て。那須郡黑羽城の西より。烏山城東を經歷し。那珂郡野田村より東流し。御城を遶りて東海に入る。陸奥はさらなり。下野州幷に常陸の北郡よりも諸産物を運漕せる水路にして。常陸國中の一大河たり。

朝妻鄕。昔より古く呼來れり。蓋し日本武尊橘媛を顧び給ひし吾孀の言に因みて稱し來れるにや。知るべからず。

土俗山茶を以て杖とし。堅硬不レ折とて。人毎に此木を杖とす。上古日本武尊土蜘蛛を征し給ふ時。海石榴樹を採りて椎とし。猛卒を簡みて其椎をもて悉く其黨を誅戮し給ふよし見ゆ。海石榴樹杖によろしき事古より然り。

絁。(和訓アシキヌ) 又うすきぬともいへり。精細なるものを絹と稱し。粗糙なるものを絁と云なり。上古は相模常陸上野武藏下野五ヶ國より官府へ布を調進せり。元明天皇和銅年中より絁を始めて調進し。夫よりして布と絁と調進せり。今上毛下毛より及び其比隣より絹布を織出せる事最も莫大にして。其産物既に天下に甲たり。上世よりの産業にして。其來歷ある事を知るべし。

又光仁天皇寶龜年中。常陸より絁を調進し。又聖武天皇天平年中。常陸より曝布を貢せり。風

土記に那珂郡に曝井ありて。村落の婦女集會して布をさらすよし見えたり。今は何れの地なるを詳にせずといへり。今水府御城下は更なり。其近鄕布綿を織る事精細にして。其上品なるものは絹帛にひとし。土俗目して前白と呼ぶ。又此布綿を黑染にして黑棧留と稱し。其精妙奇品たり。下野眞岡より曝布を出だせり。最も名産たり。近時水府よりも出せり。又上品たり。蓋し下毛眞岡は。上古は西那珂郡に屬せしにや。曝井も是等の地にありしにや知るべからず。近世水府より絹布を織出せり。日を追うて精妙なり。野州武毛郡の南富山邑より絹を織出せり。上品たり。又那珂郡下檜澤邑よりも絹太織類を織出せり。皆其産物土地の自然にして。古より來歷ある事なり。

漆は上古より常陸の産物にして。最も上品たり。今に那珂郡小瀨國長野口諸村など往々出す。其他久慈郡多珂郡。及び諸處漆木多し。然れどもうるしを採る事に熟せずして。只木を植立るのみ而已なり。越前國の人此漆を採る事最も妙にして。今諸國に渡りて業とし。年毎に常陸にも來りて業とせるものまゝあり。此樹諸木と殊にして。一たび植付れば。伐るに隨ひ倍〳〵繁茂し。最も有益のものなり。餘地あらば必しも植立て。永世子孫の後榮を期すべし。

常陸國より紙を漉出せる事。上古よりの事なり。今世紙の種類數多ありとへいども。西野内と稱せるもの最多し。久慈郡大澤栃原を最上とす。夫よりして此藤下小川西金相川の諸村は更な

り。珂那郡鳥子小田野高部上檜澤下檜澤氷野澤上小瀨下小瀨那珂門井野口大岩小舟小瀨澤吉丸本郷中井千田秋田松野草國長野田長倉金井大畠等。其他野州武毛郡大内大那地谷川多部田矢又岡組松野富山等の諸村。比屋皆紙を漉く事を業とせり。常陸北郡の産物最も第一とす。鳥子村薄井氏富豪にして。紙を嚮ぐ事を業とし。郷中に名あり。其他此數ヶ村中。紙を嚮ぐ事を常とせるもの最も多し。又久慈郡大田郷中和久松平天下野高倉小生瀨大門國安蘆間東連寺等の數ヶ村。比屋紙を漉くことを業とせり。其の産物皆是其土の自然にして。來歴ある事なり。此産郷中今日の肝要にして最も先務たり。聊も油斷あるべからず。那珂郡に昔阿波の郷と云見ゆ。今の粟野にや。また阿波山上神社。今大山村にあり。此の社地より勾玉を出せり。此に比並せる地よりも。雨後など拾得るもの往々ありと云。佐竹義敦の四男義孝。大山を氏とせり。蓋此處に食邑せるなるべし。粟野と大山とは比並せる地ゆゑ。昔時は一村なりしにや。又磐船の神社あり。今穴澤赤澤に隣り西北の山奥に在り。磐の貌船に類せるありと云。粟野村に住谷玄信と云醫生あり。よく其業に委しく。殊に産術に長ぜり。圷村又阿久津と云。峨眉山人なるものあり。守愚堂と號せり。書を能くし國學に名あり。今は世を去りぬ。惜むべし地誌の考もあると聞けり。再考すべし。飯富村に青山神社あり。又大井神社も有りと聞けり。果して然りや否。

那珂郡那珂村あり。神道集（延文三年安居院圓碩の選なり）に太神はじめ那賀郡古内山に天下り。さて國中を見廻り給ひ。鹿島郡の吉處を御在所に定むとあり。古内山は古内村なるべし。又三代實錄に。鹿島造營の材木を採る。山は那珂郡に在りとぞ。又和名抄に。那珂郡に鹿島郷有りと見ゆ。今其鹿島郷何れの地にや定かならず。按ずるに下檜澤村に鹿島宮あり。又上小瀨下小瀨兩村に鹿島宮あり。又長倉村に鹿島街巷あり。以上皆那珂村と隣りて相比並せる地なり。鹿島郷とは此邊をいふなるべし。

又高久村に鹿島宮あり。後堀川院の御宇。征夷大將軍藤原頼經卿。悪來王を征伐のため關東下向の時。此社に祈願せられ。靈驗を蒙りしとぞ。今社内に悪來王の古像あり。又社前に夜叉神二躰有り。最も古像にして。今は朽果て僅に質を存せる而已なり。傍に一小社あり。陽石を祭れるも又をかし。悪來王は悪路王なり。人土是をあぶら王と云。あくろ王と云ふべし。天正の頃佐竹行義の六男に馬淵小三郎景義なるもの高久氏といふ。蓋し此地に食邑せしにや。

野口村に佐伯社あり。佐伯は播磨讃岐伊豫安藝阿波凡そ五ヶ國の社なり。是大倭健尊東夷を平げ俘にし給ふ夷屬を。右五ヶ國に居らしむ。即ち此を佐伯部といふ。さいきとは毛人等晝夜喧嘩きて。其聲さわがしきといへる言なり。那珂郡に阿波の郷あり。又阿波山上の神社あり。因て按ずるに佐伯部は阿波國たりといへども。其先東夷の族に出づれば。其枝葉存在し。此の郷中

に祭るにや。又土人の説に。此村昔密寺ありて。御朱印八十餘石とぞ。僧空海開基にして。空海は佐伯部の支流なり。故に此土に祭るとも云。又泉福寺といふ曹洞宗あり。余此寺に遊びて富家關澤氏を訪ふ。主人書畫を好みて近時諸名碩の書畫若干を珍藏せり。又御前山とて古松の繁茂せる山あり。是の山松蕈を産す。香味最も美なるよし。又大澤氏あり。昔時佐竹氏に仕ふるよし。今に羽州大館に同族を存せるとぞ。

小田野。是村には八幡宮あり。社前に杉の大樹あり。土俗相傳ふ。三浦大介紀州より移し植ると。大さ數十圍にして。中間檜の宿り木あり。亘り尺餘。神官を高信氏と云。又藤福寺といふ密院あり。三浦氏の墳墓あり。三浦家沒落し。此村中に潛めりとぞ。其支流も今に存在せると云。三浦氏の遺像及び太刀もあるよし。村長川勾氏は書を善くし。予友人なりしが。身の薄倖を厭うて遁世し。今所在を知らず。今此の記を作るに及びて。坐に懷舊の情を催しつ。

那珂郡に八部鄕あり。又河内郡久慈郡にも見ゆ。皆何れも夜太部と訓す。即ち矢田部なるべし。按ずるに景行天皇五十六年秋八月。詔二御諸別王一曰。汝父彦狹島王。不レ得レ向二任所一而早薨。故汝專領二東國一。是以御諸別王承二天皇命一。且欲レ成二父業一。則治レ之。早得二善政一云々。由レ是其子孫於レ今有二東國一云々。姓氏錄。池田朝臣佐味朝臣大野朝臣韓矢田部造等見えたり。今村名或は姓。諸處に矢田部あるは。是の枝葉たるべし。

信太郡に大野あり。那珂郡又久慈郡にもあり。此村文化中より上下兩村と分る。此大野は皇孫にして。東國を有ち給ふよし見ゆれば。今にこの村名殘りしにや。是村に十二所神あり。天神七代地神五代を合せて十二神と祭れるとぞ。大野氏神の御祖を祭りたまひしなるべし。此鄕の齋藤氏醫術に委し。博學强記近世の名士たり。遍く諸處に遊歷して。余が舊知己たり。文政乙酉夏六月。醫を以て擢でられ。郡廳に附屬せり。本姓は櫻岡氏にして。齋藤氏に養はる。即ち大窪行天民の弟なり。

久慈郡に池田村あり。其他池田と稱せる地名諸國に往々多くあり。姓氏錄に見えたるいづれ池田の朝臣の古蹟たるべし。

久慈郡は更なり。野州武毛郡など。皆七月盂蘭會に土俗男女老少相混じて。念佛或は眞言を唱へ。晝夜踊躍す。是を百堂念佛と云。此土風いつの頃より始まれる事にや知らず。然るに此れ即京都の燈籠踊なるよし。洛北長谷岩倉花園など。さま〳〵花をかざり巧をつくしたる四角なる燈籠を頭に戴きて。日夜踊るとなり。氏神より踊り始めて。其年みまかりたるものある家に行きて。夜更までおどりありき。男子は大皷を打ち笛を吹き。踊を勸むといふ。是百堂念佛なるものなり。

煙草は蔫草なるよし。武毛郡大山田村最も上品たり。武毛郡は更なり。那珂郡久慈郡等。比屋皆

蔫草を植う。此を大山田煙草と稱せり。近時いよ〳〵盛んにして。今は黒羽大田原喜連川烏山等の諸處。皆大山田と稱して江戸に交易し。其産莫大なる事なり。又大田鄕は赤土利貝等の名産あり。此蔫草近世蕃産のものなるよし。今海内ことゝく賞翫せり。今北狄の諸夷も賞せるよし。環海異聞等にも見ゆ。此蔫草外夷に乏しく。別して奇珍せる事なり。廣く古今の事蹟を推して。其時世の風を知るべし。

久慈郡大田鄕あり。是の大田の稱呼。今諸國往々最も多し。按するに景行天皇冬十月。到二碩田國一。其地形廣大且麗。因名二碩田一也。(豐前國京郡なり)今村名或は坪名など。大の字又は多の字あるは。其土平遠或は廣大なる地を云。今は自然といひならはし。土地の廣狹にもよらず。少しも平廣の地は皆大の字を用ひ來れり。大の字多の字の村名枚擧に遑あらず。

景行天皇五十七年冬十月。令二諸國一興二田部屯倉一と云。田戸の部曲に倉を造らしめ。私穀を貯へて凶年飢歲の備とせるなり。今村名地名に倉の字を多く用ひ來れり。蓋し昔時屯倉の設ありし地にや。河内郡に完倉あり。那珂郡に長倉あり。木野倉あり。久慈郡に高倉蘆野倉等の稱呼あり。其他一々枚擧にいとまあらず。總して地名鄕名姓名等。上世の遺跡殘れる事なり。凡て稗は倉庫に貯へて積年不レ損。凶年飢歲の備。最至要なるものなり。今御邦内諸處に倉庫を御設あり。近世いよ〳〵御收藏ありて。今蓄積數十万に及べり。老腐天幸にしてかゝる昇平の御

世に生れ。暖衣飽食而已ならず。かくまで仁政を見聞せるも。ありがたき事ならずや。

長倉村に近き頃より稗倉御設あり。是上古屯倉の意にもかなひ。且村名倉の字もありて。屯倉の遺跡に自然と暗合せるにや。此村に蒼泉寺といふ曹洞宗あり。明僧心越の題せる詩あり。其作清新に乏しといへども。異朝の人題名せるも又珍らし。村長泉伊右衛門見性居士と號し。常に參禪して怠る事なく。齡九十六歲にして甲申の秋下世せり。存命中上より屢々褒賞を蒙る。長子伊兵衛廣中と云。又時務をよく勤め鄕中に名あり。見性翁は余が叔父にして。長子伊兵衛は余が益友なりしが。今は既に世を去りぬ。泉氏其先佐竹氏の忠臣にして。其祖某なるもの殉死せり。佐竹侯より龜の紋を賜はりて。今に家の紋とせり。見性居士始め貧にして家産蕩盡し。持來れる具足刀劒まで沽却せり。存命中嘗て此事を余に告げて。每々歎息せり。同族あり醫を業とし同鄕に住めり。羽州大館にも同族ありて。泉隼人家茂と云。近き頃伊兵衛の嫡婿利兵衛羽州に下りて家茂に對面せり。家茂の住める街を今に長倉街と稱せるとぞ。泉利兵衛俳歌に名あり。美曲と號す。

國長村に月桂亭玄秀。醫を業とし最も眼科に長ぜり。久慈郡上古は久自ともいへり。郡の南に小丘ありて。其形鯨魚に似たり。日本武尊の名づけ給ふよしなり。此郡常陸の奥郡と稱せり。東鑑に佐竹氏の領せるよし見えたり。久慈郡の鄕名に岡田といへる地見えたり。今其所在を知らず。

又那珂郡にも岡田の名あり。按するに今開田の村名あり。開田も古昔は關田といひしとぞ。文字の似たるゆゑに轉訛して。今は開田といふよしなり。蓋し岡田も開田にや。文字の似たるゆゑに誤まりしにやあらん。開田昔時は大郷なりしが。今は上金澤村と分るよしなり。又開田村に接して佐貫村在り。此村に立岩と云地名あり。此立岩は開田村に屬して左貫村の界にあり。一奇石なり。屹立數丈。故に名づくるよし。是の立岩の地も昔時は開田村に屬せるなるべし。此開田村に邑長吉成氏あり。吉成氏は結城氏なりとぞ。偏を除きて吉成氏と名乗るとも云。武名の家なり。一説に糸井氏なりともいへり。又十二天の社あり。是も上世の神祖を祭れるなるべし。此の神の御在處を古館と呼べり。昔時柵と稱し又砦とも稱し。或は要害ともいひて。其郷中要害の地を見立て。國司の族黨其處に住居し。他國より不虞の入寇防禦の備とし。且落武者或は剛盗等の浪藉を鎮護せしと云。是の地を館と稱せり。今館と稱せる地毎々あり。今此の古館にも神社ありて。年毎に流鏑の祭事あり。來歴ある事なるべし。上古邈遠にして紀載なし。其詳なる事考ふべからず。余が郷里大子村にも十二所の神社あり。何れ古名跡たるべし。文治年中。源頼朝鹿島の社を敬し給ふ事他社に異にして。毎月の神膳料として。籾百十石を本國奥郡より納めしむる事見えたり。因て按するに大子村に鹿島宮三箇處あり。蓋し常陸の奥郡たれば。是の地も又社料に屬せし事にや。此の三社もいつの頃よりか破壞し。今は名のみを存せり。

鹿島の馬場。鹿島の森。鹿島平等あり。余か少時までは。鹿島の馬場に杉櫻など茂りて。又小池あり天女の小祠ありて。朝夕の往來にも木下闇なりしが。今はいつしか杉櫻も枯果たり。世の有様かくまで須臾の間に遷移せり。況んや數千歳を經る事をや。人世かく淺ましく。蜉蝣の朝に生じて夕をも知らぬにひとし。只是文章の一事不朽に傳ふるものなり。有志の士先づ古今の書を讀みて大業を謀るべし。富貴利達は草上の一滴露なり。何ぞ汲々として白日をむなしうせん。

八溝山今久慈郡にあり。北は陸奥國白川郡に屬し。西は下野國那須郡に接し。東南は皆常陸の地にして久慈郡なり。山中洞穴多し。古へ黄金を掘りし處なり。仁明天皇承和三年春乙丑詔して。陸奥國白河郡の國司八溝山黄金神を祈りて。沙金を採り得て遣唐使の資を助くと。山上の神祠即ち黄金神なり。今に山上より清冷の泉湧出せるを。金生水とも黄金水ともいへり。此山常陸中の大山にして。最も古名蹟たり。此土鳳尾松多くして。殊に木色純白。潤光ありて海内無比の名産なるよし。一種又サヤハタと云木あり。よく水中に在て燃ゆ。その皮を束ねて炬火とし。風雨をいとはずとぞ。珍重すべし。其他ヤシヤビシヤクと呼ぶ木あり。大樹の枝間に生ぜり。土人云鷲の糞より生ぜると。果して然るや否。小白花を開く。盆中に之を植れば深山清涼の氣あり。近時市井の人まゝ賞翫せり。又石楠花あり。櫻樹最も多し。春半諸鳥林間に囀り。

殊に瑠璃鳥など多く。其他奇草珍花枚擧すべからず。且山水の清音。出塵離俗。神仙の境と云ふべし。山上又大悲閣あり。坂東順禮の一なり。日輪寺月輪寺といふ兩院あり。修驗住せり。此祖は楠家の同族にして和田氏なりとぞ。楠正成の書あり。其眞贋は余に於て知らず。何れ古墨蹟にして。紙など近世のものならざるべし。いつの頃よりか光藏院勝藏院と云て別當となりしといふ。今山上に二院ありて。山下に一院あり。合せて三別當と云（上鄉村勝藏院は八溝山より分れて隱居地なりしよし。今古文書は此院に在り）御朱印等も賜はれり。此山八溝山と名づくるゆゑは。八方に溪水流出して。西は那珂河に入り。東は久慈河に入る。就レ中久慈河水源は八溝の山北山南數ヶ所より出る故に八溝山と云ふ。又一說に。山下上野宮上鄉中鄉町付等の四ヶ村の昔時は。黑澤と云ひしなり。近世までも黑澤と呼べり。此八溝山に妖鬼ありて。常に陰雲晦冥。麓も雲霧濛々として黑暗なりしゆゑに。黑澤と呼ぶとなり。土人因て此黑澤よりして奧は暗ぞと云ひしとかや。此妖鬼を近津神退治し給ひしより。今に近津宮に神寶となりて。爪牙なと存せり。又一說には。龍蛇蟄藏して人民を殘害せり。須藤權守某。八溝山の奧笹ヶ岳にて平治せしよし那須記に見ゆ。今上野宮村に洞穴ありて蛇穴と呼ぶ坪名あり。是毒蛇の蟄せる處なりともいへり。以上諸說何れか是なる事を知らず。又いつの頃にかありけん。予が鄉里に獵を好める男ありて。笹ヶ岳に（今高笹山ともいへり）分入りしに。圷木の間に洞あり。古

劔一口を拾ひ得たり。此男劔を得て怪みおもへらく。此劔神の惜み給ひて。他日神明の咎め給ふ事も恐ろしとて。今萬寶院といふ修驗の家に收めぬ。此家秘藏せり。予毎々此劔を見たり。何れ上世の物なるべし。

久慈郡北部を依上保內の鄉といひて。昔時は廿四ヶ村なりしが。今は四十二ヶ村となれり。塙村に寄上明神あり。今寄上の古名此に存せるのみなり。佐竹興義の二男依上三郎宗義なるもの見えたり。蓋し此地昔時依上氏の食邑せしにや。土俗いふ大子と大津と同村にして今は兩村となる。又上澤と高岡と同村なりしと云へり。下谷田中有田冥賀も同村なるよし。谷田は谷端ともいひしとぞ。下野宮近津社保內鄉の總鎭守にして。廿四ヶ村へ年兩度神輿出御し。大祭禮あり。往古の舊例ありて廿四ヶ村に出御し來れり。今を以てむかしを知るに足れり。

久慈郡の古き鄉名に佐野といへる見えたり。蓋し今の佐貫村にや。又眞野あり。是も今槇野地村あり。此の地にや。佐貫槇野地は比並せる地なり。佐貫の村長町島氏あり。舊家なり。又吉成氏あり。醫を業とし其術に委しく名家なり。此村下野國那須郡の界にして。八溝山の直下なり。那須記に佐貫某なるもの見ゆ。是の地名を名乘れるにや。

籾の字を用ひ來れる。續日本記又和名抄等にも見えたり。同文通考に和俗製作の字とせるは誤なり。續字彙補に出づると聞けり。上古の租稅は稻を束ねて納めしよしなり。畝反の廣狹。土

地の肥瘠によりて。それ〳〵に等差あり。稻何束納むるなど當時定まれる法制ありしと見ゆ。今久慈郡部垂村より山方邊にて。土俗畠の廣狹何反何畝歩といふ事を。彼は幾束。此は幾束などいへり。束はつかぬるといふ字義にして。少しの間を束間といふ。土俗の方言。上古の遺風たるを知るべし。

成務天皇五年秋九月。令二諸國一以二國郡一立二造長一。縣邑置二稻置一云々。國造縣主は神武天皇より始まれり。此の時に至て大に國縣を分ち。國造縣主も亦隨て置きしと見えたり。今久慈郡に稻木村あり。上古の稻置を置きし地なりや。又尾張に田子之稻置乳近之稻置など見ゆ。按するに國司の配下に稻置ありて。稻の租稅を收斂せる官なるべし。因て稻置といひしにや。稻木村も大田鄕に比並して。地方平廣。上古稻置を置きしなるべし。天正年中。佐竹秀義の六男義清の食邑せし地なり。

久慈河其源五あり。一は陸奥國白河郡棚倉城の西南八溝山陰より出で。一は陸奥菊多郡より出で。一は八溝山下より出で。一は西金砂山より出で。中野村にいたりて久慈河に入ると云。又は上河合村より合すとも云。一は多珂郡里川村より出で。南行數十里にして。落合村に至て久慈河に合し東流し海に入る。萬葉集に詠二久慈川一歌あり。

くじ川はさきくありまてまほふねにまうぢまゝぬきわはかへりこん

近時地名箋に。虞氏水に作る。奇を好むに似たり。此河鮎を產せり。那珂河及び諸處に出づるといへども。久慈河を以て最上とす。鮎は產物家溪鰛とせり。又紀月魚とも云ひ。香魚或は金口魚など數名ありと雖も。年魚と云ふべし。日本書紀にも見えて古名たり。

深山淸冷の水に。やまべといふ魚あり。漢名未レ詳。友人齋藤生云。往時此魚を唐山の人見て。華郎魚なりといひしとぞ。此魚は味も美にして珍らしき魚なり。

光仁天皇寶龜元年七月戊寅。常陸國那珂郡より白烏を獲て獻ぜる事あり。又同しく四年九月丁亥にも獻ずといふ。近世此の白烏稀に見る事あり。色白色に少しく赤色を帶べり。其かたち常の烏に比すれば大きく見ゆ。爪などもあらくましく。略鷹に類せるかと思はる。按ずるに是烏の別種たるべし。八溝山下黑澤鄕町付村に佐竹氏の屬黨荒牧駿河なるもの食邑せし地にて。館もありしとぞ。萩ヶ反又大音川など。昔時戰爭の場にて。白川氏佐竹氏と屢雄を爭ひしよし口碑に存せり。慈雲寺といふ密寺大院にして。末派九十餘箇寺あり。雪村の畫ける屛風一雙あり。其他古人墨蹟多し。近津の宮あり。中野宮と唱ふ（又管神の社あり）祠官菊地氏の屋東に在り。最も古くして故ある事と云。（近津宮の說下に出す）村長を飯村氏といふ。その先下野國芳賀郡飯村に食邑し。宇津宮氏の族黨にして。武功の名あり。其末裔。名孫字士德。好レ學善レ詩。予が莫逆の友たり。號二三餘堂一。又號二岳麓一。

鮭。東海及び那珂河久慈河皆あり。其那珂河より出るもの最も美なり。毎歳秋時那珂湊にて此魚を網し。上へ奉る。此の魚鮭とし又鰒とす。何れも誤れるよしなり。鮭の字に當れりとぞ。本朝食鑑に具論せり。

久慈郡に古しへ志萬といふ郷名あり。今の島村なるべし。今は川島小島等の數村あり。

又久米といふ地あり。乃ち今の久米村にして。天正年中佐竹義治の三男三郎義武。久米村に食邑し。久米氏と云。按ずるに久米。古事紀。倭建命平國廻行之時。久米直祖以二七拳脛一爲二膳夫一以從と云々。又書紀。大伴武日連。令レ從二日本武尊一。亦以二七掬脛一爲二膳夫一と云々。日本武尊東國を征し給ひし時の從臣たれば。彼の末裔東國に封ぜられしゆゑ。其古名今に殘れるなるべし。

又河内郷あり。今の上宮河内。下宮河内村なるべし。此村金沙山日吉神社の麓なれば。宮の字を添へしなるべし。郷名村名など。此等の例まゝある事なり

又山田あり。今の山田村なり。此里温泉ありて能く腰痛脚氣の諸病を治せるよし。近時人漸く知れり。

又世矢あり。今の瀬谷村なるべし。昔時鹿島の社領なるよし東鑑に見えたり。

又佐竹郷あり。即ち天神林村にして。上古の神祖を祭れる社あり。佐竹氏此地に興り。太田に

居城して遂に常陸の奥七郡を領し。漸く盛大なるに至れり。此の天神林は太田に接屬せる地にして。佐竹氏の創立せし佐竹寺あり。坂東順禮の勝地にして一大名刹なり。又木前の郷名は。即ち今の木崎にして大田に接し。昔時大田城の外郭たり。

書紀に千熊長彦をして新羅に使せしむる事見えたり。千熊長彦は武藏國の人にして。今の額田部槻本首等の始祖たりといへり。此の額田部は神代上記に天津彦根の命にして。茨城國造額田部の連等の遠祖なりとぞ。舊事記に輕島豐明天皇(應神の世なり)以二天津彦根命孫筑紫刀稱一立爲二茨城國造一云々。即是なり。今は額田村は那珂郡に屬し。額田は地方平遠。且又本國の大郷にして。今其形勝を考ふるに依然たる古名跡にして。國造を立つる地に疑ふべからざる事なり。

或人の云。額田は類聚抄に河内國河内郡に沼加多見えたり。沼ある地なりといふ。余云。常陸國額田にも大なる沼あり。沼ある地ゆゑ同し稱呼なるべし。茨城の國造河内國に在るべきいはれなし。按ずるに今諸國大津と稱せる地名多し。皆舟船の會集せる地なり。舟船の輻輳せる地にかぎるにもあらず。人馬の輻輳せる地をも皆大津など呼來れり。此同名あるゆゑなり。

下野國武毛郡は十八ヶ村なり。那須郡に接連せる地にて。八溝山の西南に當れり。其土沃壤。野州隨一の境なり。古より戰爭などまゝありし由。那須記に委し。今此に略す。武部又馬頭村等あり。此村に馬頭院といふ密寺あり。垂糸栗あり。枝葉繁茂せり。土人云。此樹他處に移し

植ゑて培生せずと云へり。是院に長俊といふ碩學の僧あり。號に玄幻子。遍く諸州に遊歷し。京師の諸名刹に輪住せり。後此院に住し給ひ。幾ほどなく遷化せり。余往年玄幻子が舊居に題して。

脫却人間夢幻生。心兼四大一法身淸。嘶風檐馬風馳走。伴月山雲月送迎。香爐殘爐一過去跡。燕營新壘未來情。門庭不レ掃氣蕭散。一脈筒泉滴冷聲。

又乾德寺といふ曹洞宗あり。是境內鳳尾松多し。鳳尾蕺を產せり。此蕺世に少し。此隣里に和見村あり。石窟あり。相傳ふ弓削道鏡の潛隱れし處とぞ。此村水晶沙を出せり。潔白鮮明にして盆山席上の珍たり。又小口村あり。溫泉あり。よく疥癬を治すると云。

武部村に健武神社あり。按ずるに健武は建部なるべし。珍らしき古名なり。蓋し建部は日本建命に屬從せる部類といふ事なるべし。書記云。因欲レ錄二功名一。即定二武部一。又出雲國風土記云。出雲郡健部鄕。古曰二宇夜里一。所三以改二建部一。纏向檜代宮御宇天皇勅。不レ忘二朕子倭建命之名一。因定二建部一。爾時神門臣古彌定二賜健部一。即健部臣等。自レ古至レ今猶居二此處一。故曰二健部一。又類聚抄云。伊勢國安濃郡建部太介無倍。美濃國石津郡建部。備前國津高郡健部云々。又書記。初日本武尊娶二兩道入姬皇女一爲レ妃。生二稻依別王一。次足仲彥天皇。次布忍入姬命。次稚武王。其兄稻依別王。是犬上君(近江國犬上郡)武部君凡二族之始祖也。又次妃二穗積氏忍山宿禰之弟橘

媛一。生二稚武彥王一。又舊事紀。日稚武彥王命。尾津君揮田君武部君等祖云。以上の說を按ずるに。日本武尊東夷を征し給ひ。亦橘媛も東海にかんざり給ひしかば。今吾嬬の名も存せり。かく彼此のゑにしもありて。何れ東國の古名跡たること。聊も疑ふべからず。

又天正十八年。太田五郎左衞門。下野國茂毛城に封ぜらるゝよしなり。此太田五郎左衞門は太田道灌の後にして。小田城より此に移さるといふ。此武毛城は何れの地にや。又大山田刑部なるもの往々見ゆ。大山田にや再考すべし。

那須郡に須佐本須賀川兩村あり。此山奥八溝山より接續せる地にして。幽絕の境なり。雲巖寺といふ濟家禪あり。又東山ともいへり。寺領若干ありて名譽の唐僧住職せる寺なり。境內五橋三井十景勝あり。其最なるもの。飛雲亭。水分石。玲瓏巖などなり。佛殿を獅子王殿と云。額は宸翰なりとぞ。又山門に神光不昧と扁せり。何人の筆せるにや。寺後に草庵あり。佛頂禪師習靜の地なりと云。俳流の祖芭蕉翁の住みて。啄木鳥も庵を破らず夏木立。といふ句を殘せり。

又佛法僧といふ鳥栖るよし。四五月の際佛法僧と鳴くと云。余往時ゆゑありて郡廳の命を奉じ。此寺に使して二三日留滯せり。我が邦家法制嚴格にして。公事を重んじ。私に遊覽せるも憚あれば。其勝迹を詳にせず。古文書且古墨蹟も多しと聞けり。上金津は下野と常陸の界にして。堺の明神といふ小祠あり。村長塚田氏は予が三世の通家にして莫逆の友たり。嗜レ武且畫を好み

て篤厚の人たり。此村に願入寺といふ淨土眞宗あり。第二祖信如上人の墳墓あり。其の土垣夷。墓上銀杏の大樹あり。枝葉繁茂し。蒼翠山の如し。一奇跡なり。又禪院あり。月照山といふ。長松森々として數里の間に見ゆ。幽栖の勝境たり。隣里女倉山又古館等。皆古へ要害の地にして。戰爭の地なりしと聞きぬ。土俗の口碑のみにて記載なし。再考して後篇に錄すべし。

相川村あり。此鄕近時湘江先生服南郭氏の門に遊びて有名の士なり。安達文仲なるものも此門に出づ。猶子野内助三郎月居齋と號し。書を好みて一奇人なり。この翁余が曾祖父休也が知友たり。又鶴川氏あり。開田村十二天社内の舊記にも見えたり。

余江戸に漂泊し。一日長者苍に遊びて山崎氏に邂逅せり。主人古琵琶の榻本を所藏せり。いと珍らしければ乞得て此に模し出せり。土人傳へて那須與一の琵琶といへり。案ずるに那須記云。

那須太郎資隆。初娶二小山氏女一。生二男子十一人一。所謂太郎光隆云々。與一宗隆等なり。然れば此琵琶に彫刻する所は。與一宗隆が父の名なり。おもふに源平盛衰記與一射扇の條に。折節西風吹來て。船は艫舳も動きつゝ。扇杭にもたまらねば。くるり〳〵と廻り。何れの所を射べし共覺えず。與一運の極と悲しくて。眼をふさぎ心を靜めて。歸命頂禮八幡大菩薩云々。那須大明神弓矢の冥加有るべくは。扇を座席に定めて給へと祈念したるとあり。此役は元曆二年二月なりければ。即宗隆も父の仰ぎ尊びし氏神なれば。かく祈誓をこめて世にいちじるき勳功をもなし。さて與一が名高かりければ。土人さは云傳へしなるべし

下野那須郡
温泉神社所
傳
那須家
琵琶

下野は上古下毛野とも云ひ。又下菟毛と云。是れ志めじが原。那須野原など。其土廣野にして平遠なるゆゑなり。右大將實朝

ものゝ夫の矢なみつくろふ小手のうへにあられたばしる那須の篠原

藤原實方

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思を

契冲が勝地吐懐編及び秀榮が今按名蹟考。皆下野國とせり。今の世に江州の伊吹山とせるは最も誤りなりとぞ。

那珂郡鳥子村に鳥子山あり。山半武毛郡に接せり。鳥子神社あり。此山峻高にして下野州を臨眺し。春霞秋霧。四時の美觀愛しつべし。其土杉木に宜しく勝地といふべし。

又松倉山あり。鳥子山の西南にして。眺望最もよろしく。其景勝鳥子山と相低昂す。山上大悲閣を置けり。東西兩別當とて草庵あり。西別當に近時僧の實原なるもの住めり。此の僧相馬家の臣たるよし。ゆゑありて遁世し。其平生世塵を脱落し。唯山水に逍遙して。詩を賦し歌を咏して思を遣るのみ。又參禪の暇人に對して能く武を談し兵を論ず。所謂豪氣未レ除ものか。人其才學を愛し。大院に住職たらしめんとすれども。敢て肯んぜず。麻衣草鞋。食を村閭に乞ふて道を修錬せしが。終に病みて野州高根澤の鄕に逝せりと云。

土俗乞食をホイトといふ。或書に江戸にて囉齋をはつち坊といふ。ハチとはホイトといふが如し。ハとホと通じ。チとトと通ずといふ。是等の說皆國學者の論にして。毎々いふ事なり。世にいふ乞兒は乞食なり。今略してこじきといふ。コツキホイト皆佛家の言にして。乞食陪堂なり。陪堂とは飯米を主とれる僧をいふなり。佛門の敎は三衣一鉢樹下石上。一處不住にして火宅を厭離し。慳貪癡の三毒を消滅せり。最も殊勝なる修行にして。容易ならざる事なり。又乞食をかたゐといふは。かたはものにて五躰不具なるを云。是れ業を勤むることかなはず乞食せるなり。僧家の乞食は修行にして少しく異なり。

行方郡に板來村あり。今潮來といふ。國學者云。潮來は朝來なり。朝來の反切イタコなりと。朝來は和名抄に板來と見ゆ。(今本作レ坂は誤なり)風土記にも板來と云。板來の古名如レ此明了なるを。彼此の反切を論ぜる蛇足なるものなり。

國郡古今の沿革。轉遷定まらずして。其詳なる事得て知るべからず。眞壁郡の鄕名に伴部あり。伴部は友部にして。西那珂郡にありと云。又多珂郡にも友部あり。又陸奥國に行方郡あり。又那珂郡に芳賀の鄕名見ゆ。芳賀は下野國の郡名たり。又多珂郡に高野鄕あり。高野は中世今の白河郡を高野郡ともいひし事あり。そのゑにしにや今白河郡に高野村あり。又茨城郡に白河の鄕名あり。又助川鄕は多珂郡にあり。然るに久慈郡に屬せり。今彼此の地名を點檢し。古今遷移の來歷を考ふるに。各皆因て來れる處あり。今余が臆載を此に存して。以て識者の考定を請ふ。

眞壁那珂多珂三郡。伴部の稱あるは。按ずるに靱部(トモベ)を武日に給ふ。此れ大伴連の遠祖

なるよし書記にも出づ。又磐鹿六雁の功を美しみたまひて。膳大伴部を賜ふともいへり。以上彼此大伴氏の東國を領し來れること明なり。今伴部といへるは。大伴氏の部屬此等の地に食邑せしなるべし。

行方郡は鹿島の社領なるべし。又陸奥にも行方郡あり。按ずるに鹿島大神の苗裔三十餘社。陸奥に在るよし。延暦年中太神の封物を割きて彼の諸社に奉る事見えたり。鹿島太神の御在所は行方郡に接屬せる地にして。上古は鹿島の社領たるべし。彼の社領を陸奥の鹿島宮へ割分てるゆゑに。行方と稱せしにや。又陸奥の鹿島宮はいづれも本國鹿島の御苗裔たれば。其風土も行方に似たる地を御在處となし。行方を襲稱し來れるにや。那珂郡に芳賀の鄕あり。按ずるに久慈郡大子村に芳賀河内守の古城あり。芳賀は下野芳賀にして。昔時宇都宮氏武名盛んにして東國を壓せり。其頃常陸をも領せしと見ゆ。今此の鄕中益子氏飯村氏芳賀氏など。皆其先宇都宮氏の屬黨にして。何れも下野の地名を姓とす。宇都宮氏廢せられて所領を失ひ。遂に此の地に土着せると見えたり。余が家も宇都宮同族にして。後鳥羽院御宇筑前國麻生鄕に黑崎の地を賜はりて。帆柱山に在城せり。それより後宇多院御宇建治弘安年中異賊防禦の役に戰功ありて又本國野州芳賀郡祖母井を領せり。因て祖母井を氏とす。又黑崎をも名乘れり。後大子に來るは芳賀氏にたよれるなり。多珂郡宮田村に杉室大雄院といふ曹洞宗の大刹あり。此地最も幽勝にして杉樹蔽レ天 奇古不レ可レ言。相傳ふ小野崎氏開基なりと。小野崎氏は宇都宮氏の族黨なりと云。此院名跡多し。再考すべし。中世宇都宮氏盛大にして。常陸國東偏の地までも其族黨繁衍せると見えたり。今芳賀の鄕名諸處に散在せるゆゑなり。

多珂郡の中に高野鄕あり。陸奥の白河郡にも高野鄕あり。按ずるに昔時白河郡を高野郡ともいひしよし。白河氏北郡を略せる頃。私に高野界を廣めしにや。また其後石城氏盛大にして。東は多珂郡石那坂を界とし。夫より西北久慈郡北郡をも幷せり。其頃私に地を割きて名づけしにや。夫より佐竹氏勢ひ漸く盛大にして。東は多珂郡。北は高野郡の界八溝山より以南。久慈郡を不レ殘領せり。此時に及んで地を割きしにや。三家かはる〳〵興りて地を蠶食せし故に。郡界さま〳〵に沿革せり。

多珂郡。多珂は高也。此土峯險に岳崇うして。東海の表に接連すればなり。

久慈郡に多珂郡の助川を出せるも。又中世石城氏の石那坂より以北久慈郡まで領せし頃。久慈郡に助川を屬せしなるべし。即ち多珂郡に高野鄕を出せると一般の躰にや。久慈郡と助川鄕とは高鐸黑坂の諸山隔絶して。其地方區別す。是等にて古今遷移地方沿革せる事を會すべし。

今保内鄕中益子氏多くあり。菊池氏最も多く。齋藤氏又多く。藤田氏相次げり。益子氏は野州益子に在城し。武名ありて亦宇都宮黨なり。前に述ぶるが如く此鄕に移り來れるなり。菊池氏は

九州菊池沒落し。其族黨諸處に散在せるものなり。菊池氏の九州に盛大なる事は諸書に見ゆれば此に略しぬ。齋藤氏はもと齋宮に屬從せし藤原氏にして。後諸國に散在せり。又齋藤別當實盛平氏に因て一方の巨族たり。按ずるに齋藤實盛の始祖は藤原氏にして。後に平氏に黨し。又源氏にも黨せり。實盛少壯にして軍旅に臆せる汚名を蒙り。且また源氏に縁に通ぜる事など。老後に及び流石武弁の名を耻ぢしにや。最後の討死はなやかに。其名今に人口に膾炙せり。今保肉鄕齋藤氏は熊野宮を尸祝せり。平氏の黨なれば祖先より祭り來るなるべし。藤田氏は下野國烏山城より西北二里許にして。藤田村より藤田某なるもの那須家の族黨たるよし。又隣里に高瀨村あり。是も那須家の支流にして今久野瀨村に高瀨氏あり。余が母黨なり。那須家は諏訪宮又八幡宮を尊崇せり。乃ち久野瀨村に訪諏宮を祭れるはこの故なればなり。那須家は昔時那須武者所とて。尤も盛大なることなり。宗隆は扇の的に名を得て賴朝の寵臣たり。子なくして宇都宮朝綱より養子せり。是時賴朝の命によりて朝綱那須家の後見せり。夫よりして那須家にも宇都宮家の紋丸に左り巴を用ゆ。是よりして宇都宮那須兩家合して同族の因も深かりしとなり。今保內の地は下野國に相接する地にして。宇都宮幷に那須家の族黨移り來れるはこの故なり。今諏訪宮多き故は。其因て來る事あるなり。

袋田村の瀑布。其高さ四十有餘丈にして。本國中最第一の勝景たり。月居山下に在り。此山一

名月折とも書けり。昔時野內大膳なるものゝ居城なりといへり。又温泉あり。本國中の名湯たり。京都香川氏の一本堂藥選にも見えて。其名高しといへども。近時人知るものまれなり。龍泰院といふ禪寺あり。摩頂松といふ名樹ありしが今は枯れたり。此松偃蓋垂陰。所謂る頂を摩しゆゑ。西山黃門源光圀公さは名づけ給ふよし。近時また一松樹を植ゑて其勝跡を次げり。常陸國。日本武尊始めて土地を開き道路を通じ給ふ。ゑかりしより後。大織冠鎌足の孫淡海公不比等の三男藤原宇合（宇合又馬養ともいふ）常陸守に任ぜられ。此土を治め給ふよし。是よりさき元正天皇靈龜二年。遣唐使を選まれ。宇合を副使に擧らる。遂に往かずといへども。宇合當時其才德名聲藉甚なると推して知るべし。懷風藻に。贈二倭判官留在一京の序幷に詩あり。今此に錄せり。

僕與二明公一。忘言歲久。義存二伐木一。道叶二採葵一。待二君千里之駕一。于レ今三年。懸二我一箇榻一。於レ是九秋。如何授官同日。乍別二殊鄕一。以爲二判官一。公潔等二氷壺一。明逾二水鏡一。學隆二万卷一。智載二五車一。留二驥足於將一展。預レ琢二玉條一。廻二鳧舄之擬一飛。忝二簡金科一。何異下宣尼返レ魯刪二定詩書一。叔孫入レ漢制中設禮儀上。聞夫天子下レ詔。包レ列置レ師。咸審二才周一。各得二其所一。明公獨自遺二闕此擧一。理合二先進一。還二是後夫一。譬如二吳馬瘦レ鹽人尙無レ識。楚臣泣レ玉。獨不レ悟。然而歲寒後驗二松竹之貞一。風生廼解二芝蘭之馥一。非二鄭子產一。幾失二

然明。非齊桓公。何擧寧戚。知人難匪今日耳。遇時之罕自昔然矣。大器之晩終作實質。如有我一得之言。庶幾慰君三思之意。今贈一篇之詩。輙示寸心之歎。其詞曰。

自我弱冠從王事。風塵歲月不曾休。褰帷獨坐邊亭夕。懸榻長悲搖落秋。琴瑟之交遠相阻。芝蘭之契接無由。無由何見李將鄭。有別何逢達與猷。馳心悵望白雲天。寄語徘徊明月前。日下皇都君抱玉。雲端邊國我調絃。清絃入化經三歲。美玉韜光幾度年。知己難逢匪今耳。忘言罕遇從來然。爲期不怕風霜觸。猶似巖心松柏堅。

後養老三年五月叙正五位上。七月朝廷始めて置按察使。馬養をして上總下總安房三國を管せしむ。常陸守如故。聖武天皇神龜の初爲持節大將軍。副將軍高橋安麻呂と同じく海東諸夷を征し。從三位を授けられ。三年八月擢でられて爲參議。是歲はじめて置畿內總管諸道鎭撫使。一品新田部親王を大總管とし。宇合をして副總管たらしむ。明年西海道節度使となり。六年三月授正三位と云。

石上乙麻呂は左大臣贈從一位麻呂第三子也。其爲人穎秀。雍容閑雅。甚善風儀。最志墳典。兼愛篇翰。神龜年中朝廷詔して唐使を簡まる。遂に大使に拜せらる。衆僉悅服すと云。遂に往かず。後常陸守になり。正四位下より右大辨を兼ね。中納言兼中務卿を歷。從三位に叙せらる。其子宅嗣また才名あり。性朗悟有姿儀。好屬文。工草隸。廢帝寶字五年遣唐副使に選まる。

既にして罷られ。常陸守に任ぜらる。稱德天皇景雲二年春。任滿ちて京に歸り。授從三位。任參議。後まぢ〳〵歷官して姓物部朝臣を賜ひ。大納言に轉じ正三位を加へらる。薨後詔贈正二位。其他百濟王敬福藤原清河藤原小黑麻呂紀船守菅野眞道等ありといへども。事長ければ略しぬ。

鹿島大神は常陸最第一の古名蹟たり。近時名所圖繪等世に行はれて。遍く人の知れることゆゑ今此に略せり。

大洗神社。本邦醫家の始祖たるべし。近時官醫那須氏の本朝醫談に詳なり。

新治の郡名。なにらの言たるを知らず。按ずるに出雲者新墾之十握稻穗云々。これ良田稼多くして雲の出るが如くなるをもて。出雲とはいへり。是新治も新墾と同意にて。さはいへるなるべし。

薩都神社。また佐都とも見ゆ。即ち久慈郡里野宮なり。本朝俗諺志又和訓栞などに。常陸國太田の社造營の時。杉の神材の中に鹿島大神宮の文字あり。左右甚だ分明なり。因て一は鹿島に納め。一は當社に納むと云。奇なりといふべし。

靜神社。昔は久慈郡にして今那珂郡に屬せり。鄕中の一大社たり。再考すべし。

風土記に靜織山は久慈郡の西に在り。始めて織綾を設ける地にして。玉川郡の北にあるよし見

ゆ。接ずるに静織山は即ち今の静村にして。玉川郡は今の村田の玉川なるべし（此土玉石を出せり）此の玉川よりして部垂村等は。書家雪村流寓せし地なりといへり。明僧心越禪師。本國に歸化せる事遍く人の知る事なり。書畫は更なり。琴を好みて餘音今に本國に傳はれり。委しくは後篇に出せり。

那珂郡に高部村あり。いにしへ建部の地なるや知るべからず。又佐竹盛長高部を氏とせり。蓋し采地にや。又常陸介義春小瀬氏たり。是は小瀬村に食色せしなるべし。

那須國造碑世に笠石ともいへり。（此碑の上に蓋あり。故に俗にしかいへり）此碑はその始。延寳四年四月の頃宮城の僧圓順といひし人。下湯津上村に住みけるが。同郡茂武鄉小口村梅ヶ平大金重貞といふ人の宅へいたり。此石碑あることをもの語れるぞ。世に現れし始なり。さて重貞やがてかの石碑のもとに行きてこれを見て。那須記といふ書に記したり。その後天和三年六月。西山黃門源光圀公。那須記御覽あらせられ。此碑の事尋ねさせられ。貞享四年の秋。儒官佐々助三郎宗淳といふ人碑文を考へて奉れり。それより元祿四年春。有司に命ぜられ。一小堂を作り碑を其中に安せり。是よりして世人始めて此碑の賞すべく貴むべきことを知れり。志かはあれど此碑の年號に永昌とあり。異邦の年號なるをもて。後人疑ひなきと能はず。故に其辯論くさ〳〵あり。されど白石先生の考に。永昌元年朱鳥四年也。朱鳥二字上頭一點。皆碑面剝落

之跡耳。據レ史持統三年歲次二己丑一。實朱鳥四年也。明年庚寅正月朔。持統即位。先レ是無レ改二前朝號一。蓋以二其攝一也といへり。又山崎久卿の説に。猶彼地古老の説に此碑を始めて見出した る時に。旅の修驗此地に來り。碑の文字詳かならぬをあかぬわざにや思ひけん。自手を下して洗ひ。文字をこゝかしこ補ひ刻せしよし傳へたり。もとより此旅客坊間の年代記を見合せ。且は朱鳥の永昌に字畫似たるを。支干をもて弛て異邦の年號に作りしなるべし。されば永昌元の三字。結躰欹斜して他字に類せず。今榻本に就て檢するに。昌字全く鳥字の畫を存し。元字隱々と四字の畫見ゆ。この説を併せおもふに。いよ〳〵朱鳥なると明なり。かゝれば佛足石及び多賀城碑。多胡郡の碑より先だちて。古く正しくして我邦第一の古碑たるべし。

吉田神社。今茨城郡に屬せり。一大社なり。昔時は那珂郡に屬して吉田鄉と稱す。尤も古名蹟たり。再考すべし。

本邦の櫻樹は異國に乏しく。崎嶇來舶の徒最も珍賞せるよし。今水府大城の東北に舜水堂あり。明の徵士朱舜水先生を犯れり。先生生平此花を鍾愛せられし故に。今祠堂の傍此樹を植ゑ。花時の美觀清雅にして。水府中の勝境たり。櫻樹は本邦の名產にして古來花王と稱し。賞翫し來れり。往時渡邊幸庵渡海せるとき。杭州西湖にて此花に似たるを見ると云。按ずるに昔時本邦の松をも彼土に移し植ゑて。日本松とて稱美せる事。往々古人の紀載に見ゆ。西湖は彼土に名

高き遊勝の地ゆゑ。本邦の櫻花を移し植しにや。因に云。伊東藍田文集の中にのせて。幸庵が壽字の筆記あり。其說に往時幸庵なるもの八百有餘歲の老狐にして。人と化し房總の地に來往して。壽の字を書して人の乞に應ぜるよしを委く載せたり。藍田氏かく事實に妄誕なる抱腹にたへたり。

櫻樹きさらぎの末より彌生のはじめ。霞の木の間白たへに。いづれを花の梢ぞと。四方のながめもいと優におぼゆ。聊かこゝに拙作を錄しぬ。

山雲溶淡水東西。三五人家占二一溪一。猶有二韶光不一塞乞一。櫻花開處午雞啼。
侵レ晨谷口步二烟霞一。水碓蓍邊石棧斜。得々過來匝地雪。高風吹落白櫻花。

金井野村に今小松寺あり。小松三位重盛の墳墓ありと聞けり。余未レ知二其證實一。然れども本國大掾國香よりして。平氏坂東に支蔓せしかば。また其因なきにしもあらず。天智天皇七年。常陸國より生角馬を獻ずる事見えたり。文化中久慈郡大生瀨といふ村の人家に馬あり。角を生ぜるよし。其聞えありしかば。やがて彼馬を郡廳に召され。點檢ありしに。兩耳の傍に二ツ角の貌せるものを生ぜり。其狀拇の如く長さ一寸二三分あり。よく〳〵手に觸れて試むるに。角にはあらずして肉の起立せるもの也。

文德實錄に。天安元年二月乙丑。常陸國より白鹿を獻ぜる事見ゆ。又近世南郡四澤の地より

白鹿を出せりとぞ。此白鹿世にまことに稀なり。今山中諸處白猪は毎々ありとなり。文化中本藩增子毅齋先生予が鄉中に主宰たり。先生好レ學且嗜レ武。よく鄉中を治む。陽春有脚の名あり。是よりさき鄉中每歲秋冬の際。人夫を催し山野を跋涉し。猪鹿を狩る。この狩に出る事獵師常の課役にして。此を指揮せる支配頭を鄉士といふ。鄉士は騎馬の武士にして其職最も砲術を常とし。其先皆武名の家なり。ある日狩あり。增子先生竊に出遊し給ひ。彼の獵師を帥ひて山林奇嶮の地に馳驅し。自身大なる白猪一頭を獲らる。かつて此皮を以て障泥を製し。今に藏し給へり。勇武稱すべし。

往年久慈郡下野宮といふ村の一農家。あるとき厩を掃治せり。一小石あり。其色黃にして粟の如く粟粒せり。馬糞に接りて出ると云。世に往々ありつる馬糞石と云ものなるべし。同郡に野上村また山方村あり。常陸の國東南は皆平廣にして。此二村より以北。山谷接續せり。因て是よりして野の上山方なりといふ心にて名づけしにや。又舟生といふ村に坂あり。平郡と云。尤も古名なり。

又部垂村に甲鎣明神あり。いつの頃より祭り來れるにや。今宮居修造の古帳一冊を存せり。始に德川左京亮と大署せり。當時何等の人たる事を詳にせず。村長立原氏は最も舊家にして。古き甲を所藏せり。製造精妙なりといふ。近時是家。上より擧拔を蒙れり。此村は佐竹義舜の三

男四郎義定の食邑せし地にて。部垂氏と稱せり。

又石崎村あり。天女の小社あり。社地より紺青を出せり。雨後其地上豆の如くに起立し。其色うす青く露出せるとなり。日に乾して紺青となす。即ち畫家に用ゆると云。隣里小野村あり。佐竹義俊の三男義久采地たりしといふ。又宇留野村あり。義俊の五男義長食邑せし地なりと云。又小塲村には義敦の二男義躬食邑せしよし。又義仁の二男常陸介と號し。戸村に食邑し戸村氏といへり。

東金砂山。久慈郡高倉天下野兩村の境にあり。壁立數百丈。杉松鬱然たり。山上神祠佛宇あり。東清寺といふ密宗あり。治承四年十一月。源頼朝佐竹氏を攻む。佐竹秀義金砂山の柵に據てこれを拒ぐ。頼朝下河邊行氏。弟政義。土肥實平。和田義盛。土屋宗遠。佐々木定綱。弟盛綱。熊谷直實。平山季重等數千の兵を率ひて攻戰ふ。金砂山頂峭厓絶壁。要害天下に聞ゆ。秀義卒を勵まし弩を發す。飛矢雨の如し。鎌倉勢多く被レ傷。諸將兵を勵まして進めども。仰いて天に攀るが如し。人痛み馬疲れて敗走せり。時に秀義の叔父義季。頑愚にして廣常の爲に謀られ。義季内より應じ廣常外より皷噪して襲ひしかば。忠義頂レ命。秀義遁れて花園城に入る。城遂に陷るといふ。

西金砂山。久慈郡上宮阿内村にあり。石壁數丈。其奇嶮絶峻。云ふべからず。神祠あり。山王日

吉神にして。東金砂と同神たり。昔時佐竹氏の柵を築けるは東西の二山何れか是なるを知らず。按ずるに西金砂なるべきか。此金砂神七十年に一度の大祭禮あり。七年に一度小祭禮あり。田樂の行事あり。田樂は古代の遺風にしてよしある事なり。其時世のさま推して知るべきものなり。今事長ければ後篇に出す。同郡に藤田村あり。佐竹義實食邑せしよし。又南酒出に佐竹義茂食邑し。北酒出に佐竹助義食邑して。何れも地名を氏に名乘るよしなり。

同郡上河井村に枕石寺あり。浄土眞宗にして。昔時高祖親鸞來りて日暮宿を乞へり。不レ肯して門外に仆さしむ。其夜深更親鸞の身より光明を放てり。主人大に驚き。其道德不可思議なるに感服し。是より弟子となりて敬事せしとなり。今に其枕石を存せり。一説に此院もと同郡大門村なりしが。此地に移し來るとも云。院主西天師は近世の碩學にして。尤も書に工なり。六書八躰いづれも妙を得たりといへり。余が舊知友なり。今既に逝せり。惜しむべし。

多珂郡森山村の東に三日原あり。甕原ともいへり。又三箇原ともいふ。(石那坂の麓なり) 此地は後醍醐天皇建武二年。陸奥國守源顯家勅を奉して。八千餘騎を率ひて來り。佐竹義敦これを拒ぎて戰ひ。相馬南部等先鋒して進み。佐竹氏大に戰爭せしとかや。此境界に活水あり。水白く沙中より沸き出せり。後人此を歌書に出る甕原の泉川とせるものあり。誤れるよし。彼の甕の原は山城國挑川なりとぞ。

花園山。今は多珂郡に屬せり。佐竹秀義金砂城を棄て。陸奥國花園城に據るといふ。此地なるよし。花園神祠あり。土人相傳ふ。此神征夷將軍坂上田村麻呂なりと。今滿願寺といふ天台宗あり。其土高峻。東海の表に傑出し。一勝槩なり。

同郡諏訪村に石窟あり。凡廣さ丈餘にして。其入る事四五十歩許にして活水あり。窟中より流出せり。其奥幾許なるを知るべからず。

同郡石那坂に雷斷石あり。圍三四丈。高五丈許。土俗相傳ふ。上古此石日に長じて止まず。天にも到らんとせり。天帝これをもて惡み給ひ。雷公をして二ッに劈かしむ。其一は飛び去り。今同郡河原見村にありと云。

久慈郡下野宮に近津宮あり。面足惶根の二尊を祭るとぞ。今上野宮町付にも同社あり。町付を中の宮とし。合せて近津三社と云。鄕中の總鎭守にして一大社たり。此神神名帳に載せたる稻村の神社なるよし。今上鄕村に稻村といふ地名もありて小祠あり。これ其舊跡なりと云。一說に奥州白河郡棚倉城北に馬塲といふ地に近津神社あり。夫より南二里餘隔たりて矢槻村に又近津宮あり。何れも大社にして古名蹟たり。是を都〻古和氣神社と云。馬塲を上の宮とし。矢槻を中の宮とし。今の久慈郡近津宮即ち下野宮なるよし。ふかはあれど是の都〻古和氣神社は白河郡に屬せり。蓋し往古は此の下野宮も白河郡に屬せる事もありしにや。前に具論せるが如く。

久慈郡白川氏の領せる事もありて。又岩城氏も領せり。天正の頃よりして佐竹氏に併せらる。是等の沿革によりて遷移せしなるべし。今其地方を考ふるに馬塲を上の宮とし。矢槻を中の宮とし。今の下の宮を合せて三社とせば。此下の宮陸奥國白川郡に屬せし事もありしならん。白川氏佐竹氏とまば〳〵戰爭ありしよし。彼此敵地たりせば。この三社を割きて八溝山を界とし。今の上野宮に宮居を造立し。町付にも近津を新創し。下野宮に合せて三社とし。佐竹氏の祭れるなるべし。因て按ずるに今の下野宮村は奥州と常陸の界にして。七折坂といふ嶮岨あり。坂より下は久慈川にして究竟の要害たり。此の七折坂より以南を常州とし。此より以北を奥州と界を分てるなるべし。今其七折坂よりして北一里許にして矢祭山といふ處あり。兩山久慈川を挾んで屹立し。尖峯危石流水を縈纏し。幽絶の勝境たり。水際僅に棧路ありて陸奥國に入る。是村を關岡と云。又下關村あり。兩村久慈河を挾めり。此地彼西土にいふ峽中の巫山たるべし。矢祭神社あり。相傳ふ源義家の奥州征伐の時。北に向て矢を放ち給ひしよし。此の地を今矢祭山と云ひ。矢の落る地を矢付村と云ふ。即ち近津宮を祭れる處なり。今矢付村近津社内に寅卯神あり。（是永承六年辛卯より康平五年壬寅まで。前九年後三年の年數を合せて祭れるよしなり）又白河の關と稱せるも此地なりともいへり。此白河關くさ〳〵の說ありて。いづれか是なる事を詳にせずといへども。上古は知らず。中世常陸より奥州の界。西は那珂川をは挾みて大

木須村あり。（常州那珂郡と野州那須郡との界なり）此地昔時五峯山泉溪寺といふ禪寺ありて。峯巒秀出し。玄翁和尚など住職せし名刹なり。（今此泉溪寺烏山に移せり。昔時佐竹氏那須家と鬪戰せし地なり）

東は勿來關あり。（常州多珂郡と奥州菊多郡と界なり）昔時所通關ともいふ。（赤水先生東奥紀行に委しければ。此に略しぬ）中間に八溝山あり。麓に矢祭山笹ヶ岳久慈河等の嶮岨によりて。白河關を置きしなるべし。上世は知らず。中世亂離の時に當り。戰爭まば〳〵止む事なく。邦域の界境もまば〳〵遷移せるなるべし。今地方を考ふるに。奥州と常州と界。何れも山河の嶮によりて區別ある事。從來自然の形勝にして。所謂天分とやいふべき。是の矢祭山久慈川を相挾んで兩崖屹立。笋石。達磨石。飛跳石。猿の開山など。土人の云習はせる景勝ありて。巫峽の神女峯ともいふべき地なり。又瀑布石窟など多く。老松溪隈に偃蹇し。藤蘿岩間を繚繞し。春曙秋晩。幽人騷客の徜徉すべき佳境たり。何人かよみけん歌あり

心ある人に見せばや陸奥の矢祭山の秋の夕ぐれ

下野宮近津宮社前に。杉の大樹東西に二株あり。土俗これを神木と唱ふ。是れ杉とは直木の義。又すぎは進木なりとも云。此木の生立直きものにして正直の表物なれば。神木とて神前に植るとぞ。古き文にも石上振之神杉と云。萬葉集にも三諸の神の神杉。また神之祝我鎮齋杉原など

見えたり。

馬場近津神社に。日本武尊召し給へる鎧一領あり。今神庫に存せり。其精造實に神物たりと云。或人云。甲は鎧に比すれば。無下に粗糙なるよし。何等の事たるや知るべからず。

大子村に（太子とも云。官府の舊記太子なるよし）古城跡あり。芳賀河内守始めて築けり。いつの頃にや白川氏に幷せられ。久しく白河氏に屬せりと云。後石城氏に幷せられ。嗣を絶つと云。夫より石城氏家臣をして守らしむる事四十餘年にして。佐竹氏に幷せられ。城遂に廢せりとなり。城跡に長松一樹ありて。偃蓋重翠。高く雲霧を拂へり。奇古愛すべし。然るに鄕中の土俗常に松根を削りて灯燭に充つ。山村比屋皆然り。愚民やゝもすれば此松樹をも削り取れり。往時郡宰增子先生是の樹の彼がために枯れ果なん事を惜しみ王ひ。竹をもて垣とし此の樹根を圍み。愚民のほしいまゝに疵つくる事を禁じ給ひしが。人遠き山上たれば。此の禁もいつとなく破れぬ。おかりしよりして。いつしか此の樹も遂に仆れぬ。嗚呼山民の愚にして事情に暗き。あはれなる事ならずや。凡そ事物の盛衰興廢。皆是自然の數あるにや。山下に鎧の淵といふあり。土人相傳ふ。城陷いるとき城主芳賀氏身を投ぜし處なりと。此川源は八溝山の西より出て。下野國那須郡須加川をすぎ。久慈郡上金澤開田山田高岡上澤の數ヶ村を經て大子にいたり。久慈川に合す。是を押川と云。又鴛鴦川とも云。此川小流にして舟楫の利なしといへども。

數ヶ處堰と云ものありて流れをたゝへ。溝渠より田疇にそゝぎ入るゆゑに。此の最よりの數ヶ村いかほど旱魃たりとも。稻粱枯槁の災を免る。是の水源八溝山の大麓より出て淵源あるゆゑなり。

大子村に臥雲山永源寺といふ曹洞宗あり。開基を源庵宗永居士と云。是本藩宮寺氏の祖なり。一巨鐘あり。益子氏傑山秀英居士の寄附たり。また當寺はじめて住職入院の式は。余が家より山内へ入院せる古例たり。又白雲山あり。愛宕山とも云。將軍神を祭れり。此の神川山といふ村より益子氏の祖移し來るといふ。上古は十二所神鎮守なるよし。又天神の社あり。願誓寺といふ淨土眞宗あり。又淨光寺といふ天台宗あり。祈願所たり。また修驗文珠院あり。

比藤村南台山と云峻嶺あり。嶺上半よりして持方村なり。此奥に安寺村あり。此二村は高倉村に屬せるよし。本國中隨一の深山にして。土俗の質朴太古の風あり。近き比までは文字も通ぜざりしとなり。余往時是のさと貉窪といふ處にいたりて。

詩人到レ此古來稀。但不二詩人一々到稀。但有二詩人堪一寂寞。不レ堪二寂寞一郭公飛。（郭公一名畫胡。すなはち俳流の。かんこ鳥われもさびしいか飛んで行くなり）

比藤村長福山あり。山頂大悲閣あり。又三光院あり。幽勝の地なり。山下に長福禪院あり。鄉中の名刹にして何れも同派たり。夫よりして南に西金村あり。温泉湧出す。此地を湯澤と云。

男女諸病によろしく。最も疥癬に妙なり。

紅花上古より常陸の名產なるよし舊記に見ゆ。久慈郡大田鄉を隨一とし。那珂茨城多珂郡皆出せり。海内紅花を出せる地多しといへども水府を上品とす。然るに近世人情浮薄にして專ら利を先とし。製造粗末なるよし。凡そ產物は天より賜はる處にして。乃ち是天物たり。必ず精製をと要すべし。

案山子といふもの。本邦のみならす異國にもかく稱呼せるよし。又草人芻人などともいふよし。葛原詩話に見えたり。また山中鳴子と云ものあり。即ち是鳥驚しなり。余山村に遊びて。

藤蘿避レ路々難レ分。一搭溪村只隔レ雲。燒レ炭烟從二山腹一起。驅レ禽聲自二嶺頭一聞。

紅日入レ林鳴二暮鴉一。半山茅屋繞レ溪斜。草人相對無レ由レ語。一路秋風蕎麥花。

世に云上古は綿なくして麻布のみなりと。書記に天日鷲神爲下作木綿者上云々。懸二掛木綿一云々。又木綿襷など見えたり。又凡絹絁絲綿布。並隨二鄉土所一出云々。又一戸貲布一丈二尺云々。（類聚抄曰。唐式云。貲布。漢語抄云。佐與美沼能。是は麻布なるべし）以上の舊記を考ふるに。綿布と麻布と分てり。上古は綿といふもの概して無しとも云ふべからず。尤も近世の綿は吉貝草にして上古の木綿ならず。中世より蕃舶の品たるよし。今地方を考ふるに。昔時常陸より布を調進せるといふもの。麻布たる事疑なきにしもあらず。今常陸の地麻を生ぜず。吉貝草は

別して上品たり。綿は總して暖國の産にして北國に稀なり。蓋し本邦上古は綿なしといふ說は。北國の說なるにや。

東鑑に。治承年中。源頼朝常陸國鹽濱大窪世矢等の地を鹿島へ奉するよし見えたり。大窪は多珂郡大久保村なり。大窪天民氏の父宗春此地より久慈郡池田村櫻岡氏の家に婿たり。先生を生めり。後宗春江戸に來て醫を業とし。江戸に終れり。是よりして先生江戸の人となれり。其先武名の家なり。今儒をもつて起家し。詩名大に世に鳴る。

後深草院建長年中。笠間城主前長門守藤原時朝。鹿島の社に宋板一切經を納むる事あり。世たへて知るもの稀なり。余が友人好問堂山崎氏。此零本何毘達磨大毘沙論を所藏せり。卷末に時朝の題名あり。距レ今五百七十有餘年。豈に奇ならずや。今此に時朝の題名を模出し。いさゝか好古の士に示す。（題名は畧す）

此の事また新和歌集第五釋教にも見えたり。（此書は爲氏卿宇都宮頼綱の家に寓居の間の打聞なり）

鹿島の社にて唐本一切經を供養し侍りける時。日ごろの雨やまず。侍りけるが。けふしも空はれて事故なく供養とげぬとて

今よりや心のやみもはれぬらん神代の月の影をうつして

かへし

千はやふる神代の月のあらはれて心のみやは今ぞはれぬる　藤原時朝

考ニ國誌一云。從五位下長門守兼左衞門少尉藤原朝臣時朝。食ニ邑笠間地一。因レ地爲レ氏。時朝出レ自ニ藤原道兼一。善ニ和歌一云々。これ宇都宮の支流なり。又按ニ東鑑一。笠間左衞門。或笠間判官。或長門前司など。往々所レ記非レ一。文永二年二月九日己酉丑刻卒。年六十二と云。今古碑在ニ楞嚴寺一。謚ニ晏翁海公大居士一。また九月十二日卒と見えたり。年號を失せり。何れか是なるや。今此に其說を併せ存せり。

正木湖。那珂郡村松村にあり。此湖鯉魚尤も多し。味もまた極めて上品たりと云。又鰻鱺も味尤も美なりと云。此土平沙にして東海に近く。一望千里を極む。清涼の佳境たり。天照太神を祭れり。傍に虛空藏を安置せり。これも坂東順禮の一なり。又飽氣池あり。正木湖に比並せり。此海邊東南は鹿島浦。北は勿來に綿連し。平曠の地たり。殊に魚鹽の利あり。常陸の中央那珂郡にして。那珂の港に比並し遊覽の地なり。

完倉村あり。むかしは河内郡にして。今は新治郡に屬す。此村名に倉の字あれば。蓋し上古屯倉を設けし地にもや。古城跡あり。菅谷隱岐始めて築く。裔孫世々此に居れり。天正中。佐竹氏豐太閤の命を受けて南郡三十三氏を滅せり。菅谷氏も位を失ひ。越前に奔ると云。此よりして

佐竹氏家臣大山田刑部をして此城を守らしむ。後羽州に徙るに及びて城廢す。杲泰寺といふ曹洞宗あり。郡中の名刹たり。此山内竹を產せり。やはり尺四五寸餘といふ。

玉造村あり。行方郡に在り。又新治郡にも屬せるよし。大椽氏の支孫行方宗幹始めて築けり。其孫小高六郎。元曆年中源義經の先鋒となり。屋島の軍將能登守敎經と血戰し討死せり。源頼朝其忠死を憐み。厚く其子を撫せしむ。夫より後累世是地に居城し。玉造與一太郎なるものは。天正六年戊寅十一月廿四日死。堯永源舜と法號し。其子與左衛門尉重幹。天正十八年庚寅二月九日。佐竹氏の爲に大田城に於て殺され。遂に嗣を絶つと云。法名我秀常見と云。

筑波山は常陸第一の古名勝にして。遍く人の知れる地にして。且名跡志等世に行はれ藉甚たれば。今是に略しぬ。

足尾山あり。又葦穗山ともいへり。此山下の南村を瓦谷といふ。瓦谷山人と稱せる醫生あり。小河原氏にして其先千葉黨の支流にして。武名の家なるよし。山人博學篤厚にして醫術に委しく。著述も數部ありて世に行はる。其學老莊仙佛に淵源せり。蓋し本邦道學の始祖たりといふ。萬葉集に筑波山鷲の多きを詠ぜり。今南台君田などの山中。彼大鳥まゝ巢を營む事あり。余山中に遊びて詩を賦し嘗て是の事を記せり。

過盡回巒不見邨。合歡花下水潺湲。隔林偶聽木工語。前路朝來驚攫猿。

路從綠水漲邊傾。禽在白雲橫處平。一鳥搏風枯木折。深山日午猿猴驚。

島崎故城。行方郡に在り。島崎左衛門始めて築けり。應永中鎌倉持氏に從ひて。氏憲の爲に逐はれ。島崎大炊助駿河にて持氏に從ひ戰功あり。子孫世々此に在城し。天正中佐竹氏の爲に殺され。丘墟となる。

同郡堀内村に故城あり。慶長元年。佐竹義宣の家臣小貫大藏始めて築けり。同しく七年。義宣羽州に徙るに及びて城廢せり。

武田古城。同郡に在り。武田民部大夫始めて築けり。民部の子を淡路守といふ。天正中佐竹氏の爲に滅ぶ。

同郡板來村長松寺といふ濟家禪あり。鎌倉建長寺と同開基なりといふ。一古鐘あり。相模入道高時の寄附たり。又十六羅漢あり。唐の貫休が筆せるよし。また雪舟が畫ける寒山拾得。其他源頼朝の植給ひし臥龍梅などあり。一大名刹なりといふべし。

此村に宮本尙一郎なるものあり。名球字求玉。茶村と號せり。博學篤厚の士たり。其先武名の家にして鄕中の甲族たり。(宮本篁村氏の弟なり) 又屋上に能望山あり。湘江の班竹。娑羅雙樹。楊梅。紫荆の數種を植う。昔時西山黃門源光圀公亭を御築かせ給ひて。般湖と名つけ給ひ。平生遊覽せられしよしなり。茶村の祖了西なるものへ此亭を賜はると云。般湖亭の三字は西山公

御筆にして。また着色の鷹の繪もありといふ。其他明人夏仲昭の筆せる竹の畫。及び荷葉の澄泥硯をも同じく賜はると云。此家また牧溪の畫ける觀音を所藏せり。虛堂和尙の贊あり。大堂國師の題跋あり。また一休禪師の模本もあるとなり。紫野大德寺役僧。其他狩野養朴の添證等ありと聞けり。此地舟船輻輳し。妓樓もありて。常陸國中の小都會たり。其他古名迹多し。再考して後篇に錄すべし。

同郡延方村あり。文化中本藩小宮山先生嘗て此郡中に宰たり。先生博學溫厚にしてよく下民を敎育せり。實に近世の人材たり。此地に學校を設け。且聖廟をも建て給ふ。此境長松鬱然として霞浦に聳立し。一望胸襟を豁かにす。山下に蓮池あり。また美觀たり。余が友人澤田氏此地に來り。學校に預れり。又此村に普門院といふ密寺あり。一大名刹たり。地藏堂あり。世人遍く尊崇せり。余往年此地より板來牛堀等の地を過るとて。

平原盡處又高丘。臨レ水茅檐住得幽。黃鵠一聲出レ巢去。香風習々落ニ松球一。

又此村曲り松といふ處に一友人あり。余少時此地に遊びて朋友兩三輩と楫取及び佐原等に舟遊せり。彼友人聊か故ありて此行を果さず。詩一章を寄せり。

相約佳期豈獨後。人間風雨隔ニ歡娛一。問レ君今夕菰蒲裡。花柳春光時有無。

此友人既に下世せり。彼此一時また哀しむべし。距レ今三十年。恍として隔世の如し。

又田崎氏あり。學を好みて醫を業とし。最も其術に委し。其隣里に窪木蟠龍子なるものあり。性溫雅。碩學の名あり。延方學校を主宰せると云。

茨城郡小川村に古城跡あり。園部兼泰始めて築けり。兼泰の子孫宮內大輔佐竹氏の爲に滅せらる。佐竹氏の家臣茂木上總守をして此城を守らしむ。後に戶澤右京少進居城せられ。幾ほどなく手綱城に移るに及びて墟となる。

同郡宍戶村にまた古城あり。宍戶家政始めて築けり。八田知家の第四男を宍戶四郎家政と云。源頼朝に仕ふ。建曆三年五月。和田義盛兵を擧げて。北條義時を攻む。家政宗族知重と同しく北條を救ふ。義盛の子朝夷名三郎義秀膂力絕倫。勇名天下に聞ゆ。是の日朝夷名力戰して必死を以て志とす。故に諸將其鋒先を避け懼るゝ事。鳥雀の鷹鸇に遇ふが如し。朝夷名深く琵琶橋に入る。獨り家政進んで朝夷名と戰ふ。遂に命を隕せり。世傳へて一時の美談たり。其孫世々此城に在り。天正年中。佐竹氏の爲に亡びぬ。然りしより後。和田河內守此地に封ぜられ。更に羽州に移りて城廢せり。

同郡小幡村に又古城跡あり。八田知重第三男光重小幡に采食し。小幡氏といふ。光重の後中務なるものあり。夜大洗磯前明神を拜す。江戶但馬守兵を出して路を遮る。中務命を隕す。小幡氏遂に滅す。江戶但馬守家臣出雲をして守らしむ。出雲死す。子助兵衞代りて居れり。天正中

佐竹氏の爲に滅す。助兵衛子あり。三十郎と云ふとぞ。石塚村あり。茨城郡に屬せり。古城あり。佐竹宗義始めて築けり。其先刑部大夫義篤の第二子此地に食邑し。石塚氏といふとぞ。宗義の孫大膳義胤。北條氏康と宇都宮の地に戰ひ。矢にあたりて死せり。義胤の子義衡佐竹氏に從て窪田に戰ひ命を隕す。義衡の子を義慶といひ。義慶の子を義國といふ。源一郎と號す。天正中佐竹氏常陸大都督となる。義國を片野の地へ遷し。東中務義堅を石塚城に封ぜり。佐竹氏移封せられ。城もまた廢しぬ。

此村藥師醫王殿あり。古名跡たるよし。委しくは再考し後篇に錄すべし。

長倉古城。佐竹左衞門尉行義。始め彦治郎と云ふ。又別當と號せり。二階堂下總守賴嗣の女を娶りて六子を生めり。長を二郎貞義と云。後別當と號す。常陸介に任す。元弘年中遠江守兼上總介に轉し。後薙髮して僧となり。上總入道と號す。次を三郎義綱といふ。是三郎義綱此地に始めて城を築き。此に居城し。相襲て世々長倉遠江守と云へり。應永年中佐竹義盛死す。義盛一女子ありて嗣なし。上杉安房守憲定の第二子を養うて嗣子とし。其女子を妻はせ。これを義仁といふ。右京太夫に任す。鎌倉にあり。而るに國民義仁を君とせる事を肯んぜず。是れ養子にして先君の種にあらざる故なり。これ故に山入師義が子興義を上總介に任し。立て君となす。鎌倉持氏此事を怒りて。石松持國をして師を帥いて佐竹氏を伐つ。國人興義を奉じて大將とし。

長倉城に據てこれを拒ぐ。持國城を圍む。攻戰數月にして拔けず。對營歲餘。佐竹氏糧食已に乏しく。籠城危にいたる。國人相議して云。義仁立てば君なし。興義立てば國なし。君なく國なければ佐竹氏の亡ぶるなり。國と君とともに無くして佐竹氏亡びば。不忠尤も甚し。まかず君無くとも國猶存せんには。遂に石松持國と盟ひ。義仁を立て君とし。興義退て義仁に服す。義仁も又國人の變あらん事を懼れて。興義を厚く遇し敬ふとぞ。此城狹少にして。山河の嶮矢石の衆に乏しといへども。其堅く久しく存せる事。豈に奇ならずや。

大岩村に岩あり。數丈地上より突出せり。故に大岩の名あり。村長竹內氏古く此地に住めるよし。屋後古木鬱然たり。一夜ものありて何やらん響あり。其韵僧寺の木魚に似たり。是れ乃ち世に古くいひならはせる狸のはら皷などなるべし。又下檜澤村に邑長小室氏あり。屋後松杉叢中。每々此音せるとなり。此兩家は何れも舊家にして。鄕中の著姓たり。かゝる奇事を記せるも怪しきをかたるの譏り免るべくもあらねど。これら余が親屬にして。見もしまた聞きもしたるなればしるせり。竹內氏嶰谷老人と號し。又愛筠亭と號す。此翁書を善し。奇人たりしが。今は既に世をされり。小室翁觀魚亭と號し。文雅を好み風流の名士たり。老健今に存在せり。小室氏家の紋日の丸と又九字の卅紋にして。其先武名の家なり。何の頃よりか鶴の紋を用ひ來れり。按ずるに此鄕古しへの鹿島鄕にして。小室氏は鹿島宮の氏子なり。尊崇のあまり此紋を用

ひしなるべし。（鹿島の祠官はくさ〳〵の故ありて鶴の紋を用ゆるよし）同族も羽州にありて。今佐竹氏に仕ふるよしなり。

本邦。山村水鄕。秋夕閑適の情を詠して。三夕ぐれなどもてはやせり。是れ明人謝在杭が凄風苦雨も一たび點破を經れば佳境となるといへる意によくかなへり。余彼此の意にもとづき。巴調一章を詠せり。

閒中信レ杖且閒行。雨尙晴來風又淸。斜日照レ山人鋤歇。槎牙枯木一鴉鳴。

余が鄕里に櫟の大樹あり。故ありて此樹を伐れり。余此樹を乞ひ得て材をとりしに。一丈四五尺許にして兩股にわかる。此處うつろにしてうちより髑髏若干を出せり。木工大に怪しみ。余に告げて材を取ることを戒めり。余おもへらく此樹うち朽て空洞となり。狐狸のたぐひ栖ていつしか死し。その枯骨を存せるなるべしと。木工云。此髑髏まろくして獸骨に比すれば少しく大なり。また齒のかたちもあらはにして。且又手足のさまなど決して狐狸の骸骨ならざるよし。これよりして余も材を取る事を止みぬ。何等の事なるや知るべからず。

陸奥白河郡眞名幡村といへる處に古祠あり。杉の大樹あり。一夕暴雨迅雷ありて此樹を燒けり。うちに洞穴ありて蛇形のもの燒死せり。燃膏凝結し。臭惡近づくべからず。骸骨岡をなせりと聞く。又那珂郡額田村に杉の大樹あり。一日雷火に燒失し。骸骨多く出ると云。又余が一友人

西金村神永氏樂志園と號し。醫を業とし最も其術に委し。鄕中の名士たり。神永氏昔日南台山中の岩間に枯骨若干を見出せり。其狀蛇に類せり。此れ何等のものたる事を知らず。

久慈郡頃藤村に古城あり。佐竹義胤の第四男小川五郎宗義此地に食邑し。累世城主たりといふ。隣里大澤村に根渡神社あり。社內に大旦那小川彈正左衛門の名を記せり。是も同族なるべし。今此城跡を館と呼べり。此處に人家八九軒あり。家々甲或は鞍刀槍等の武具を所持せり。相傳ふ小川氏の家人なるよし。今余が知る處のもの。神永氏或は淸水氏などあり。此外にもまた多くあるなるべし。其詳なるは再考し後篇に錄すべし。

姜。久慈郡下津原村より產せり。本國中其他諸處より出づ。此姜暖國の產物にして。最も寒を懼るゝもの故。今下津原村より奧羽の國に送り鬻げり。亦常陸の名品なりといふべし。

柚。此樹本國中諸處より出せり。奧羽寒國に產せず。故に近時常陸の名產となれり。

柑。多珂郡秋山より以南油那子等の諸村比屋皆あり。行方郡大洲新田村田氏より上へ獻ぜり。

銚子より出るもの最多し。銚子浦より以北。箕幡江霞浦涸沼浦等の湖水あり。いづれも東海に朝宗し。今江戸へ奧州北國はさらなり。常野の奧郡より諸產物を運漕せる水路にして。尤も勝地たり。昔時波逆海とは此等の地をもいひしにや。

久慈郡久慈川はさらなり。那珂川其外諸處溪川にかじかといふ魚あり。此魚味も頗る美なり。

土人云。是の魚春半より秋晩まで朝夕鳴くよし。其聲さやかにして愛しつべし。俳流の。かじかなく夜るのあはれを膳の先。と云句あり。又。谷川にかじかなくなるゆふまぐれ。こいしながるゝ水の落あひ。など歌にも讀みて其もてはやせると久し。しかはあれど此ものまつたくかじかならず。蛙なるよし。其貌小にして色くろくやせたるよし。京都北山矢瀬の邊谷川のながれ清き處にすむとぞ。

今僻邑の土俗。おろかにしていやしきものをハナタレと云。此語古くいひなせるとにして。よるところあり。日本書記に。

唯有二殘賊者一。一曰二鼻垂一。

菌種類極めて多し。土俗菌を食してまゝ毒に苦しむものあり。菌の性卑濕の氣より生ず。みだりに食すべからざる事なり。胡桃蕈あり。胡桃の根に生ぜり。味もよろし。この蕈人賞し食へり。蓋し魚肉と一同に食すべからず。小毒ありと云へり。

榕木と稱せる樹。人の知れる木にして。香木に類せり。土俗墓處などにまゝ植う。此實大茴香によく似たり。毒あり必しも食すべからず。余が隣里此の實を食して死せるもの三四人あり。尤も心得べき事なり。是葉を水に浸し眼をあらいて眼疾によろし。又鼠毒をも治せり。鼠に咬れなば。早く此葉を揉て付くべし。奇効あり。毒あれば効ある事自然の理なり。

余が鄕里に隣りて上澤村あり。八龍神の祠あり。雨降山と云。是境六景勝あり。土人云。昔時俳流はせを此地を過ぎて。八九間空で雨ふる柳かな。と云句ありと。今古柳樹あり。傍に碑あり。芭蕉塚と呼べり。此の里余が曾祖父の生れし邑にて。幼少より此土に馴れり。往年此六景を詠じて社前にさゝげぬ。余駑才にして文雅に乏しく。最も淺拙なるを覺ふ。今此に錄して削正を乞ふ。

八溝峯白雪
曉來看一色。竹落與二松村一。孤峻寒空聳。宛如二白虎蹲一。

南邊寺晚鐘
江村遠杵止。野院踈鐘起。墓鴉亂似レ蠅。飜在二炊烟裡一。

稻荷社紅葉
誰瀉二丹沙汁一。染成楓葉枝。葉々看々妙。枝々更色絲。

稚子墳青松
不レ知二童子名一。留得古墳塋。有二箇長松樹一。唯成二颯々聲一。

優婆澤落鴈
酸嘶遶レ山下。雨歇霧消初。平疇水延レ紙。影落一行書。

鴛鴦溪打魚

水暖魚噴レ玉。風和花舞レ溪。酣晴好時節。莫レ使ニ漁郎迷一。

蘆野倉村あり。村名倉の字あるは昔時屯倉の設ありし地なるべきよし。前に論次せり。此村に木澤氏あり。舊家たり。又醫家金澤氏あり。產術を先とし。性篤厚。余が幼年竹馬の友なり。俳歌を好み松江と號せり。

上澤藤田源七なるものあり。よく父母に仕ふ。幼にして母にはなる。繼母に仕へて其の至孝天性に出づ。又よく諸木を培栽し。杉檜はさらなり。桐漆及び諸菓樹を植う。嘗て杉檜數万株を植ゑて。上へ奉る。上よりまた〳〵褒賞を賜はる。殊に神佛を敬禮し。遂に壽を以て家に終れり。其父藤田源左衞門昌信なるもの。よく神佛を敬し。殊に上の法制を堅く守りて。敦朴の人なり。余が曾祖父五郎左衞門久敬と從兄弟たり。時人呼て天狗五郎左衞門。堂鴿源左衞門と云。五郎左衞門は生平天狗の說を排せり。源左衞門は好て佛神を尊崇し。堂塔を修造せるを樂しめる故なり。

予が鄉里は常陸の北郡にして。尤も僻遠の地たり。余が幼少の頃は。鄉黨中神事祭禮など隣里會集し。射或は鳥銃などをもて樂しめり。いつしか弊風おしうつり。金錢をかけものにし。勝負せる事なんありしかば。上より法令下りて今は禁止せらる。それよりして後。祭事に小唄淨

瑠璃やうのもの流行せり。近き頃はチョボクレなんど云非人のわざをもてはやせり。此の風や世におしひろまり。今は兒童の戲れにも。此のチョボクレをもてわざとす。世のさまかくまであさましくなり行きしは。嘆息すべき事ならずや。

本邦天狗と稱せるもの。何等たる事を詳にせず。天狗說。天狗名義考。藝園日抄。怪異辨斷。孔雀樓筆記。北窓瑣談。護法資治論。山中一夕話。近聞偶筆。廣西通志。天狗辨。山海經等の諸書に載するものを參校するに。其說紛紜いづれも定說なし。天下野人木村子盧先生余に語て云。往年深夜金沙山を下るに。溪隈に何か人の居れる樣しけるが。たちまち鳴聲林木を振ふて飛去れり。勁翮の音空中に磔々たり。其聲頗る人語また百舌にも類せり。又利貞村鏡德寺といふ密寺は。幽絕の境なり。時々松林のうちにて此鳴聲を聞くものあり。是鳥即ち本綱附翼に出る治鳥なるものにして。世にいへる天狗なりと。其貌大畧鳶に似たりと云。今長谷川流鳥銃家にて。笠原山の朝鳶を打つ事を戒しむ。乃ちこれ天狗なるべしと云。木村翁上より命ぜられ。蝦夷地にもいたれり。讀レ書嗜レ武勇健壽をもて終ふ。一奇士なり。余が曾祖父五郎左衞門諱は久敬字士交。號ニ休也一。又號ニ漱石山人一。任俠にして有レ勇好レ義。平生好て天狗の說を排せり。老健享年八十有一にして終れり。

大子村小久慈といふ地あり。硯石を出す。よく水をたくはへ。久しく涸れずとなり。

天智天皇の御宇。越後より燃土を獻ぜるよし。今隣里淺川といふ村より此燃土を出せり。久慈川。深夜網を水底に投じて魚を捕ると。土人の常なり。茲かるに水魂といふものあり。暗夜水中俄に光りて。白晝の如くなる事まゝあり。今は常となりあやしむものなし。

橘成季著聞集に。建仁(土御門天皇)三年。常陸國多珂郡に僧あり。老猿を畜へり。僧時に法華を寫せり。貧にして紙墨の料なし。顧みて猿に戯れて云。汝人たりせば。吾が資なきことを患へずと。猿つく〳〵聞てうなづき。翌日老猿人家の厩に入て白馬を偷み。身に短布衫を着。頭に編笠を戴き。鎌を腰に帶びて馬に跨り。間道よりして馳せ行けり。主人追て覓むれども及ばず。行人に逢て問て云く。是の先白馬を見しや否。行人云。今これよりして先に牧童の編笠を戴き。鎌を腰にし白馬に跨るを見たりと。主人其言に從ひ。蹤を追て僧家にいたり馬を乞ふ。僧驚き頓に厩に入りて見るに。果して老猿一馬を牽きたる。僧因て事のよしを詳に告げて馬主に謝せり。馬主感歎しいふ。嗚呼禽獸すら主恩を報ずる事を知る。吾なんぞ僧の爲に一馬を啻まんとて。遂に僧に馬を授けて去れりと云。

風土記云。久慈郡岸壁磐石の間に獼猴集會せり。此地を名づけて古々之邑と云よし見えたり。今何れの地にや知るべからず。余が隣里川山村の境に久慈河の流に沿うて斷崖壁立し。人の攀得べからざる地あり。此の半腹に石窟あり。猿猱數百集會せり。うちに白猿あり。毛色潔白に

して潤光あり。面は紅にしてあたかも臙脂をもて粧ふが如し。鄉中の人民集りて生ながら捕へ上へ奉れり。今礫川御鷹部屋に畜はる。又一奇事なり。同郡高倉村より金沙山など猿猱最も多し。相傳ふ山王日吉神ある故とぞ。湯くさといふ處に温泉あり。疝痛等の諸症によろしと云。此よりして山南諸澤村あり。白石を出せり。白色明瑩。馬腦の類なりと云。今江戸にて水戸火打石と稱し。名品とす。又釜額村あり。鏡石を出せり。黑色潤光あり。よく人を照映せり。奇珍たり。眞弓山あり。寒水石を出せり。雪白にして潤澤あり。又愛しつべし。多珂郡町谷村あり。班石を出せり。又曼荼羅石ともいへり。青黑色にして潤光あり。少しく白色の班文あり。常陸國中の名石たり。其他木化石。木葉石。貝石。陰石。陽石。迦羅石。石蕻など。種々諸處より出づ。

東海諸魚を出せる事。世の人遍く知る所なり。殊に査魚は本邦の無比の名產たり。又安康魚最も宜しと云ふ。

石那坂。久慈郡金澤山の麓に在り。坂より以東多珂郡に屬し。(三箇の原の上にあり)東海を眼下に眺望し。神王し氣豁す。一壯觀たり。

友部古城。多珂郡に在り。山直氏始めて築けり。山直氏の祖は宍戸氏なり。宍戸家政四世の孫知宗二子あり。其次子を家時と云。五郎左衞門と號す。是山直氏の始祖たり。世々此地に食邑

し。六世にして子なく。佐竹義昭の子義昌を嗣とす。義昌死して城廢せり。

久慈郡瑞龍村旌櫻寺に。櫻の大樹一根兩株にして。其大さ牛をも蔽しつべし。盤旋數十間。枝葉蓁々たり。是花蘂のうちに小針ありて。旌旗の形に似たり。相傳ふ源義家此地に營を結び給ふ時。籤竿を立られしより萌芽を生し。遂に花を開きて。かく大樹になりしとなり。又此地に一空洞あり。蛇ありて盤蟄せるといふ。

行方郡玉造村高洲といふ處に古松樹あり。偃蓋數十間。蒼翠奇峭愛しつべし。上よりも命令ありて毎々培養せらるゝよしなり。陸奥國一の關源義經の腰懸松に似たりと云。此腰懸松も近き比枯れしと聞けり。また惜むべし。此村往時孝子彌作なるものあり。委しくは後篇に出せり。

天智天皇十年三月甲寅。常陸國より中臣部若子を貢せり。長一尺六寸。其生年丙辰にして。此年にあたりて十六歳なりと見えたり。矮人の本國に產せる事古今少なからずとなり。先年菊池風助齋藤雨助なるものあり。いづれも長三尺許といへり。五十餘歳にして死せり。其子雪助また三尺餘にして父の風ありしと云。

昔時那珂郡に石上の鄕名見えたり。今の石神なるよし。按ずるに石上は古昔イソノカミと訓せり。石上は神代より古く云傳ふるゑにしある故。此の地の村名もいづれ故ありて稱し來れるなるべし。（古昔石上乙麻呂。常陸守に任ぜられ。其子宅嗣もまた此國に守たり。かゝるゑにしにもや。いつの比の事にや又古城跡もあるよし。再考すべし）而るにイソカミと云ひしを今いしかみと呼び來たるは。其言葉少しあひ違へるに似たれども。古言の轉じ來れる是等の例最も多し。上古玉作と云ひしを今玉造と云ひ。また馬木を茨城と云ひ。又多治比を丹墀と云ひ。今丹次と云ふ如し。枚擧すべからず。又門部村あり。天武天皇御宇三十八氏に連の姓を賜ふ事見えたり。門部直凡川内直。矢田部造。小泊瀨造。石上部造。川内馬飼造。川瀨舍人造等なり。按ずるに凡川内川内馬飼造は今の村名大内河内などゝあるは是にもとづくなるべし。又上世大泊瀨小泊瀨の稱號あり。蓋し今大生瀨小生瀨の村名あり。大泊瀨小泊瀨の稱によりしにや。總じて村名姓氏人名など。皆上古の稱呼を景慕し。襲來れるものなり。音訓また字躰少しく違同あるに似たれども。上世邈遠なれば。自然と手爾葉の轉訛せるものなり。

又常陸と下總の界に我孫子驛あり。即ち姓氏錄に我孫伊氣。我孫公等の稱見えたり。また古名の存せるものなり。

下野州足利學校に。近世江戸近藤氏の收められし宋板巾箱本の儀禮注疏一部ありとぞ。此本も

と久慈郡增井村萬秀山昌宗寺の藏本なりしよし。今に昌宗寺藏書印ありと云。

東鑑に石瀨與一太郎なるもの。治承四年源賴朝佐竹氏を攻む。佐竹氏金沙城に據て戰ひ。城遂に潰へ。忠義死を致し。秀義遁れ去る。賴朝衆を遣して緝捕せしむ。石瀨佐竹氏の滅亡を悲し

み。自ら行きて獄に就く。頼朝怪んで故を問ふ。石瀬涕泣して。佐竹氏罪なく讒人の爲に陷り。且又切に頼朝滅親の不利を説く。頼朝これを聞きて義とし。其忠誠を善し縛を解て家人となす。秀義遂に頼朝に歸せり。嗚呼佐竹氏の興廢存亡。只此一个の與一太郎が忠節によれり。是石瀬氏は今の岩瀬村に食邑せしにや。

古昔長幡部福良女。また大部子氏女。いづれも貞節を以て名あり。又丸子部婦人孝誼を以て賞せらる。近世皆川氏の家婢。主家の遺命を固守し。三孫を鞠育して獄にあること二十餘年。終始一の如しとぞ。

西山黄門源義公。其忠節を憐み給ひて祿をも賜はり。商家に嫁せしむと云。また長山宵子あり。此事年山打聞。及び奇人傳にも出て。人漸く知れる事なれども。其貞烈後世の龜鑑ともなるべく。且は昭代治教の然らしむるゆへんにして。實に國家の盛事たれば。いまた是に贅せり。

宵子は水戸府城長山七平某が女にて。奉行職師岡與右衞門綱治が妻なり。夫婦のあはひむつましく。奴婢をかへりみて惠あり。すべて内を治むるの婦德うるはしきが中に。善助綱常は家婢の産む所なりしを。やがてみづからの子とし。其婢を深くいたはりて。湊村の某に嫁せしめ。綱常を愛育すると我生む所の如くなれば。母子の間いさゝかも隔つることなく。綱常もまた孝行ふた心なく。もとより彼家婢のうめるといふも。十四五歳までおらずぞ侍りし。其幼かりし時

病を憂ひたりしに。宵子醫藥を嘗試むるあまり。人目をつゝみて夜に紛れ。神崎寺の觀音大士へ素足にて參詣し。祈りける。感應のことはりむなしからで。その病癒えけり。是世の中の養母繼母のいましめとなり侍りけん。更に家婢をえらびて綱治にめさせ。其婢をも又いとをしきものに敎へ導きて。織縫何くれまで女職をならはせたり。古人曰。凡婦人のうまれつき。妬を甚しとす。もし妬なくば百拙捨つべしとぞ。嗚呼宵子や。妬薄ければ世中の妻女の敎となり侍らまし。又綱治久しく召使ひたる若侍。おほけなく宵子に心をかけて。さまゞいひなびけんとせしが。或時綱治他に行く留守に。その閨にしのび入りしを。かねて用意やしたりけん。かねよき脇指にてかひ〳〵しく切りければ。唯吽といふ聲ばかりにて死しけり。傍の衣裳うちかけて。さりげなくものし。綱治歸りたるに。始めてあか〳〵の趣始終を語りけるとぞ。女の密夫すること。隱れても現はれても。たま〳〵聞えて其身の耻のみならず。親はらからまでの名を穢す事なるに。此宵子の潔よきこゝろもちぞ。綱治手をいたはらさず。家のうちのさわぎもなきふるまひは。またためし少くぞ侍る。以上の婦德を思ふに。もろこしの書には賢女節女烈女など。と〳〵しくあるしたるにはいやまさりてぞおぼえ侍る。正德三年の春より。病つきて同しく七月廿四日に身まかる。齡四十二。江戸駒込大乘寺といふに葬りて。妙珠院月澄日冷と謚せり。まとに惜むべく尊むべき貞烈の婦人ならずや。長山七平は久慈郡淺川村の産にして書・

を善せり。余が高祖父風也なるものゝ縁兄たり。又七平の猶子に幼名助七なるものあり。皆吉幽軒に養はれて婿となり。醫を業とし立碩と稱せり。水鏡庵と號し。また慈川窓とも云。家久慈川の澁に住めばなり。其子を立幡と云。父子何れも温淳篤實をもて鄉曲に名あり。立幡の子を玄察と云。後に祖父の名を襲てまた立碩と稱せり。相次で行誼あり。其家聲をおとさゞるものなり。今此に本藩藤田幽谷老先生に請うて撰みし墓碣を錄せり。

皆吉處士墓表

處士皆吉氏。諱胤忠。字子信。稱立碩。常陸久慈郡大子邑人。其先下總大姓相馬之族。仕足利氏于古河。從遷于野之喜連川。曾祖曰幽軒。喜連川士人相馬玄蕃之弟。隱於醫。從其母姓。爲皆吉氏。徙居大子。其後喜連川君餽之食糧。以及其子云。由大父而下。皆不仕。處士爲人温厚敦樸。讀書通大義。居家勤儉。善誘子弟。敎誨不倦。拊循僮僕。恕而有恩。平生展拜先人墳墓。以致思慕。元旦中元必謁。雖風雪雷雨。未嘗有廢也。其孝敬如此。夙受業於原南陽。其於醫事。多所發明。然不事奔競。優游里閭。故世莫之知也。文化中增子淑茂宰北地。嘉其行誼。上請特加旌異。許其身佩雙刀。及官府文書稱族。鄉里頗榮之。而處士不以爲華。享年六十。終于其家。實文政二年八月九日也。葬于臥雲山先塋之側。處士娶小室氏。先沒。繼娶町島氏。前妻所生。一男一女。

後妻亦一女。男曰胤謙。女婿一爲黑崎貞孝。一爲飯村友杏。貞孝好學。嘗與余游。屢走書請余表其墓。余素聞處士之行有足稱。述書以遺之。俾鑱諸石。以示後人。

同郡池田村鏡山。また下谷田村龍厓等の古城跡あり。何れも土人の口碑のみにて證すべき記載なし。再考して後篇に錄すべし。

常陸紀行

終

みるめのさち

成島司直

彌生の末つかた。御前の花の梢どもは大かた青葉がちになりて。南の風薫り涼しく。まだき時、鳥の初音またるゝ頃。海づらの見るめもゆかしきに。西の御所。河崎のあたりに御馬を試み給はんとて。侍ふ人々の中にも。馬にて供奉するきはゝ。誰は月毛彼は鹿毛栗毛など召定められゝを聞て。例ののどめあへず。御供の事ねぎまるらせしかば。去年玉河の折のこと思召いでゝ。こたびも御道すがらの事ども記し奉れとの仰せ言を。大隅守景元傳へしかば。

玉河の涙のもくづをかきつがむ筆の光は磨き得ずとも

と獨うめくもあふけなく。その日は甘あまり三日なりけり。つとめて大手の御門より出立たせ給ふ時は。卯のさがりにもやありけん。昨日に引かへて今も降り出んさまなれば。御供の人々空のみ打まもりつゝ行く。

たまさかの君が門出に心して雲ふきはらへ天津神風

などいひたし。二重の橋過るほど。御先に立し供奉のさまども。例の事ながら嚴めしくめでた

し。霞が關の跡はこゝら國の守ども家居むね〳〵しく立こみたり。

關は今とざしせぬ世の道廣み春の霞に名のみとゞめて

虎の門より白銀飯倉などいふ市町を渡りまして。高輪の海づらに出給ふ。孝標の女の日記に。竹柴とまろせしは此邊にて。今も芝といふ名の殘りし所もあり。雨催の雲吹く浦風いと寒し。

磯菜摘む春もいつしか竹芝の浦風いかにさえ返るらん

品川の宿過ぎ給ひ。濱川といふ磯邊の幔引めぐらしたる御休らひ所に入らせ給ふ。御先にまかりたる中次の衆。御狩場の事奉りたる輩。鷹飼鳥見の長等はじめ。司々數しらず迎へ奉り。大森といふ里人のすなる。麥のわらもて作りたる調度ども。童部の翫物など御覽ぜさせ奉る。こゝにてまづかれ飯御肴などあがり給ふ。下がしもまで到らぬ隈なき御心もちひの賢さ。越王の江水に醪ながしけん古へにもこえぬべし。

隔てなく斯る惠は大海のそこるもふかき類ひなるらん

こゝよりは御馬にめさるべしとて。おのれは事馴たる厩の長を伴ひ連。道々の名所きかんため御先に出立つ。鈴が森の海づら怪しう古りたる松並立てり。こゝぞ昔の荒藺が崎などいひし邊にて。かの家長朝臣が。變らぬ色のと詠し磯馴松も。近き頃まで新井といふ所に朽殘りしが。今は見えずといふ。浦風いよ〳〵烈しく。波高く吹あげて道行なやむ。

浦風はなほ音たかくよるなみの荒藺が崎の松の下みち

八幡の宮居はいと古りて。鳥居に磐井の社とまろせし額をかゝぐ。吉田忠隆の筆なりとかや。こは式内の御社なり。いつの頃より八幡とは名のり給ふらん。神主は森田隼人嘉稱といふ。鳥居の下に跪き居たり。かくて御先の聲高く聞ゆれば。道の傍にうづくまりぬ。馬上にて扇をさし翳してけい〳〵と呼はるは。例の御廐の都甲某なり。次に播磨守俊光。安房守忠明。越中守道忠。淡路守成富。隱岐守與行御先をうつ。君には嶋巡といへる月毛の駒に召る。たけきの御さまながら。あてに優なりと見奉るは心がらにや。木陰垣根がくれに居並て拜み奉る賤山がつなど。おのが顏のならんさまもまらず。あな尊と手を合せて。神の影向し給ふ如。涙流し拜み奉る道理なり。主水正勝知。駿河守忠義。丹波守道弘。かはる〳〵馬上にて御劔を把る。御跡よりは主殿頭頼常。但馬守信義。備前守頼保。市次郎義制。勝之丞信學。次に大隅守景元をはじめ。八郎左衛門秀興。總十郎信尹。六左衛門正喜。傳次郎近韶。吉郎季温。次郎兵衛政德。繼太郎正繼の人々。次に少老豐後守助賢。本城の中次豐前守朝旨。西の中次石見守頼暢。並に飛驒守忠德及び小姓組の番頭に准じて中次の事習ふ伊賀守正路。とり〴〵逞しき馬ともに。いろいろの鞍置て乘列たり。まばし隔てゝ目付舍人忠一。小姓組の輿頭數馬頼功。書院番組頭十郎右衛門直當。歩行頭能登守直一。小十人頭修理道傳等。各おくれじと鞭打はえて馬を馳るさま

又ゆゝし。其中にも。

雲井迄登らん君がいさをしは月毛の駒の足音にぞ志る

とひとりごたる。おきわたしとて。御道にまかり待迎ふる人々もさき〳〵の定めの如し。さしも心遣ひせられし雨雲殘りなく晴れて。今朝の寒さに變り。日高くなるまゝ汗出るばかりになりぬ。實やこの君明年は世にいふ御歳厄に當らせ給ふ。其御祈のため。今日は大師河原の大師にも詣でさせ給はんとの思召たちなりしに。かく空さへ清く涼しく晴渡りたる。御果報のいみじさよといふもあり。我君は天の下の蒼生の厄を救はせ給ふ御身にてましませば。神佛の感應はなど無らんやと言ふもあり。誰も〳〵御惠に洩ぬかしこさに。かくさがなき詞だゝかひするにも。君は千代ませと祝ふ心を顯すなるべし。不入斗村といへるは。何國にも多き名にて。古の神田の地なりといふ。然ることにや。大森といふは。太田道灌の江戸の城を立て都に上りし時。こゝにて。大森の木の下露のすゞしさにと詠し所と聞て。

今もなほその迹とひて大森の木の下露に袖ぞぬれぬる

内川の橋を渡り。寄木の明神といふ祠あり。昔此浦に流寄りし彌陀の像を。蜑どもの拾ひて神に祭りしなりとぞ。貴船明神も立たせ給ふ。こゝに和中散といへる藥を賣りて。營業とする商人あり。上中下と所を隔てゝ三所に住む。その中の家は忠三郎といへり。こは東路の草津の驛

なる是齋の子。元祿の頃よりこゝに移り。彼是齋が傳へたる藥を賣りたりしが。享保のはじめ御狩の折。立寄らせ給ふことありしかば。其家は家居も公より修理し給はるとぞ。けふも此家に立寄らせ給ひ。佐沼といふ栃栗毛の御馬に召かへさせ給へば。御供もみな乘かへて走らす。蒲田村に梅園あり。こゝにて和中散を鬻ぐ。久三郎といへるが栖とす。數多植列ねたる木蔭に胡床設け。茶烟の具など清らかに並べたる樣。見入れゆかし。

花の時とひ來て見ましよそめにも著き蒲田の里の梅園。

此あたりは往時行方彈正明連といへる武士の知る所なり。明連嘗は鎌倉の上杉に從ひしが。小田原の北條の爲に戰ひ負け。降人となりて本領を安堵し。後に安房の里見と戰ひ討死すといふ。今もこの道の右の方に。行方が家の跡馬場の跡も殘れりとぞ。又蒲田入道重連と聞えしも。此里に年ふる兵にて猛く勇々しかりしが。後は小田原に屬す。其末は今民となりて此所に住む者一人二人あり。又上杉式部大輔憲行が館の跡と傳へし所も殘り。稗田の神社もその邊なりと聞くに。猶委しく尋ねまほしけれど。私の道ならねば急ぎ過つゝ。夫婦橋を渡る。新宿雜色などいふ村を行けば。左に莊中なと彫りし碑建り。志ばしゆけば右に古川藥師の碑も建つ。何れも道隔てたれば訪はずなりぬ。八幡塚村の八幡宮は古りたる廣前なり。これも稗田の神社なりと傳へしは如何にや。鎌倉右大將家の修理し給へる宮居とぞ。殊に我神御祖の尊の御願文を今

に納めたりと聞けば。最尊し。慶長の五年。關原の御軍に打立ち給ふ時の事といふ。とかくする程。君には御船を奉りて六鄕の渡をわたらせ給ふ。御馬は更なり。人々の乘捨たる馬ども。數限りなく河原に繫ぎたるは。雲のごと屯とも言はまほし。河岸には朱の樓船。金銀の具など輝きたる目もあやなり。此河昔は橋ありしを。永祿十二年。武田信玄入道この國に攻入りし時。行方彈正が橋を燒て。甲斐の軍を防ぎたり。夫よりして橋も絶えぬるを。慶長五年再び架給ひしことは。彼の八幡に納め給ひし御願文に見えたり。然りし後も修理ぢば〳〵加へられしに。元祿元年七月の野分烈しく。川水漲りて橋をおし流しければ。今はこゝも長等と同じく。名のみを留めけるとぞ。向ひの岸より川崎の驛路を右に見なし。左に折れて田と畑との中道をゆく。醫王寺といへる寺の門の前より右を顧れば。神奈川の小安觀音の山遙かに見え。その上には相模の雨降山高く聳えたり。

中空の雲より續く山々に國のけぢめもそことわかるゝ

何のをかしきふしもなけれど。矢立の筆とう出て帖紙に書い付るを。行手のすさみにて。用意淺きは下種の常なるべし。賤が外面に。朝たにゆひそへし垣ほの卯花はまだ咲かず。

咲く頃も程ちかしとや山賤が卯花がきをゆひそへにけん

牡丹咲初めしもあり。藤欵冬の散り殘りしも見えて。さま〳〵哀れ深し。川島村より川中邊に

至る。この村と大師河原の境に大師の堂あり。寺は平間寺といふ。此あたりにては頗る莊嚴といふべし。御休らひ所は內外の御供人上下入滿ちて。らうかはしさあたりまとふ。供御まゐらせなどするほど。暫しのどめて。人々に誘はれ。本堂の靈像に詣づ。あまたの御供上下のわいだめなく群來て伏拜む。心の中はいかなる願か立つらん。大師もいかに見そなはすらんと言へば。例のえせ博士の癖と人々にくむ。此像は平間の某が。尾張の海にて網引得しを。こゝに堂建て安置せりともいひ。又尾張の平間村稱名寺の本尊なりしを。故ありてその國の海へ流しけるが。こゝの川崎へ流れ寄りたりともいふ。何れか實ならん。又其所に田螺の形せる石と。芋の形したる石あり。この石にも。怪しくも奇き事ども言傳へたれど。化石の類なるべし。大師の事は釋書大師傳行狀記などの文に委しければ。今更論ふに及ばず。いづれにも人の國より入木の道まで傳へられしぞ有がたけれ。

執る筆の道にかけてもすべて世にまたふや弘き法の山人

けふはとく御歸さ急がれて。御供の人々ひしめきあふ。こたびも六鄕の渡り越えましてより御馬にめさる。新山といふ麁毛の御馬なり。御先打つ人々は。成らせ給ひし時に變らず。御劒の役は兵庫頭賴啓。縫殿頭親經。土佐守成允。交る〳〵仕ふまつる。御跡より乘りつれしは。山城守正意。大膳亮勝門。能登守氏著。安房守賴歲。備後守眞實。攝津守朝昌。鎌吉豐展。次に

隼人正親長。虎次郎正敏。小左衞門勝成なり。大隅守景元。惣十郎信尹。六左衞門正喜。傳次郎近韶。次郎兵衞政德はこたびも供奉す。其外少老御側の人々。將た外樣の輩はさきに同じ。御かへさには。君は更なり御供の馬乘共も。殊更勇み進みて馳せければ。たゞ時の間に濱川の磯邊におはし着ぬ。こゝにて豐前守朝旨をはじめとして。申次の衆。御狩場にあづかる人々。鷹飼鳥見等御暇給はる。おのれも御輿出立たせ給ふ傍に。うづくまり居たるに。西の殿までも御供すやなど。主水正勝知の傳へしも畏くて。猶御後に從ひつゝ。申には今しばしといふ程に。西の殿には還りぬ。抑もけふの御道は東海の驛づたひ。はる〳〵の所を。人も馬も聊かの煩はしき事もなく。平らかに安らけく還御ならせ給ひし歡に。上も下も互みに山どよむ迄ほぎのしる。げにや敬の怠に勝つ者は吉なり。怠の敬に勝つ者は凶なりと。尙父とかいひし人申しけると。傳へ聞侍りしが。今ぞ實に四の海波長閑なる御代の儲の御所にて。天が下の富を承繼せ給はん御宿世の。あてに尊くましませば。何事を樂ませ給ひ。何事に耽らせ給はんも御心のまゝたるべきを。梓弓引かへし。朝夕に武の業を勤とし給ひ。文の道をも捨たまはず。かく遙なる道をも厭ひ給はで。諸人の箕裘の業を勵ましし。御身を先立て掟させ給ふ御事は。彼の敬をもて怠に勝つの道理知られ。吳竹の代々の例とも仰ぎ奉るべけれと。有がたくも畏くも思ひたまへらるゝまゝに。春に後るゝ花の。色香もなき言の葉もて。憚りの關のはゞかりある事まで

書記しぬるも。あさかの沼の淺き心を如何はせん。

その日道にてよみて奉りけるからうた

風日清和海驛春。追陪幸接扈從人。鑾聲遠響殘霞際。騎影遙連古渡濱。一歲蒐苗皆講ㇾ武。四時遊豫是憂ㇾ民。寒儒則有ニ君恩渥一。探ㇾ勝何辭語ニ苦辛一。

みるめのさち　終

登獄日記

栗本鋤雲

雨浸霖雨の能く我が邦の凶歉を爲すは。人皆之を知ると雖も。唯夏間多雨のみにして。秋に到り殘炎復び酷なるに逢へば。意外に收穫に害あらず。殆んど之を東方に失ふて。功を桑楡に收むるが如きあり。天保申年の荒飢の如きは。殊に夏間多雨の故のみにあらず。非常の冷氣にて。三伏の日と雖も。時に或は綿衣を着けざる能はず。扇箑爲めに權を失ひ。婕妤秋ならずして先づ恨むに至れり。去れば此歳の如く。九十月に至ると雖も。稻葉萋々讒に穗を出すまゝにして實せず。霜を見て黃萎す。又弘化午年の如く。閏五月末より七月初旬に涉り。一日も雨ならざるなく。然も驟かに至りて又旋や止み。一晝夜間に其幾回來り。幾回止むを。算記するに暇あらざらしむ。其來るや漆黑の雲纔かに合すれば。雨勢乍ち滂沱として。傾盆覆瓮より急に。其止むや長風一掃。斷虹雨を截て奩開き鏡を拭ふ。殆んど兒戲に類せり。然れども暑氣常に鬱蒸して。甑中に坐するが如く。七月中旬より連霧を得たれば。水を被るの地を除くの外。意外の穫ありて。天保年間餓莩途に横たはるの慘を見るに至らざりし。此年予は學友大越貞五郎子

（名は謨洋。今の佛國領事成德氏の父翁）に誘はれ。甲斐に遊び富士に登り。甲府に至り。御嶽山より金峯山に攀りたるが。其日記は往年火災に罹りて。烏有に歸したれども。此頃片紙の小遣帳の。日に陰晴及び瑣事を記したるを。敗籠中より檢出したれば。日に就き事を憶ひ。序して一篇となし。以て多雨の年と雖とも。夏間暑熱を失はざれば。水害を免るゝの地は。稔を愆らざるを證し。併せて物價年を逐ふて倍蓰するを徵せんとす。

閏五月二十五日。晴。早發國領村にて午飯。火酎二小盞を用ゆ。價二百七十二文。炙に炙卵鹽魚あり。午後驕陽炙るが如く。日野宿玉屋に投宿。旅泊價二百二十四文。

二十六日。午後疎雨遠雷。早發八王子驛を過ぎ。駒木野驛鍛冶屋に午飯す。八十文。穀に鹽炙の香魚を供す。小佛嶺を踰え二瀨越を渡り。甲州の地に入り上野原に投宿す。宿價二百三十二文。此家の標記に。米價一升百六十四文に付旅籠代增。右の通りと書しありし。此日途中費す所。二瀨越にて火酒一盞八文。香魚鮓一個五十文。煮香魚一尾十二文。渡し錢八文。關野にて饅頭の餡に鹽を以て糖に代ふる者一個八文。其甚だ口に可ならざるを以て半を棄つ。草鞋二十四文。

二十七日。朝疎雨。晴れて後に發し。鶴川に至り又雨降り。乍ち止み虹見ゆ。長峯猪の目を過ぎ猿橋に至り午飯す。價八十文。駒橋を過ぎ犬目より官道を棄て岐路に入り。直に谷村を指す。

谷村は石和代官所の支廳の有る處にして。其中大越氏同宗の戚家あり。主人を孝一郎と云ふ。此行の東道主人なるを以て其家に抵る。途中大雨大雷に逢ひ。樹陰茶店に入りて避くるに。猶ほ衣服行李沾濡せざるなし。大越主人云ふ。此地七八日前より。日として雷雨せざるなしと。因て知る昨日小佛嶺上聞く處。西南の天に方り遠雷殷々たりしは。乃ち今日予が衣裳を濡した る谷村近邊の雨なりし事を。

二十八日。朝晴。午時より雷雨。午後八時に止む。近村を逍遙し。雨再び來るに逢ひて歸る。

二十九日。近山を登攀せんとせしが。雨來り果さず。

六月朔日。終日陰雨霏微。

二日。陰。午後晴。白糸の瀑布に遊び。法泉寺を過ぎりて。海盤車の石に化したるを見る。晚雨。

三日。朝晴。晚間雨到る。此日將に富士に登らんとして。上吉田に至り社人某の家に宿す。

四日。朝雨止みて發し。竹輿に乘じ淺間社に至る。社に喬木多し。仰いで日光を見ず。過て馬回に到り。輿を棄て步す。所謂富士の裾野なり。幽花野草の間を蜿蜒蛇行して進む。土人の定むる處。山路を分て一升とし。恰も其三合に到り午飯し。更に上りて五合を過ぐれば絕て寸草なし。八合に至り石屋に宿す。途中屢次烟雲中を行く。其雨なるを知らず。此所飯を炊ぎ茶を

淪する水は。積雪の融汁にして。薪は石楠木材を用ゆ。

五日。朗晴。上りて頂上に至る。下界唯白雲を見る。亂絮堆綿の如し。曦光岳影を其上に寫す。宛も谷文晁が墨描の圖に異ならず。唯峯尖に圓暈を彩す。其色虹の如きあり。衆御來光と呼ぶ。陸游が入蜀記。之を記す既に詳なり。然して文晁は蓋し未だ知らず。

六日。朝晴晩雨。岳を下り。船津驛井出與五兵衞が家に投宿して。却て昨日の陰晴を問へば。答へて云ふ。終日强雨なりきと。此に於て下界上方。其陰晴を異にするを知る。

七日。船津湖を渡り御坂を踰え。石和に宿す。途中黑駒より雷雨に逢ひ。夜に入りて未だ止まず。

八日。雨乍ち止み又乍ち來る。甲府に到り。小川士馨に誘はれて林鶴梁を訪ふ。時に鶴梁田邊石菴と共に。徽典館督學として此に在ればなり。

九日。雨。石菴を問ふ。

十日。踈雨時に來り時に止む。將に谷村に歸らんとして甲府を出て。駒飼にて午飯し。黑奴田に宿す。

十一日。陰。早發初雁驛より官道を離れ。左折して近坂踰に入る。途中綠樹交樾中。時に潺湲を聞けども水を見ず。漸く谷村に近付て驟雨に逢ふ。

十二日。時々小雨。大越子を谷村に留め。予獨行再び甲府に赴く。蓋し意を決して金峯山に遊ばんと欲するに因るなり。笹子嶺を過ぎ鶴瀨に出づ。戶々黃雲母を賣る。月を踏みて府に入り土佐屋に投宿す。

十四日。小雨。鶴梁石菴を訪ひ。夜士馨の家に宿す。

十五日。天氣昨日の如し。予必ず金峯を極めんとするを以て顧みず。早朝士德と共に發し。和田嶺を過ぎ。御岳新道に入る。新道は井狩村圓右衞門が新に闢く所にて。溪に沿ふて山罅を行く。是を以て奇石あり。怪岸あり。瀑布あり石門あり。姿態百出。殆んど賴山陽耶馬谿の記を讀む如し。且稱し且讃して其家に至る。圓右深く喜び出て導を爲す。御岳社を過ぎ。猫坂嶺を經て。黑平村庄屋助四郎の家に宿す。村唯十二戶。別て上下二村となし。麥黍突厥白を以て常食とす。其貧一見して知る可し。然して金峯水晶の利あるを以て。其實甚だ貧ならずといふ。

十六日。小雨を衝きて早發し。七ッ嶺巫坂水晶嶺を過ぎて一空屋に入り。水を掬して飲み。榼を開いて食し。士馨が疲れたるを以て此に留め。歸るを待たしめ。予圓右と或は組に縋し或は樹に梯し。手足共に勞して登る。其險富士に踰るを覺ふ。况んや風雨大に至り萬壑怒號し。被むる所の笠飛び。衣袂沾濡して支躰に緊貼し。復た進む能はず。予魄既に褫はれ神も亦怯して。中途に止まんと欲するに。圓右微哂して之を强ゆれば。再び氣を皷し勇を買ひ。漸く登りて

頂に達するを得たりと雖も。四面黑暗。咫尺觀る所なし。所謂御鞍岩御手洗石萬代松隻手廻り石の如き者。皆手模脚捉中に之を得たるのみ。下路餓鬼峽を過ぎ。御岳祠下より猪狩村圓右が家に宿す。此山開時より今日に至り。士人の能く登る者。前督學平岩節齋。詩人横山湖山及び予と三人のみ。然して湖山の遊。予に先だつ僅に一旬間許なりと云ふ。

十七日。晴。午時士馨の家に達し。夜鶴梁石菴二子を訪ひ昨遊を談ず。四山炬火點々。螺笛銅鑼竟夕休まず。云ふ晴を祈り且蝗を追ふなりと。

十八日。朝晴。午後より雨大に至る。予連日登攀の勞を以て睡臥出でず。

十九日。濃雲。小雨終日止まず。

二十日。雨止む。士馨に辭別し。時に谷村に還らんとす。圓右送り導きて。迂路武田氏の古城を經るに。濠塹依存。苔石疊々たるのみ。英雄險を恃まざるの蹟。畧約見るに足る。駒飼驛に宿す。復雨。

廿一日。雨、發谷村に達す。此夜宿疾頓發。吐血二升。自ら三黃瀉心湯を作り。連服數劑始めて寢に就く。

廿二日。雨。圓右甲府に歸る。

廿三日。雨。官道鶴川水溢れ。行旅往來斷つの報あり。此夜圓右復た至る。蓋し鶴梁予が客中

にして病作るを憂ひ。來りて容を訪はしむるなり。懇情喜ぶ可し。

廿五日。雨。午後予又血を吐く。昨日に比すに十分の一のみ。

廿六日。雨。此夜近山亦た炬を燒き螺を吹き。時に竹砲を鳴し。以て晴を祈る。甲府諸村の爲の如し。

廿七日。雨。砲螺晴を祈る昨の如し。

廿八日。雨。晴を祈る昨の如し。

廿九日。官道野田尻驛崖崩れ途絶つの報あり。此日予又小紅を吐す。

三十日。晴。曦光簷に入る。快甚。午時小雨。晚又晴。

七月朔。陰。午後雨。

二日。天氣昨の如し。

三日。陰晴屢々更り。小雨時に來る。

四日。終日大雨。

五日。小雨。朝五時半發。予病餘なるを以て。竹兜子を雇ふて乘ず。中島村に至り雨止む。路を挾む稻田青々。大抵穗皆出づ。來時に比すれば觀大に改まる。野田尻に宿す。

六日。大雨。少し止むを待ちて發す。久霖の爲め。路傍岡田の粟は根腐り。黍は穗爛れ。又小

豆の如きは莢中芽を生じ。粒々蘖を爲せり。鶴川に至れば。來時潺湲たる小溝の如き小流の。今見る所岸遠く。中流黄濁旋盤渦をなし。石に觸れ煙を起せり。之を渡る者五六人排列し。一の巨竹竿を執りて吶喊流を亂す。予輩其肩に跨り兩脚垂下し。腋下より後に繞らし。跗を以つて其脊に貼し。兩手其額を案して行く。搖々として猶目眩するを覺ふ。上野原若松屋に午飯し。小佛嶺を踰えて同驛に宿す。夜に入り雨殊に甚し。

七日。雨。八王子驛德利龜屋に宿す。大和田日野二川暴漲して。渡る可らざるを以てなり。

八日。晴。又水阻を以て逗まる。

九日。午前小雨時々來り。午後全く晴。大和田川水落ち渡る可し。即ち發し。日野驛に宿す。此日輿を捨て歩す。草鞋の價來時に加へず。宿價亦來時に增さず。

十日。晴。日野川水落ち航す可し。則ち發し。學友國領村谷戸半三郎氏に宿す。

十一日。晴。家に歸り。此記を把りて家人に質するに。其雨暘多く符す。是を以て本年の雨。山間都府甚だ異ならざるを知る。而して四十五日間全晴を得る者。僅々四日に出でざれば。必らず稻米登らず。復び酉年の慘を見るあらんと思ひしに。物價始めより均一にして。跳起に至らざれば。予大に之を怪みしに。此年果して全國の秋穫甚だ薄からず。蓋し其害唯水を被むる州郡に過ぎざりしに因るのみ。於レ此始て知る。夏間多雨と雖も。凄風來らず暑威減ぜざれば。

大に憂を爲すに足らざる事を。

須磨日記

香川景周

須磨明石見むとて。京を立出づるは。八月二十日あまり四日の日なり。暮過る頃。伏水より舟出す。例の夜舟のさま。いと物わびし。往かひの舟人等。互みにのゝしる聲かしましう。更け渡るまに〳〵。風冷かに吹きとほりて。筥もる露さへこぼれかゝれば。晝の小笠などとり出でて。寢ながらに被ぎあへり。思ふどちなる浮寐なれど。さすがにわびしくて。めもあはず。

千鳥なく神崎がはのかはふねのうき寐わびしき夜半にもあるかな　凝式

おほかたの世のうき寐にはあらなくに何ぞは夜たゞかなし子の事　景周

など思ひつゞけゝる。

二十五日。明むとする頃。浦の初島に。舟はてたり。

ゆくみづのあさて小衾かつぎするあまがさきこそ明けわたりけれ　凝式

今日は。空も心も晴れわたりて。旅心地もせず。琴浦明神の社にまうづ。こは融の大臣を。いつき祭れるなり。河原の院にて。鹽竈の浦のさま。うつしもてあそび給ひし。當時。此わたり

登嶽日記

終

より潮を汲みあげて。都に運ばせ給ひしとぞ語り傳ふる。茨住吉すゞめ松原など。とり〳〵にあかず。此松原の傍に。日かげの森といふあり。

これやこのくるゝ日かげの森ならむ　蜻あらそふすゞめ松ばら　長翁

世の中をうばらの里に來て見ればすみよしといふ森はありけり

まつの葉にうちこそかゝれ古への津守の浪やこゝによるらむ

生田の森にまうづ。齋垣のあたりよろづ物ふりて。いとかう〳〵し。

つのくにの生田の森の秋風を今日はそでにもならしつるかな　景周

花のさく春にしとはゞ津のくにの生田のもりものどけからまし　信定

楠侯の碑のあたりにて。

きてみれば水さへあせて湊川のこらぬものはむかしなりけり　三貫

いにしへの湊川は。兵庫の方へ流れ出る川筋にて。今のにはあらざるといふ說につきて。よめるなるべし。こよひ兵庫に宿る。雨いさゝか降る。

二十六日。天氣いとよし。海づらなる。垂水の里にて。

海人がやのせとの高荻ふく風になびけば見ゆるあはぢ島やま　景周

未の時ばかり。願ひし須磨の浦につく。先こゝよりの見渡し。海上のけしき。更に類なし。只

あはれ〳〵と見るのみ。中々に言の葉に。言續けむも。今更びたりや。家毎に。かの竹簾かけ下して。故ありげに住みなしたる。いかでかゝげ寄らまほしきまで。なつかし。案内の翁を雇ひ出たり。先にたちて行く〳〵語らく。あれ見給へ。かの小さき山こそ。中納言行平の君。この浦に汐くみしておはせし時。立歸りいなばの山のと。ながめ給ひし山にて侍れ。いでとく書きとめ給へなど。猶えもあらぬくさ〴〵の事をいふなむ。中々興ある。さるあひだ。須磨寺を始め。內裏の跡。一の谷。上野の秋草をさへ。かぞへ見廻りて。海ばたの松陰なる。敦盛ぬしの塚を拜む。たえず浪風の音。ひゞき通ひて。昔のおもかげ。目の前に浮びつ。

たちよれば君をまのぶの草おひてあらぬ露さへおきそはりけり　長翁

見る處なつかしからぬはなし。關の跡といふも。誠はいづれなりや。覺束なし。さて舞子の濱に到る。松はこと〴〵く。小松ながらの老木にして。其たゞずまひ。海のありやうなど。更に世に似ず。聞きしよりは。いや優れり。あはれ物の心知れらむかぎり。ふりはへてもとふべきわたりなりけり。皆人浪打際にうかれ出て。心のまゝに酒酌みかはしつゝ。歌ひ上げたる歌ども。多くは忘れたり。

あくがるゝ心のつひに歸らずばわが世はすまにつくしはてまし　長翁

浪に入る夕日のかげのたゆたひにあらはれわたる吉備の島やま

見わたせば鷗にまがふとまがしま心もなみに消ゆる今日かな　景周

はる〳〵とこがれし須磨の浦なみを今わが袖によせて見るかな

なびくらむ汐屋のけぶりたえはてゝいよ〳〵寂し須磨の浦かぜ　凝式

心ありて誰かあはれと聞かざらむ須磨のうへ野のいりあひの鐘

いかばかり誰にこゝろを沖つ波みえがくれする海人のつり舟　信定

故郷によしやかへらむ播磨潟とてもながめのはてしなければ

大船のつらなる帆かけ西の海の夕日のうへにあらはれにけり　三貫

秋の日のくれなむとする海原にきえ殘りたる紀路の遠やま　行敬

こゝにしてきけども哀し涙の音かぢ枕せばいかにかもあらむ

淡路島のみ。目近う暮れのこれり。

明石がた迫門のあら汐はやければこゝにうきよる淡路しま山　景周

今日は心もおちゐて。くみに酌みたればにや。おの〳〵足も千鳥によろめきつゝ。明石の宿りまでと。たどり出づ。暮れはてゝ啼き出る虫の聲〳〵。自から涙の音に打合ひたる。磯邊づたひの醉心。おもしろしとも夢ごとちす。

今はとて急ぐ濱べのまさごぢはゆけども歸るこゝちのみして　長翁

暮ぬとてたどる木かげは松蟲の聲ばかりにもなりにけるかな　信定

濱づら。松蟲いと多し。初夜過る頃。たどりつきて龜屋といふに入る。醉いよ〳〵めぐりて。頭もたげず。まろび臥したるを。此宿のはした女子。たかり扶けて。やう〳〵枕とらせたり。

さて明けてのち。信定がいふ。

亂れあしのかりの一夜に誠をばあかしをとめぞはかなかりける

さるなさけ。ありしにやあらむ。知らず。同じ夜。

通ふらむ千どりの聲をあきたへの枕かへしてきくねざめかな　長翁

二十七日。柿本の社に詣づ。さてこゝより。淡路島に渡らむはいかに。高砂をとひてむやなど。いひあへれど。昨日の須磨の景色には。いかでか勝るべき。いざ引きかへしてむとて。やがてこなたざまに歸りて。又同じ濱づらに下立ちて。酌みかはす。

わが心うつせ貝にはあらねども明石のうらにのこりけるかな　信定

更に立歸るべき心地こそせね。限あらじをとて。名殘惜みつゝ。兵庫に來て宿る。

二十八日。生田の奥なる。布引の瀧二つあり。上なる雄瀧といふかた。いとよし。されど只こともとより漲り落ちて。さのみ景色なきは。惜らしとて。各細き道を傳ひ下りて。瀧壺の傍に至れり。岩ほの上に立もとほりて。遙に見あぐれば。始めて幾千尋をか。落來らむとも知られ

ず。

はかりなく落來る瀧のもとに來て水のすがたを天に見るかな　景周

生田山いはがき紅葉きてみればたきのまぶきのそむるなりけり

生田やま麓のもりによどむらむたきよりおろすさを鹿のこゑ

世に遠くひゞきわたれる布引のたきをおりたちけふ見つるかな

やま姫のてよりの糸の緒を長くおりてかけたる布びきのたき　長翁

この歌ども。おのかじし。岩ほに書つけたり。　凝式

摩耶山に登らむとて。生田山の麓づたひに上る。昨日の濱邊の遊にひきかへて。いと苦し。半上りくれば。海原も高くなりたらむやうにて。大舟小舟そかひに浮べり。木根岩根に憩ひて。飽かずかへり見るも。さすがなりや。辛うじて頂きに至りて。坊の棧敷より見わたせば。又類なし。かの阿波の鳴門も。遙に見ゆめり。かゝる高山の上にしも。あてやかなるが。これかれ上れり。めづらかに覺ゆ。さるは。此山鎮めいませる佛母の誓によりてなるべし。さて麓に下りくれば。上野といふ里あり。家疎らにあり。こゝの景色。須磨にもおくれず。和田の岬。蘆屋の里など。目の下に見ゆ。未だ日も高けれど。かゝる景色を。見捨てむやはとて。此里に宿りをもとめて。例の酌みかはす。

思ふことなだのまほ屋のゆふ煙みるさへをしき心地こそすれ　長翁

おもかげは今も殘りて津の國のあしやの里にけぶりたつ見ゆ　凝式

夜になりて。漁火のほのめき出たる。あはれ物がなしく。心あるに似たり。

またや見むまたや見ざらむわが命いくたの沖の海士の漁り火　長翁

夜網すとこぎ連れるいざり火の消ゆるところや和田の松ばら

よを渡る人のわざとも思はれず波間に見ゆる海士のいざり火　信定

長翁凝式は。摩耶がね颪ふけわたるまで。板敷の上に。衾被ぎ出て。ねもやらず。おのれ信定らは。今日の山踏に疲れはてゝ。引かつぎて臥しぬ。曉がた翁二人に驚かされて。起き出て見れば。有明の月いと細う。海の上に出たり。

あつまやのまやの山べに一夜ねてなだのまほせの月も見しかな　景周

よべの寢覺に。

今よりの秋の旅寢にこりよとや夜たゞなくらむさをしかのこゑ　三貫

二十九日。つとめて宿をたつ。辻村といふに來れば。武庫山ほど近し。

白たへの雲のうすぎぬかけながらたがぬぎすてし此かぶと山　長翁

海ばらに昨日入りたる夕づく日けさ山の端にいでにけるかな　行敬

西の宮にまうづ。こゝより難波に至るべきを。昆陽猪名野を。とはざらむも口をしとて。道を踏變へて行くほど。いと〳〵遠し。やう〳〵に笹原を分盡して。池の堤にはひ上りて見れば。底もあらはに水あせはてゝ。いと思ひの外なり。周りは。都の廣澤よりも。廣からむと覺ゆ。

かれ〳〵の水草かたよる秋風に千どりなくなり昆陽の池水　凝式

衣手に日かげかざして見わたせば猪名の松ばら時雨ふるなり　信定

池の東の方に松原あり。古く猪名野をくれば有馬山と。詠みけむには。此わたりより。程遠しといへども。さる高嶺ばかりは。見ゆべきをとて。それかと尋ぬるを。さだかに答ふる人なし。猪名川を舟わたりして。日斜なる頃。瀨川の里に宿らむとす。逢ふ人稀にして。宿さへいといぶせく。さう〳〵しき片田舍なり。

物毎におくれはてたる宿なればあきのゆふべも蚊遣たくなり　凝式

淺茅生のもみづるやどのきり〳〵す我たび心ねにぞなくなる　三貫

九月一日。よべのわびしさに絶かねて。夜ぢめに宿をたちて。古曾部の里なる。能因が庵の跡をとふ。明放れたれど。猶物闇き藪かげにして。人うとげなり。庵の跡といふに。花の井と名づけたる水あり。

古への影こそみえね花の井のみづのこゝろは今もすみけり　凝式

畔道を十歩ばかり行けば。小さならぬ碑ありて。かの秋風ぞ吹く白川の關などの秀吟。二つ三つ彫りつけたり。

志らかはの關までかけて大かたの秋のあはれはこゝに盡しぬ　長翁

露わけてこそべの宿を秋とへば山の奥よりさびしかりけり　景周

渚の院をはじめ。とはまほしき跡のみ多かれど。おの〳〵都ほこりにやあらむ。たゞ急ぎにいそがれて。夕つ方。鴨の川づらのやどりに歸りつきぬ。

弘化の四とせ長づきのはじめ　景周志るす

須磨日記　終

十勝日誌

松浦竹四郎

遠山合ㇾ烟。草木萠ㇾ芽。積雪日に薄らぎ。檐滴恰も瀧の如し。余は性命の縮まる如くに思ひ。虻田土人共へ手當弁に歸村の糧米を渡し。早々十勝越の事を支配人に談じ。敎導者を出さしむ。河端に出て眺むれば。渡船は氷の間を此方彼方往來するに。十數丈の氷流れ來り。山をも欺く氷雪碎けて。濁る雪けに押流され。見るに膽寒く。實に巨鯨も北海にて是の爲に打斃さるゝも宜なり。何ぞ一韋の小舟心もと無ければ愈陸行と決し。飯田某にも同行を勸めぬ。

二月十九日。快晴。小使イソラム土人八人ノンク、サダ、ヤアラクル、アイコヤン、イナチェサン、タカラコレ、イコリキナ、サケコヤンゲ、等。上川の者のみを連來る。褌。手拭。烟草。酒等を與へ。途中の規定を申渡し。陸行すべき由談ずるに。是よりトックの間冬分はモウライタ領アツ川筋より上り。アソイワの西南を越え。トウベツの上を渡り。カバトの南の麓を出てウラシナイに出る由なるが。此度は大川近くを行かん事を勸む。

二十日。四野催ㇾ烟。春色雖ニ十分一。西風忽舞ㇾ雪。豈風土の異を覺ゆ。東岸に渡り。ワツカウイより。山に入らんとするに。總て積雪。何を目的と爲す物もなければ。

いづくより分やいらまし白妙に見ゆる限りは雪の山の端

此邊谷地にて蘆狄原氷と所々劈痕けるを。此方彼方廻り雜木原に入る。暫時にて大川端なるヲヤウ一里餘に出る。此所乙名サビテアイの家有り。上の方アソイワ迄原幅三十餘丁長七十餘丁にて眺望よろし。總て針位辰巳に向て上る。三里餘タカウナイ小川を越えて原三里餘有り。過ぎてトマンベチマナイ小川中に穹廬を作りて宿す。

二十一日。寒威凜然。月照氷雪。恰も鏡の如し。平明出立一里餘ツヘシナイ小川を過ぎて半里トウベツ川巾七八間氷の上を越る。源はアソイワとアツタ岳の間より來る。針位寅卯に向ふ。一里餘ユワエサン山平を過ぎて一里餘シュノツ川巾二三間を越て原有り。土地高くして眺望に宜し。子カバト、寅トック、卯ユウバリ、巳シュマヽツフ、上にシュノツ岳と云有り。山脈カバトに續く、雪融捗取難し。一里半餘シュマウニウスナイ小川を過ぎて一里餘シベツ川巾六七間源にシベツ岳と云有り。夕方より雪降り出す。各假屋を吹倒されぬ樣に。木を切り是を鎭石と成して臥る。寒威甚し。此田越にても覺えざる程の事也。土人代る〳〵起て火を燒きけるが。四五町と思ふ邊りに狼二三疋頻りに吠えたり。其聲熊の吼ゆるより何と無く物寂敷。茅吹く風も。若や雪中餓て我等が食を喰ひに來りもやせんかと。寐られず。月の出比に成るや肌愈寒く。耳を清し聞けば。ヒン〳〵と山に響く音はいよ〳〵心寥しく。其音を土人に聞けば椴の木の寒威に凍裂する也と。今頃は少けれ共。十月比は其音嚴敷して椴られざる也と語り

ぬ。夜明前雪ます〳〵降出しぬ。

廿二日。犯ニ風雪ニ發。七八町タヲマナイ小川五六町ヌツハヲマナイ小川廿五六町アツウシナイ小川十七八町タエノスケ小川半里餘トムシュイ小川餘り風雪嚴敷。目を開き難きに依て宿す。

廿三日。快晴。子丑十七八丁に向ふ。サツビナイ小川十八九丁チソキナイ小川十四間幅三間源はカバト山より來るよし。十八九丁ヒンタウスナイ小川十丁餘チホヒチヤン巾十間餘長一里餘鮭多く此所にて卵を置る由也。一里過ぎてウラシナイ小川此所人家貳軒有り。十七八町キナウスナイ小川十五ド六丁過ヱ幅五六間長半里餘と云沼有り。十七八丁ピラ赤萌を過ぎて十町餘カバト幅五六間源カバト岳より來る。此傍にて宿す。土地頗る暖氣なり。

廿四日。黎明出立。鐵位丑寅に向ふ。十七八町チカフセトシ一里半餘トレフウシナイ小川一里余ウラシベツ川小此所にてセツカウシに逢ふ。一里餘同道し行く。トツクベツ幅廿餘間源ショカンベツ岳より來る。此所破れたる氷の上に樹枝を渡し越る。十三四丁原を過ぎ。セツカウシ家に一宿し。翌一日風雪にて滯る。

廿六日。天陰。河水愈漲。雪汁吼々として十疊廿疊の氷を押流し來る。是より向岸へ渡り。一里餘原を越え。ラウチナイ小川ホンチボヤウシ小川廿七八丁ホロチホヤウシ小川此邊樺柏木原に出る。一里餘ウリルン長き沼也等越え二里丑の方に向ふ。ユウベチツ小川を過ぎ一里餘シュマウナイ小川十七八丁過ぎてリイフル坂也を下り。ホロノタ出岬。爰にて船を呼びて向岸ベツバラに越る。召連し土人イソラムの家に宿するに。其隣なる婆ヤエケ久敷病氣の由にて。女子共多く見舞に集りたり。其中一人の婆有り。是を

ヘシルウタレと云て此地の巫醫なり。病者有れば總て神に祈り。又藥等を差圖するよし。其祈禱と云は。病者の枕元に小席を敷き。太刀短刀鍔。矢筒等を錺り。エナヲを立て山海の神に祈り。何れの方より何草を摘みて用ひよ。又全快の有無等を示す者。本邦の巫に異なる事なし。又奥地にては待人の遲速。走り人の方位を指し。其餘種々の奇なる事等を行ふ事有り。ソウヤ邊にては是をシノチと云也。其藥品の一二を記すに。風邪には石防風を刻み烟草に接取呑む。眼病には紫苅を水に浸して附け。產後血の道には沙參また山扁豆玫瑰。また是を小兒の口中の瘡に用ひ。癪には竹節人蔆。胸の痛むに山芎藥。腫物の吸出しに舞鶴草を唾にて浸し附けてよし。癰毒には佛甲草。胸骨の痛に金鷄脚石長生。腹痛には邪蒿。寒邪を拂ふに辛夷また臼菅沼草。鼻血に水楊梅。其外牛皮消トウカマフ知升麻キシキント知細辛黃蘗龍牙菜。種々の採藥にして却て和風の藥を用ゆる事を好まず。其功驗も却て其風土に適するや治する者多しと語りぬ。

廿七日。快霽出立。爰に上川土人の船十餘艘曳上有りたり。其故を聞くに。去冬濱より雇を仕舞ひて歸り來るや。川筋凍合して櫂は氷り附て重く成り。時々山鉈にて打拂へども。寒威甚敷故。舷にかゝる滴り凍りて舟足重り。漸々此所迄來れ共。是より一棹も上る事を得ず。舟を揚げ置き荷物は負行きしと語る。扨左樣に凍らぬ間に上り來らばと問ふや。何年にても上川迄舟

にて通るべけれども。去年は御組頭の御通行が後れし故。歸村も留められ如ㇾ此難澁に逢ひしと聞くにも。實に民を使ふに時を以てすとは。是等の事かと獨言し行く。此邊野原にて西北ウリウの山々を受け。頗る暖地にして雪の消方も早し。寅卯向十八九町サルコトイ小川一里餘メム小川五六丁ニウシヘツ小川十町を過ぎて川端に出て呼ぶや。女子共氷の間を小舟に棹さして來りぬ。

川半より南淺瀨の所は。氷にて浮々したる上に越るや。イシヤン人家四軒。此所に廿三四歳にて。帳面に洩れ未た夫を持たず。老母の介抱をして濱に下らざる者有り。其故を聞くに頗る至孝の者なりしかば。飯田深く其孝心に愛で。召連しサケコヤンケ上川土人こそ未だ獨身なれば。是を娶すべし。我歸りて其事好きに取扱ひ遣はすべし。また土人風に。初めて男に見ゆるや。袋と云ふ物を作りて是を着するが。其木綿をも我が贈るべしと。懇に言はれ。平日の行狀を聊か記して出立し。廿餘町ヲトイノホリ川小を過て山に上る。雜木立。五六町シイベヌカル小川斷崖の上を通り。下を見れば川筋屈曲蜿轉たり。此間舟路凡十三四里タムニ十五六丁クナシベヲマナイ小川五六町ビラノシケヲマナイ五六町キナチヤウシナイ五六町エクトシユマ五六町タツカシユマ五六丁を過て平野。廿七八町ナイタイペ川幅六七間大木を倒して渉り。今宵は爰に大岩窟の有るに入て宿らんと思ひしに。其山根雪に深く埋もれ知れ難し。依てまた少し行き。廿チランナイ小川と云へる所の川端に宿りぬ。

一夜をと賴みし岩ほ埋もれてはてなき野邊に假寐しにけり

廿八日。狂風舞レ雪。四野如レ霾。恰も三冬の心地せり。針位寅卯出立廿餘町て椴山に上る。其嶮掌を立つる如し。シキウシバ一歩を過てば數十仞の谷に落るべきの危所也。凡十五六町過ぎてシキウシバ（ポロの上なり）カモイコダンといふに至り見る。奇岩怪石の積雪其奇を倍し。兩山の樹木に降積る雪は霜及を立たる如く。彼の劒山も如レ此かと怪まれ。厓の零糖春氣に折るゝ音は四山に響き。ホロレブシベの間より落る水は。合する氷の間に落入り。其音梭尾螺を吹くが如し。ホンノミンダルマイとて兩岸より差出たる岩に積連なりたるは。白虹を現ぜしかと見るに。近よれば又石橋の如し。テツシヲマナイの瀧は珠簾を垂るゝ如く。其眺望總て改まりぬ。此間凡二十町過ぎてハルシナイに至り。是より斷崖たる上を十餘町ベングアソナイ小川に至り。椴山に上る。其苦辛言ふべきなし。廿餘町岸傳ひ十餘町ルチシボリ山上に至り。樹間より東の方を望むに。石狩岳チクベツ岳ヘヽツビエ岳連綿たる其間。曠野恰も銀盤の如く。是より山。まゝ小澤を四五ケ所過ぎ。凡一里チンヲナイ五六町ヨウコシナイ五六町エヌブト巾三四間の傍に出て宿す。

廿九日。傍レ流雜木立を上る。小山二ッ越え二十餘町原野五六丁を下り。キンクシベツの後を下り二十餘町チクベツト大川の大番屋に着す。爰に玉川慶吉越年なしたるに出逢ふ。先長途の安等を賀し。糀四升玄米八升を乞ふて酒を釀らしめ置き。上川土人の分手當品等を持たせ。殘らず家に遣はしぬ。此邊狐多き由にて。セツカウシは。一升入の油樽の古きが有りしを持來り。暫時考へ居りしが。是に三寸釘三本を三方より打ち。裏の方に投置きしや。其夕方狐一疋を獲來り。我等に饗しぬ。其捕方。桶の中の油臭きが故嘗めんと首を突込むや。釘は首にかゝり抜けざる時。隱れ居て打殺すなりと。夜イワンハカル。クウランケ來る。

晦日。クーチンコロ。タヨトイの兩人。熊の鮮肉を以て我が安を祝し來りぬ。

三月朔日。和暖。雪大に融す。上川村々の人家を廻る。所々にて。ルイベと云て鮭の生を雪に漬置きしを切て。サル茅盆に盛り。マキリ小刀と柳の枝一本に鹽を一撮添へて出す。其譯は生にて喰ひ得ざる人は。マキリにて串を削り是に刺し。火に炙りて喰ふべしと云事の由。又一種コサ（葎の一種唐花草）と云草の根を煮て出し。また牛皮消を燒て出すも有り。夜アサカラにて宿し。翌夕方大番屋に歸る。

三日。漉レ釀作ニ木幣一。トカチ越の人足を定む。クーチンコレ、タヨトイ、アイランケ、シリコツ子、ニホウン、サケコヤンケ、アイシリコツ子は兼てトカチ越の事案内なれば。是を先導とす。荷物割をなし。コヤン、イワンハカル、セツカウシ、タカラコレ、サタ、エナチエサテ、ヤーラクル、

三人を濱へかへし遣はす。ノンリ、イソラム、イコリキナ、

四日。暖天。上川土人一同を呼び神呑をなし。旅行の安を祈り余も一幣を奉る。土人の言に。河水大に減じたり。山々冷かへりて寒きなるべきとぞ。

五日。早間出立。五六町ベ、ッ川を越てクーチンコロ家に到るや。イソテクも昨夜山より歸り來

りしと。熊一頭を背負ひ爰に余等を待ちたり。是より原道五六町ニヨベツ十四五町ニケウルヽホンケシ十二三丁トヌシコマナイ等針位巳に向ふ。シタナイ小川小メヽトツケシ小川シヲヒンニウシ小丘イワンコンクッシ小川ホロヌ小川ホロトウブヽッに入るウフシノボリ二里半餘の麓を崖を樹根に取付き下り七八町ベヽッ幅十二三間の岸に出る。雪解漲りて越ゆべき手立無く工夫に煩ひ居しや。遙上の方に大樹一本倒れて川中に横はる。然れとも其梢細くして中々向ふまで渡り難きを。タヨトイ裸に成り樹を傳ひ行き。枝を切拂ひ其を渉りて中程迄至り水中に飛入りしに。漲水腰迄にして。西岸に到るや倍す淺し。見るより一同裸に成り木を渉り川中迄行き水に入り西岸に越え。茅野に火を附け身を温め出立す。二十餘町チマクシベッ是より小川皆トウセンナイ小川ホロアッナイ小川を過きて小山に上る。此邊暖地にて雪多く融けたり。早蕨。欵冬花。献春菜。茖葱等芽を萠せり。一里餘ホロナイ小川に到り宿す。夜欵冬花を摘みて茄物とし喰ふに内地の物と異にして苦味少しもなし。夜狐一疋を取る。六日。驚風時々催レ雪。しばし行く一里カヲナイ十五六町チキケナシ總て野原。針位辰巳に向ふ。一里餘ビエベッ川幅十餘間小石川急流瀧の如し。嚴冷なる指を墜すが如し。十七八丁ヒエナエイ小川平山に上る。一里餘茅野廿丁を過ぎて嶺に上る。四方山々能く見えたり。此原に火を附けしや。其燃行くこと早くして獸の驅る如し。十餘町下りてホンヒバウシ七八町ホロヒバウシ是迄の小川皆ヒヘに入るを過ぎて。椴山一里餘ホンカンベッ三四丁ホロカンベッフに落る是よりソラ等を過ぎ。谷地中蘆荻原五六町を越てフッラヌイ川小。此原ビエ

の硫黄山より落る故に臭氣鼻を衝き。一掬を試みんとなすや土人等毒有りとて制す。往古トカチ土人塞中此所を通り。此川のみ凍合せざる故に呑みて直に斃れしと言傳ふ。如何なる寒氣にも凍らず。また一尾の魚も住む事無き也。越て原道十七八町リヲナイ小川レリケウシナイ小川に宿す。扨爰より眺むるに。東はヒエの麓三里位西はソラチの西の山々迄凡十二三里。南北は五六里の間目に遮る物無き原也。一封内をなし。地味山に圍るゝ故に暖にして。内地に比すれば相應の一ケ國と思はる。飯田も實に長歎し。此の如き地有る事誰も知らず。歸て此事を說くとも誰か信とせんと云。土人に火を放たしめ寐るに。火氣立つに隨ひ風起り。夜に入り四面に燃延び。天をも焦す勢也。

七日。曉風愈募。火氣倍盛也。燒原十餘丁を行きフシコヘッ川石を過ぎて五六丁イワヲヘッ川中是も礁山より來る水にて酸氣有り。十七八丁レホシナイ五六丁コロクニウシコッ平山樺原を上る。凡一里ニヨトイ廿餘丁椴山笹原に入る。五六町下りヘヽルイ川大石を過ぎて。十七八町サッテクベヽルイ轉太石磊々とし。其上に雪の積りし上を渉り行くに。時々石の間に足を陷込みて危き事言はん方なし。廿餘丁上りて昨日通りし橇の跡を見たり。又五六丁其上に假屋の跡有り。是トカチ土人の獵に來りし跡なりと。其故を聞くに。假屋の作り方にて知るとかや。此邊椴蝦夷松陰森とし。天色見え難し。廿餘丁夜雪を融し飯を炊ぎしに。其夜の明方小流の音を雪の底に聞出しぬ。依て傍の木に皮を剝ぎてしる